君ヶ台遺跡（第7次）
松原遺跡（第4次）
相対古墳群（第2次）
東原遺跡（第3・4次）

2019

ひたちなか市遺跡調査会
ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

君ヶ台遺跡（第7次）
松原遺跡（第4次）
相対古墳群（第2次）
東原遺跡（第3・4次）

2019

ひたちなか市遺跡調査会
ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

例　言

1　本報告書は茨城県ひたちなか市中根2129-2において2006年6月1日から6月30日に実施した君ヶ台遺跡と，田彦字松原764・765において2009年1月26日～3月3日に実施した松原遺跡，金上1119番地他において1988年4月18日～4月23日に実施した相対古墳群，高野974-6において2006年と2007年5月28日に実施した東原遺跡の埋蔵文化財発掘調査についての報告書である。

2　発掘調査は，君ヶ台遺跡が日立電線株式会社ワイヤレスシステム事業部統括部エンジニアリングセンタによる鉄塔建設，松原遺跡が平野賢一氏による宅地造成，相対古墳群が茨城ウエルマート株式会社による店舗建設，東原遺跡が有限会社河野鋼鉄店による工場建設に伴う発掘調査であり，それぞれの事業者より委託を受けたひたちなか市遺跡調査会（会長　川崎純徳）が実施した。

3　発掘調査の従事者は，以下のとおりである。

（1）君ヶ台遺跡（第7次）
調査団長　川崎純徳
調査員　斉藤 新・石井 篤
調査補助員　浅野悦子　後藤みち子　黒子元明　小池 清　渡部和夫

（2）松原遺跡（第4次）
調査団長　川崎純徳
調査員　石井 篤
調査補助員　栗原昌子　小池 清　深井 昌　渡部和夫

（3）相対古墳群（第2次）
調査団長　川崎純徳
調査員　鴨志田篤二
調査補助員　大内美子　大谷和枝　大谷 登　小野千恵子　神永義明　鳥崎清子　立原光子

（4）東原遺跡（第3・4次）
調査団長　川崎純徳
調査員　石井 篤
調査補助員　栗原昌子　小池 清　深井 昌　渡部和夫

4　整理作業の従事者は，以下のとおりである。

稲田健一，榎澤由紀江，小貫栄子，海後晴美，菊池順子，桐嶋美子，後藤みち子，佐藤富美江，助川 涼，鈴鹿八重子，鈴木素行，中嶋順子，西野陽子

5　本書の執筆と分担は，以下のとおりである。

君ヶ台遺跡　Ⅰ・Ⅱ：斉藤 新・鈴木素行　　Ⅲ：鈴木素行

松原遺跡　Ⅰ：栗田昌幸　　Ⅱ－2：鈴木素行　　それ以外：稲田健一

相対古墳群　Ⅱ－2：菊地順子　それ以外：稲田健一

東原遺跡　　石井 篤・稲田健一

6　石器及び礫の石材の同定は，矢野徳也氏に御指導をいただいた。

7　発掘調査の出土資料は，ひたちなか市埋蔵文化財調査センターに保管されている。

8　本書の作成にあたっては，次の方々に御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（50音順・敬称略）

常陸大宮市教育委員会，日立市郷土博物館

猪狩俊哉・石井聖子・石橋美和子・大滝駿介・栗田昌幸・田切美智雄・千葉美恵子・照沼沙保里・中泉雄太

目　次

君ヶ台遺跡（第７次）…… 1

Ⅰ　遺跡の概要 ……3

Ⅱ　検出された遺構と遺物 ……7

1　第１号溝状遺構 ……7

2　第１号住居跡 ……7

3　調査区出土遺物 …… 10

Ⅲ　調査の成果と課題 …… 34

1　土器埋設石組炉について …… 34

2　男根状石製品について …… 37

松原遺跡（第４次）……43

Ⅰ　遺跡の概要 …… 45

1　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 45

2　調査に至る経緯 …… 45

Ⅱ　遺構と遺物 …… 48

1　確認した遺構 …… 48

2　縄文・弥生時代の遺物 …… 49

3　古墳時代の遺構と遺物 …… 50

第１号住居跡　第２号住居跡　第３号住居跡

第４号住居跡　第５号住居跡

遺構に伴わない古墳時代前期の遺物

調査区出土の古墳時代遺物　小結

4　古墳時代遺物観察表 …… 59

5　その他の遺構と遺物 …… 61

相対古墳群（第２次）……63

Ⅰ　遺跡の概要 …… 65

1　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 65

2　調査に至る経緯 …… 65

Ⅱ　遺構と遺物 …… 66

1　第２号墳 …… 66

2　その他の出土遺物 …… 70

東原遺跡（第３・４次）……73

Ⅰ　遺跡の概要 …… 75

1　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 75

2　調査に至る経緯 …… 75

Ⅱ　遺構と遺物 …… 77

写真図版

君ヶ台遺跡（第７次）

Ⅰ　遺跡の概要

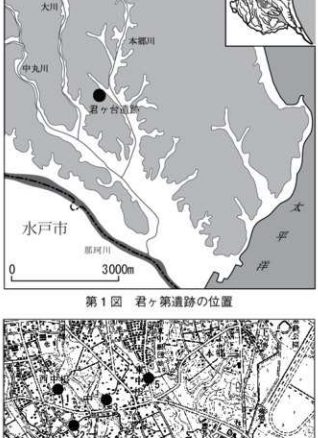
遺跡の位置　ひたちなか市は，茨城県の海岸部中央にあり，太平洋へと注ぐ那珂川の左岸に位置している。那珂川沿いには水田化された低地が広がるが，市域のほとんどは，標高 20 ～ 30m のほぼ平坦な那珂台地で構成される。那珂台地は小河川により開析され，那珂川の河口付近では，本郷川，大川を集めた中丸川が合流する。中丸川流域の台地縁辺部には，多くの遺跡が形成されており，君ヶ台遺跡もその１つである（第１図）。

君ヶ台遺跡は，ひたちなか市中根地内に所在する。東を本郷川，西を大川に挟まれた台地上にあり，本郷川に面した縁辺部に位置している。すぐ北側に支谷が入り込み，縄文時代の遺跡については南側の埋没谷を限界とするらしく，半島状の台地突端部を中心に遺跡の広がりが捉えられている（第３図）。

遺跡の環境　中丸川流域の台地縁辺部には，君ヶ台遺跡の他にも縄文時代の遺跡が確認されている。縄文中期に限定して概観しても，柴田遺跡（第２図１），西中根遺跡（２），石光遺跡（３），館出遺跡（４），上ノ内貝塚(６),尼ヶ祢遺跡(７),釜神遺跡(８),下原遺跡(９),三反田蜆塚貝塚（10）が分布する。このうち貝塚が伴うことが確認されているのは，君ヶ台遺跡の他に，上ノ内貝塚と三反田蜆塚貝塚の合わせて３遺跡である。

釜神遺跡からは前葉の「五領ヶ台式」「阿玉台Ⅰｂ式・Ⅱ式」が検出されており，遺跡群の中では最も古い。ここは，「上ノ内貝塚下の水田中の遺跡」（藤本 1980）と報告されたように，低地に形成された遺跡である。直上の台地に形成された尼ヶ祢遺跡からも，「阿玉台Ⅱ・Ⅲ式」「加曽利Ｅ１式」の土器が採集されているが，未だここに住居跡は確認されていない。下原遺跡は，中葉の「加曽利Ｅ１式」の住居跡が調査されており，集落跡であることが確認されている。「加曽利Ｅ２式」の住居跡は，館出遺跡，三反田蜆塚貝塚にあり，君ヶ台遺跡と上ノ内貝塚には，斜面貝塚が形成された。この時期から遺跡数が増加し，石光遺跡からも「加曽利Ｅ２式」が採集されている。後葉の「加曽利Ｅ３式・４式」の住居跡は，柴田遺跡，君ヶ台遺跡，三反田蜆塚貝塚にあり，西中根遺跡からも土器棺や粘土採掘坑が検出されている。「加曽利Ｅ２式」からの遺跡が継続するとともに，さらに遺跡数が増加する。

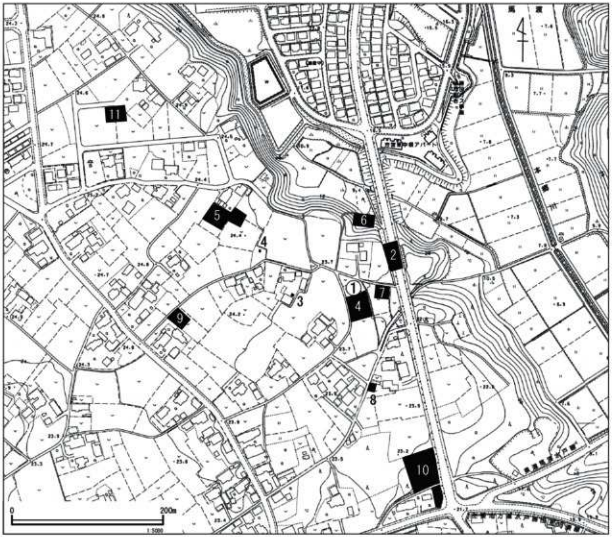
全体的な動きは，本郷川流域の下流から上流へ，さらに大川流域へと拡大しており，本郷川のさらに上流でも向野Ｅ遺跡において「加曽利Ｅ３式・４式」の集落跡が確認されている。君ヶ台遺跡と上ノ内貝塚の斜面貝塚は，ともに「加曽利Ｅ３式」で形成を止めており，「４式」には，君ヶ台遺跡や三反田蜆塚貝塚など住居跡・土坑内



第１図　君ヶ第遺跡の位置

1. 柴田遺跡　2. 西中根遺跡　3. 石光遺跡　4. 館出遺跡　5. 君ヶ台遺跡
6. 上ノ内貝塚　7. 尼ヶ祢遺跡　8. 釜神遺跡　9. 下原遺跡　10. 三反田蜆塚貝塚

第２図　君ヶ台遺跡の環境（縄文時代中期遺跡の分布）



第３図　君ヶ台遺跡の調査地点（番号は第１表に対応する）

貝層のように規模が縮小している。

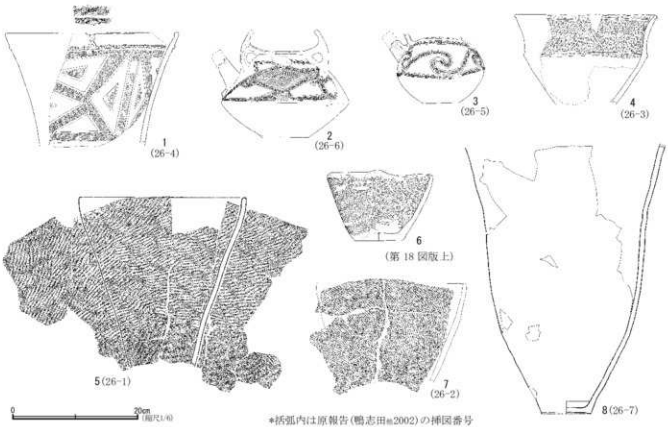
既往の調査　君ヶ台遺跡については，現在まで11次に及ぶ発掘調査が実施されてきた。そのうち縄文時代の遺構や遺物が検出されたのは，第１～７次調査である。第１～６次の調査について以下に概括する。

第１次調査は，1951（昭和26）年に勝田町郷土史編纂委員会が実施したもので，甲野勇の指導のもと伊東重敏等が調査に参加したと伝えられている。報告書が刊行されなかったことから詳細は知り得ないが，伊東により遺構分布の測量図のみが公表された（伊東・川崎1966）。それを見る限りでは，10m四方に近い面積の調査区であり，その南端に東西方向の溝状遺構が１条[註1]，中央から北側に小竪穴状の土坑が７基の他，小規模なピットが検出されている。ピットには，石囲炉ではないかと見えるものが含まれており，小規模なピットを柱穴とする住居跡も検出されていたように窺える。それぞれの遺構に伴う遺物は明らかでない。調査地点の位置についても記録を欠くが，子供の頃に調査を見たという地元の古老からの聞き取りにより，第４次調査区に隣接し，第７次調査区からも近い位置であったらしい（第３図１）。今後に調査区の位置の確定が必要である。

第１表　君ヶ台遺跡調査一覧

順次	調査年度	遺構	報告文献
1	1951	住居跡，土坑群，溝1	伊東・川崎1966
2	1979	住居跡2，土坑群・貝塚	川崎・鴨志田1980
3	1994	住居跡2，土坑3	鴨志田m1995
4	1998	土坑1	鴨志田m1999
5	2001	住居跡1，土坑1	鴨志田m2002
6	2003	貝塚	鴨志田2004
7	**2006**	**住居跡1，溝1**	**本報告**
8	2006	なし	石井2007
9	2010	土坑2，溝1	佐々木m2011
10	2015	なし	佐々木m2016
11	2017	住居跡1	佐々木m2018

第２次調査は，1979（昭和54）年に道路敷設工事に伴い実施された。40m × 25mほどの調査区から，住居跡が２基と小竪穴状を含む土坑群が検出されている。住居跡と土坑の覆土中には，ヤマトシジミを主体とした小



*括弧内は原報告(鴨志田㎡2002)の挿図番号

第４図　君ヶ台遺跡第５次調査出土土器

規模な貝塚が形成されたものもある。住居跡は１基（第３号）が「加曽利Ｅ３式」，もう１基（第４号）が「４式」であり，土坑群は概ね「３式」に形成されたものである。

第３次調査は，1994（平成６）年に個人住宅の建設に伴い実施された。４ｍ×４ｍの調査区から，住居跡が２基と小竪穴状を含む土坑群が検出されている。主体となるのは「加曽利Ｅ２～４式」であるらしい。

第４次調査は，1998（平成10）年に遺跡範囲と遺構分布の確認を目的として実施された。南東に位置する第１調査区と北西に位置する第２調査区の２つが設定されている。４ｍ×２ｍの第２調査区からは，土坑が１基検出された。幅１ｍのトレンチを５本設定した第１調査区からは，遺構が検出されていない。第１調査区は，北側に向かってローム層までが深くなり，多量の遺物が出土した。ここは，埋没谷の谷頭付近に形成された遺物包含層と推定される。「加曽利Ｅ２～４式」の土器が主体である。

第５次調査は，2001（平成13）年に個人住宅建設に伴い実施された。幅1.5m ないしは２ｍのトレンチが３本設定され，住居跡と土坑が検出された。住居跡は１基あるいは２基とも見える報告ではあるが，後期前葉「堀之内２式」の住居跡が調査されている。第１～４次の調査区では，「堀之内１式」までの土器は見られたが，異なる時期の集落跡が確認されることになった。本書には，その主要な土器を再実測して掲載している（第４図）。

第６次調査は，施設に付帯する駐車場造成に伴い台地北側の斜面部[註2]から未周知の貝塚が検出されたことにより，その貝層断面を記録するために実施された。台地縁辺の谷部を埋めるように堆積した貝層は，幅約６ｍ高さ約４．５ｍを測り，削平面の下へも連続する。土層を挟んで貝層１～６に分層され，全てヤマトシジミを主体とする。貝層１～３が「加曽利Ｅ２式」，貝層４～６が「加曽利Ｅ３式」に形成されたものである。第２次調査の小規模な地点貝塚ではほとんど検出されなかった獣骨や魚骨も包含されていた。

第７次調査では，第１次調査と第２次調査の中間位置が調査の対象となった。

第７次調査に至る経緯　日立電線株式会社ワイヤレスシステム事業統括部よりひたちなか市教育委員会へ，ひたちなか市中根2129－２における携帯電話の基地局

(2006. 6. 19)

(2006. 6. 30)

(2018. 10. 6)

第５図　君ヶ台遺跡第7次調査の調査風景と調査区の状況

建設計画を原因とする「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」の照会文書が提出された。照会に係る土地は周知の遺跡の範囲内であることから教育委員会では現地踏査を実施し，縄文式土器の散布を認めたことから，周知の遺跡である君ヶ台遺跡（遺跡番号011）が所在する旨の回答をし，その取扱いについて協議を進めることとした。

協議において，別の場所への計画変更や構造の変更は困難であると確認されたことから，教育委員会では現地の試掘調査を2006（平成18）年４月に実施し，縄文式土器の出土と住居跡と思われる遺構の存在を確認し，茨城県教育委員会へも発掘調査が必要との意見を具申した。

茨城県教育委員会からの「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知においても発掘調査実施の指導があったことから，改めて対応について協議を行い，原因者の負担において発掘調査を実施することとした。

発掘調査は，委託者が日立電線株式会社ワイヤレスシステム事業統括部エンジニアリングセンタ，受託者がひたちなか市遺跡調査会，立会人がひたちなか市教育委員会の３者において委託契約を締結し，契約期間を2006（平成18）年６月１日から2007（平成19）年３月31日までとした。また，現地での発掘調査期間を６月１日から６月30日までと定め，調査担当者をひたちなか市教育委員会斉藤新が務めることとした。

第７次調査の進行　６月１日に発掘調査を開始し，地表面でも多くの遺物が採集できることから25㎝ほどの表土の除去から人力で行った。表土除去後の遺構確認において，近年の耕作に伴う東西方向の比較的幅の広い攪乱７条があるものの，南北方向に伸びる溝状の遺構１条と調査区にほぼ収まる住居跡１基を確認した。遺物の出土量が多い予想であったが，出土遺物については極力出土位置の記録を取る方針として遺構の調査を行ない，６月30日に現地での調査を終了した。

註１：伊東重敏による原図を再トレースした『勝田市史　別編Ⅱ　考古資料編』の「君ヶ台貝塚土壙群実測図」では，１条の溝状遺構を誤って２条に表現している。

註２：第６次調査の報告（鴨志田2004）では，調査区の位置を地図上に誤って表示しており，これを引用した文献にも誤りが継承されている。第３図中に，誤りを訂正した。斜面貝塚は，台地の縁辺を刻んだ谷部に位置している。

参考文献

石井　篤　2007『平成18年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台遺跡第８次調査）

伊東重敏・川崎純徳　1966『津田・天神山遺跡調査報告』勝田市教育委員会

鴨志田篤二他　1995『平成６年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台遺跡第３次調査）

鴨志田篤二他　1999『平成10年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台遺跡第４次調査）

鴨志田篤二他　2002『平成13年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台遺跡第５次調査）

鴨志田篤二　2004『平成15年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台遺跡第６次調査）

川崎純徳　1979『君ヶ台貝塚』勝田市史　別編Ⅱ　考古資料編』勝田市60-63頁

川崎純徳・鴨志田篤二　1980『君ヶ台遺跡調査報告書』勝田市教育委員会（君ヶ台遺跡第２次調査）

佐々木義則他　2011『平成22年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台遺跡第９次調査）

佐々木義則他　2016『平成27年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台遺跡第10次調査）

佐々木義則他　2018『平成29年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（君ヶ台遺跡第11次調査）

藤本弥城　1980『那珂川下流の石器時代研究Ⅱ』（私家版）

Ⅱ　検出された遺講と遺物

幅１ｍ長さ7.5ｍ余で東西方向に設定した３本のトレンチは，北側から１～３トレンチの名称であった。その１～３トレンチの中間部分を拡張することで，結果として対象地のほぼ全域について調査を実施した。調査面積は約64㎡である。牛蒡の耕作による深掘りの痕跡が調査区全体に見られ，収穫が手掘りであったらしく，広い部分では幅50cmほどの溝が東西方向に並ぶ。調査区内の遺構は，これによる破壊を受けていた。

検出された遺構は，溝状遺構が１条と，縄文時代中期の住居跡が１基である。住居跡は，調査区南西部にあり，一部が調査区外となるものの，炉址を中心とした大部分について検出できた。この住居跡に重なり，溝状遺構が伸びている（第６図）。調査区は，南側の埋没谷への傾斜地にあり，遺物包含層も形成されていた。この遺物包含層は，住居跡の廃絶後から形成が始まり，一部は住居跡の覆土を構成していた。したがって，住居跡に付属することが明確な３点の土器以外は，調査区出土遺物として一括した。

１．第１号溝状遺構

牛蒡耕作による攪乱で途切れながら，南北方向に6.5ｍほどの長さで検出された（第６図）。確認面での幅は，最も広い部分で1.25ｍほどである。同じく深さは，31cmほど。北端部の続きは，表土の耕作により消失したと考えられる。地形の傾斜に合致して，南側に向かい深くなる。覆土中からは，縄文時代の土器片等が出土しているが，遺構の時代時期は不明である。

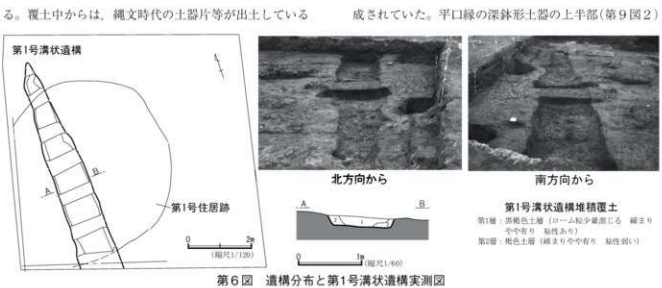
２．第１号住居跡

遺　構　一部が調査区外にあり，また南側の壁のほとんどが消失しているため，全体の規模と形態は確定できないが，直径5.5ｍほどの円形もしくは楕円形の竪穴が推定される（第７図）。北側の壁は，最も高い部分で確認面までが55cmほどである。壁際には，深さ５cmほどの壁周溝が巡る。南側では壁が検出されず，床面の一部にも傾斜が認められることから，これらは，廃絶後に崩壊し，少なくとも第６・７層が流入して堆積する時点で，既に南壁は消失していたと考えられる。

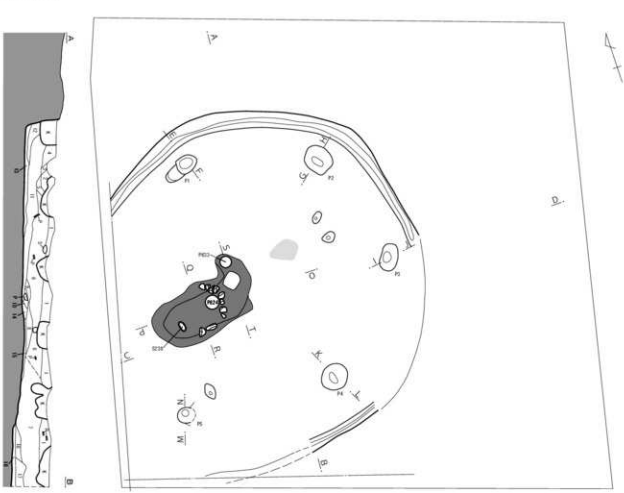
柱　穴　柱穴と捉えたピットはＰ１～５の５基である。床面からの深さは，Ｐ１が54cm，Ｐ２が51cm，Ｐ３が54cm，Ｐ４が43cm，Ｐ５が54cm。ピットの間隔からは，調査区外にもう１基の柱穴があって，６本主柱の上屋構造を推定することができる。なお，Ｐ４の覆土中からは，土器片（第22図13）が出土している。

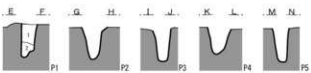
炉　址　床面のほぼ中央から炉址が検出された。

住居の廃絶まで機能していたのはP624を埋設した土器埋設石組炉と考えられる。残存する11点の礫からは，長軸90cm・短軸70cmの楕円形に礫が囲んでいたことが推定される。東側を除いて礫の大部分が消失しており，相当分量の礫が周囲に残されていないことから，抜去されたと見られる。埋設されたP624は，２個体分の土器で構成されていた。平口縁の深鉢形土器の上半部（第９図２）



第６図　遺構分布と第1号溝状遺構実測図





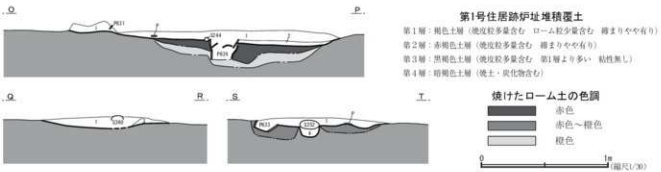
第1号住居跡堆積覆土

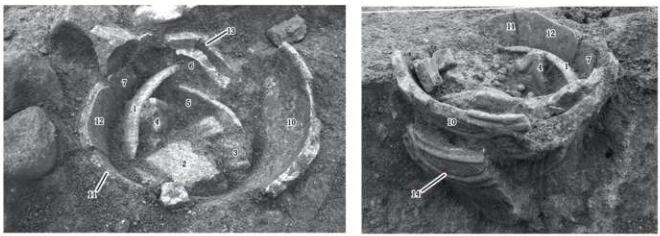
第１層：暗褐色土層（ローム粒少量含む　締まりやや弱い）
第２層：暗褐色土層（焼土粒多量含む　ローム粒少量含む）
第３層：暗褐色土層（ローム粒少量含む（粒子細かい）　焼土粒少量含む）
第４層：暗褐色土層（ローム粒少量含む（粒子細かい））
第５層：褐色土層（ローム粒・焼土粒少量含む　締まりやや弱い）
第６層：暗褐色土層（ローム粒多量含む　焼土粒・炭化粒少量含む　締まり有り）
第７層：暗褐色土層（第６層よりやや明るい　ローム粒少量含む　炭化粒・焼土粒微量含む　締まり有り　第６層と第７層の境は明確でなく範囲で表記）
第８層：暗褐色土層（第６層より明るい　ローム粒やや多量含む　炭化物・焼土粒微量含む　やや締り有り）
第９層：明褐色土層（ローム粒・炭化粒・焼土粒（大粒もある）含む）
第10層：暗赤褐色土層（焼土粒(微細)多量含む　微細ローム粒子微量含む）
第11層：褐色土層（ローム粒（粒子大きい）多量含む　締まり有り）
第12層：褐色土層（ローム粒（粒子大きい）多量含む）
第13層：褐色土層（ローム粒（粒子大きい）多量含む　締まり有り）
第14層：暗褐色土層（ローム粒（大粒含む）含む）
第15層：暗褐色土層（ローム粒（大粒含む）多量含む　やや粘性強い）
第16層：暗褐色土層（ローム粒少量含む（第７層より少ない）　炭化物・焼土粒微量含む　締まり有り）
第17層：黒褐色土層（ローム粒微量含む　締まり有り）
第18層：（ローム廃棄層）
第19層：暗褐色土層（ローム粒やや多量含む　５mm大のローム粒微量含む）
第20層：暗褐色土層（第19層より明るい　ローム粒ややや多量含む　炭化物微量含む）
第21層：暗褐色土層（焼土粒やや多量含む　ローム粒・炭化物少量含む　締まり有り）
第22層：暗褐色土層（ローム粒少量含む　焼土粒・炭化物微量含む）

第1号住居跡ピット1堆積覆土

第１層：褐色土層（ローム粒多量含む）
第２層：暗褐色土層（ローム粒少量含む　締まり有り）

第７図　第1号住居跡実測図（１）





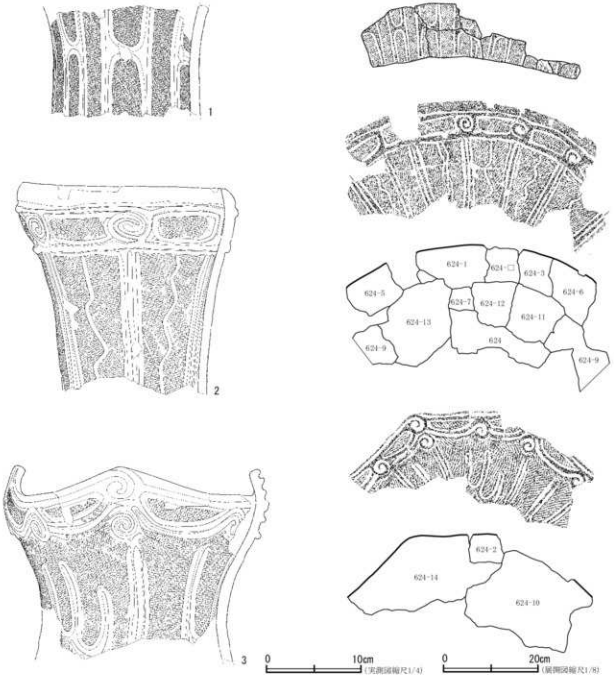
第1号住居跡炉址埋設土器（P624）出土状況（番号は第9図の枝番号に対応する）
第８図　第1号住居跡実測図（２）

に，波状口縁の深鉢形土器の上半部破片（第９図３）が加わる。検出状況からは，平口縁の口縁部が欠損する部分に，波状口縁の破片（P624-10・14）を重ねて補填したようである（第８図）。炉床は固く赤化しており，石組よりも一回り広い範囲に焼土を形成している。石組を構成するのは，長軸10 ～ 20cmの礫片が多く，石英斑岩，砂岩，チャート，アプライトなどの石材である。アプライトのＳ238は，磨石（第29図１）であり，砂岩には石皿として使用されたような研磨面が一部に残り，石器が転用されている。また，円礫の状態でそのまま使用されたものはなく，接合する礫の破片が離れた位置に設置されていることや，火熱を受けた痕跡が全体に認められるものが多いなど，石組の構築材としても再利用のあったことが窺える。

P624の北東方向50cmほどの位置にP633が埋設されていた。周囲には焼土が形成されており，ここにも炉が設置されていたことが推定される。土器埋設石組炉であったのではないかと想定されるが，石組は全く残されていない。P633（第９図１）は，深鉢形土器の胴部であり，残存する最上端には摩滅が認められ，胴部のみが利用されたと見られるが，破片は全周せず，上部の破片も半分以上が欠落する。これもまた埋設されていた土器の一部が抜去されたことが考えられる。また，P633の南側には，土層断面（第８図　S-T断面図）に第４層が堆積したピットがあり，このピットが直径25cmほどの円形に近いことが注意される。焼土の形成がこのピットで途切れている状態は，P624の炉址断面（第８図　O-P断面図）に似ており，ここに埋設されていた土器が完全に抜去された痕跡ではないかとも考えられるのである。ここに土器が埋設されていたとすれば，それは焼土の状況から，P633よりも後に機能したものということになる。あるいは，大型の礫が埋置されていた痕跡であるのかもしれず，その場合，礫はＰ624を埋設した炉址に伴うことになろう。

炉は改築されており，P633を埋設した東側の炉址が旧く，P624を埋設した西側の炉址が新しいと考えられた。旧炉址と東壁の中間位置にも床面に焼土（第７図の淡網部分）が形成されていたが，窪み等は認められず，これを炉址とは捉えていない。

遺　物　ここに住居跡の遺物として報告するのは，炉址に埋設されていた３点の土器である。



第９図　第1号住居跡炉址埋設土器

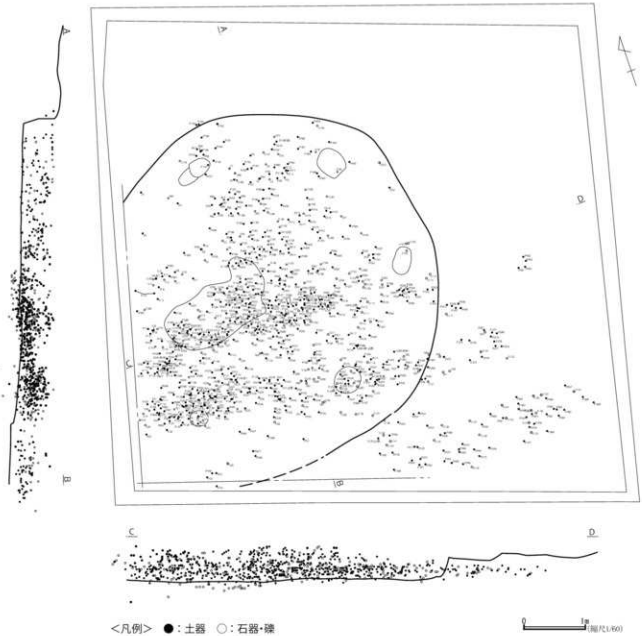
以下に，土器の各資料について計測と観察を記載する。

第９図　**1** 出土位置・注記:P633，A区フク土下層(破片１点)器種:深鉢形土器　法量:最大径175mm(全体の残存状態は拓本展開図のとおり)文様:沈線文，複節斜縄文(LRL)備考:器内面下部が変色。破片は全周せずに一部が欠落する。　**2** 出土位置・注記:P624（枝番号１・３・５～13）器種:深鉢形土器　法量:口径210mm(54%，全体の残存状態は拓本展開図のとおり)文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)備考:器内面下部が変色。破片は全周する。　**3** 出土位置・注記:P624（枝番号２・10・14）器種:深鉢形土器　法量:波底部口径256mm(49%)，胴括れ部径194mm(27%)文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)備考:器内面下部が変色。

小　括　第１号住居跡は，炉址に埋設されていた土器から，「加曽利Ｅ２式新段階」に位置付けられる。

３．調査区出土遺物

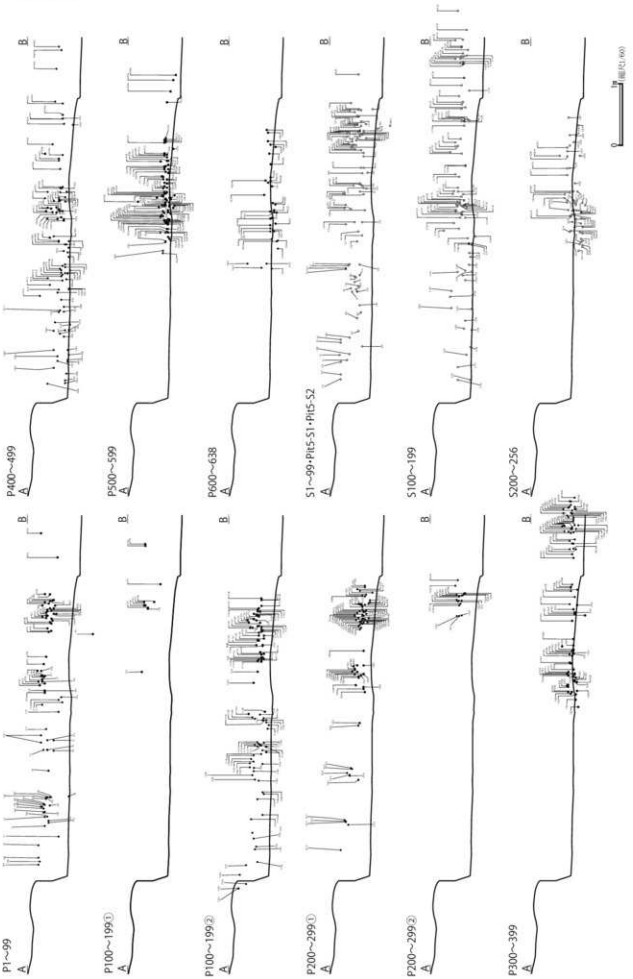
遺物の概要　調査区から出土した遺物には，縄文時代以外のものも含まれていた。それは古墳時代以降の土師器や須恵器，陶器，磁器，時代の明らかでない鉄製品などで，106点の602ｇという分量である。いずれも小片のため掲載していない。また，貝殻の破片も回収されたが，３点の３ｇほどの分量である。いずれも攪乱中に含



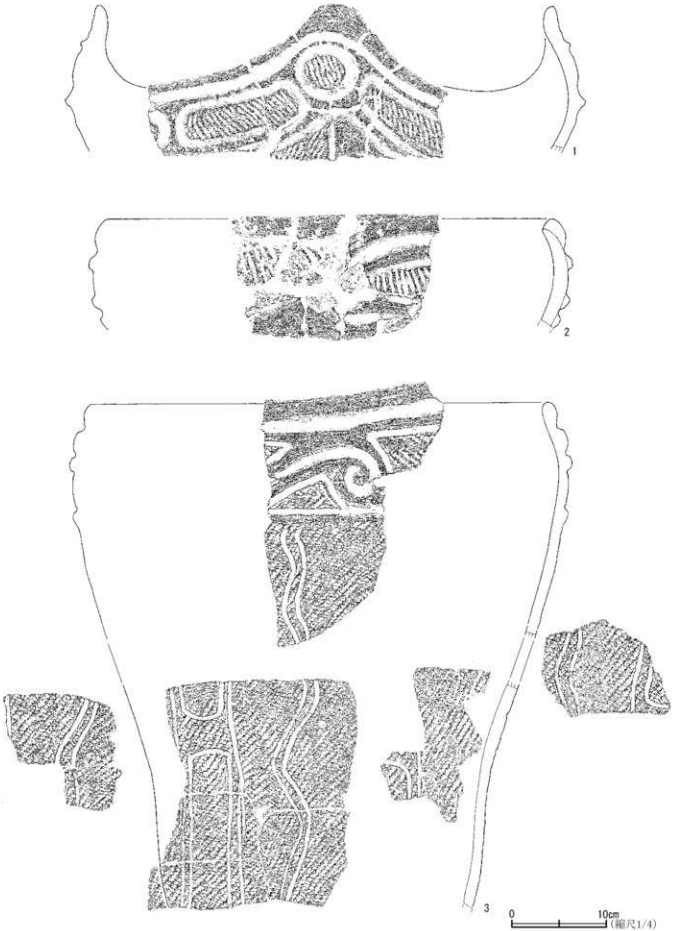
第10図　調査区遺物出土位置（1）

まれていたことから，縄文時代の貝塚に由来するものなのかもしれないが，これも報告していない。報告の対象としたのは，縄文時代の土器，土製品，石器，石製品である。出土地点を記録した遺物の全体図（第10図）からは，住居跡内に遺物が集中することが見て取れる。住居跡内での遺物集中の濃淡は，牛蒡耕作による溝状の攪乱部分から出土した遺物については出土地点を記録していないことによる。今後に周辺が調査されることにより，遺物包含層の形成が住居跡の窪地を中心としたことが捉えられるのかもしれない。詳細は，各遺物の計測と観察に記載するが，出土位置の理解のために，次の記号について説明しておく。「ベルト１～３」は，第１号住居跡の堆積覆土を観察するために設定したもので，大まかに住居跡内部の空間として理解されたい。また，「Ａ～Ｆ区」については，第１号住居跡の炉址の堆積覆土を観察するために設定したO-P，Q-R，S-Tという３本の線により区画された６つの空間の呼称であり，いずれの区であっても炉址周辺と理解されたい。

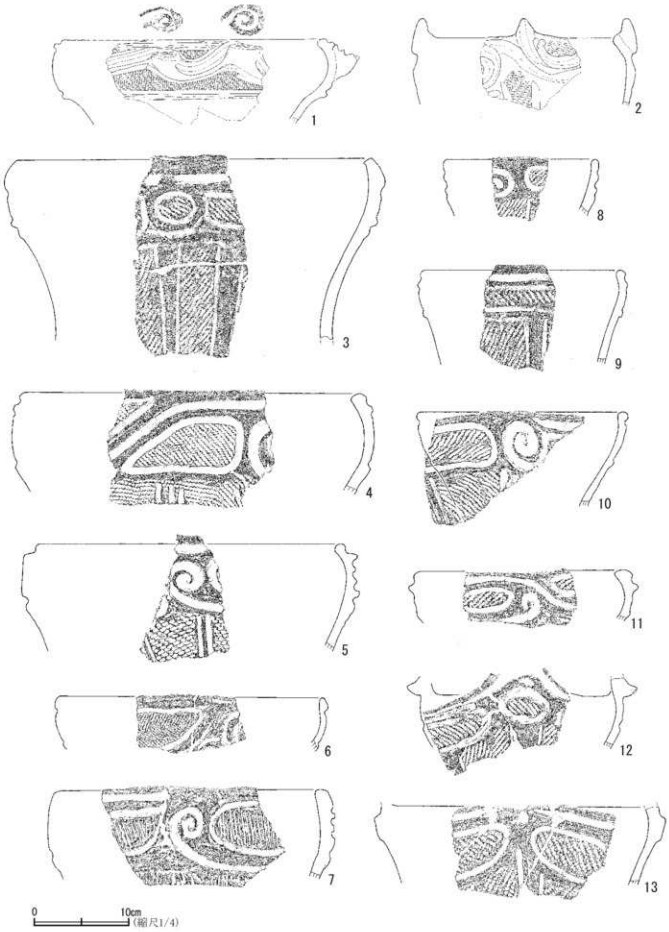
土　器　調査で出土地点を記録したのはＰ１～638である。その他一括で取り上げた遺物を含めて，縄文時代の土器は9,186点の164,066ｇであった。第１号住居跡炉址埋設土器は３点で3,676ｇ，調査区出土土器として



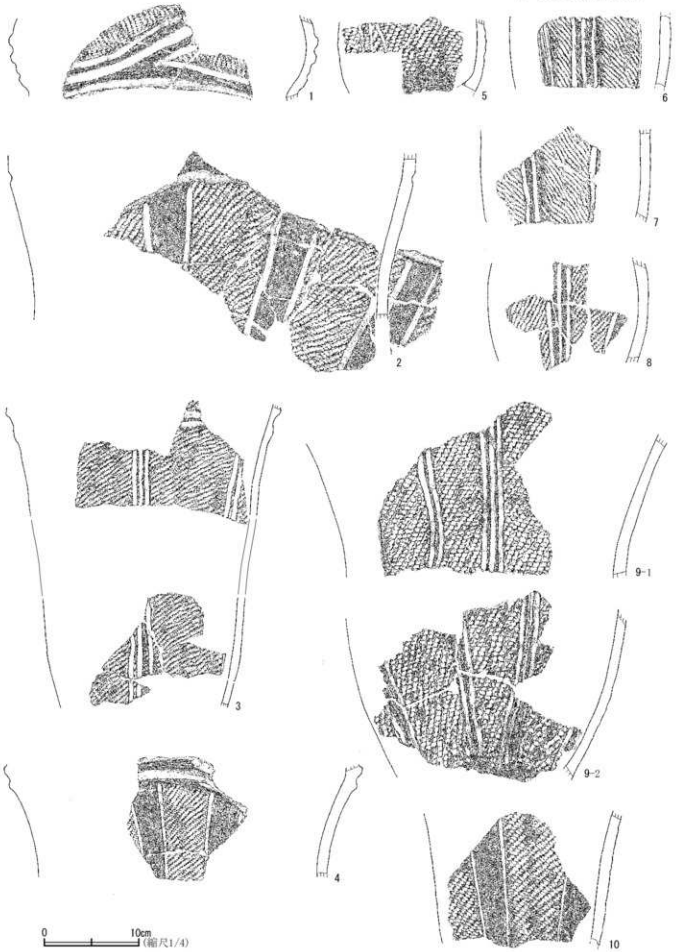
第11図　調査区遺物出土位置（2）



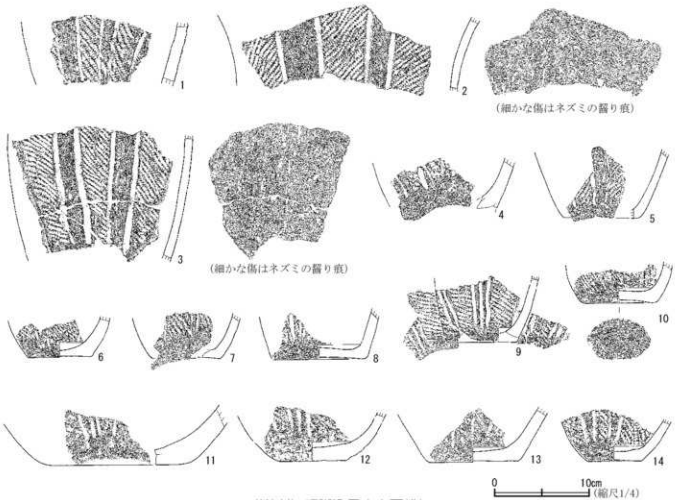
第12図　調査区出土土器（1）



第13図　調査区出土土器（2）



第14図　調査区出土土器（3）



第15図　調査区出土土器(4)

掲載するのは286点の32,118gである。報告の対象としたのは，点数で3%，重量で22%の土器である。点数と重量の比率の差は，残存状態が良いものが選択されていることによる。縄文時代中期中葉の「加曽利E1式」が5点，後期前葉「堀之内2式」が1点含まれていたが，いずれも小破片である。主体となるのは中期中葉～後葉の「加曽利E2・3・4式」であり，後期前葉の「称名寺式」の少数を含めて，これらを報告する。

残存率が比較的高く，いくつかの破片の出土地点が記録された土器について，垂直分布を検討してみると，「加曽利E2式」(第12図3，第14図9)は，第1号住居跡の床面から4～20cmの高さにあり，住居跡堆積覆土の第6層相当の位置から出土している。「加曽利E3式」(第12図1，第16図8・9)は,14～34cmの高さで第1層相当の位置から，「加曽利E4式」(第16図13)は，40～52cmの高さで第1層よりも上位から出土している。これらは，土器型式が地層とともに累重した状況を示しており，遺物包含層は，一気に形成されたものではなく，「加曽利E2式～4式」にかけて順次堆積したと考えられる。なお，「称名寺式」はいずれも表土中の遺物として一括で回収されていた。

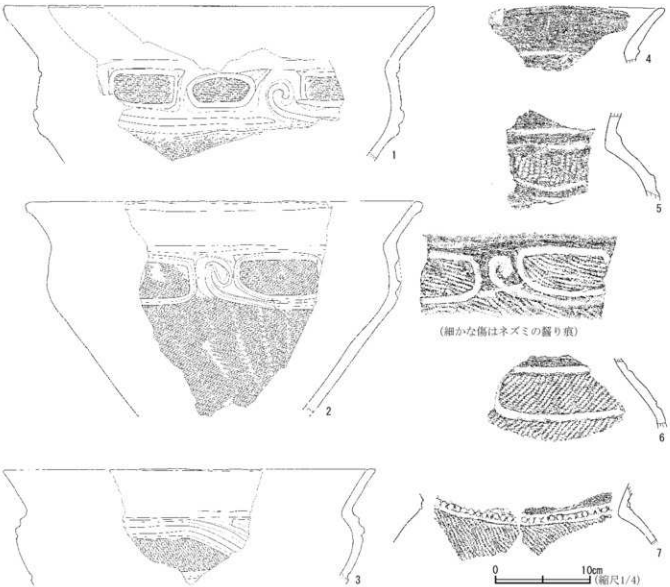
以下に，土器の各資料について計測と観察を記載する。

第12図　**1**　出土位置・注記:P394・395・396，包含層　器種:深鉢形土器　法量:波底部口径516mm(19%)文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)　備考:胎土に銀雲母もしくは貝殻片を含む。焼成不良で脆弱。器外面にネズミ齧り痕。　**2**　出土位置・注記:P461・462　器種:深鉢形土器　法量:口径460mm(15%)文様:隆線文，沈線文，胴部条線文　備考:胎土に泥岩片が目立つ。　**3**　出土位置・注記:P163・178・184・487・528・530・537・547・614　器種:深鉢形土器　法量:口径480mm(12%)文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)備考:胎土に金雲母を極多量含む。

第13図　**1**　出土位置・注記:表土，カク乱　器種:深鉢形土器　法量:口径274mm(11%)文様:突起，隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)。　**2**　出土位置・注記:P248　器種:深鉢形土器　法量:口径196mm(16%)文様:突起，隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)。　**3**　出土位置・注記:P30・35　器種:深鉢形土器　法量:口径370mm(6%)文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)備考:胎土に金(黒)雲母を多量含む。　**4**　出土位置・注記:P608　器種:深鉢形土器　法量:口径350mm(13%)文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(LR)。**5**　出土位置・注記:P607　器種:深鉢形土器　法量:口径320mm(9%)文様:隆線文，沈線文，複節斜縄

第16図　調査区出土土器(5)

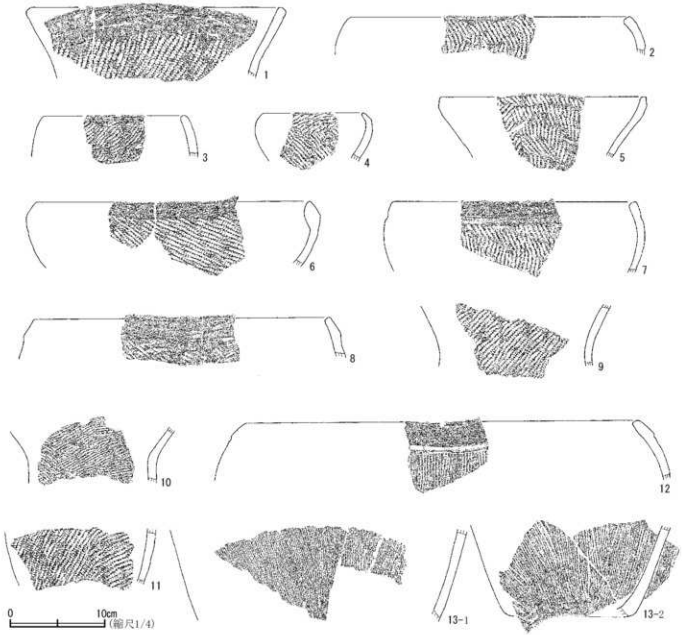
文(LRL)。 **6** 出土位置・注記:P199, B区ベルトカク乱　器種:深鉢形土器　法量:口径278mm(12%)文様:隆線文, 沈線文, 単節斜縄文(RL)。 **7** 出土位置・注記:P7　器種:深鉢形土器　法量:口径284mm(18%)文様:隆線文, 沈線文, 条線文　備考:器外面に炭化物(煤)付着。 **8** 出土位置・注記:P450　器種:深鉢形土器　法量:口径156mm(12%)文様:隆線文, 沈線文, 単節斜縄文(RL)備考:胎土に金雲母を



第17図　調査区出土土器(6)

含む。器外面に炭化物(煤)付着。　**9**　出土位置・注記:P467　器種:深鉢形土器　法量:口径208mm(9%)文様:隆線文,沈線文,単節斜縄文(RL)備考:器外面に炭化物(煤)付着。　**10**　出土位置・注記:住フク土　器種:深鉢形土器　法量:口径220mm(22%)文様:隆線文,沈線文,単節斜縄文(LR)。　**11**　出土位置・注記:3トレ西上層　器種:深鉢形土器　法量:口径226mm(14%)文様:隆線文,沈線文,単節斜縄文(LR)備考:器外面に炭化物(煤)付着。　**12**　出土位置・注記:P11,表土　器種:深鉢形土器　法量:波底部口径200mm(9%)文様:隆線文,沈線文,単節斜縄文(RL)。　**13**　出土位置・注記:P353,D区包含層,包含層下部　器種:深鉢形土器　法量:波底部口径288mm(19%)文様:隆線文,沈線文,単節斜縄文(RL)備考:胎土に金雲母を多量含む。器外面に炭化物(煤)付着。

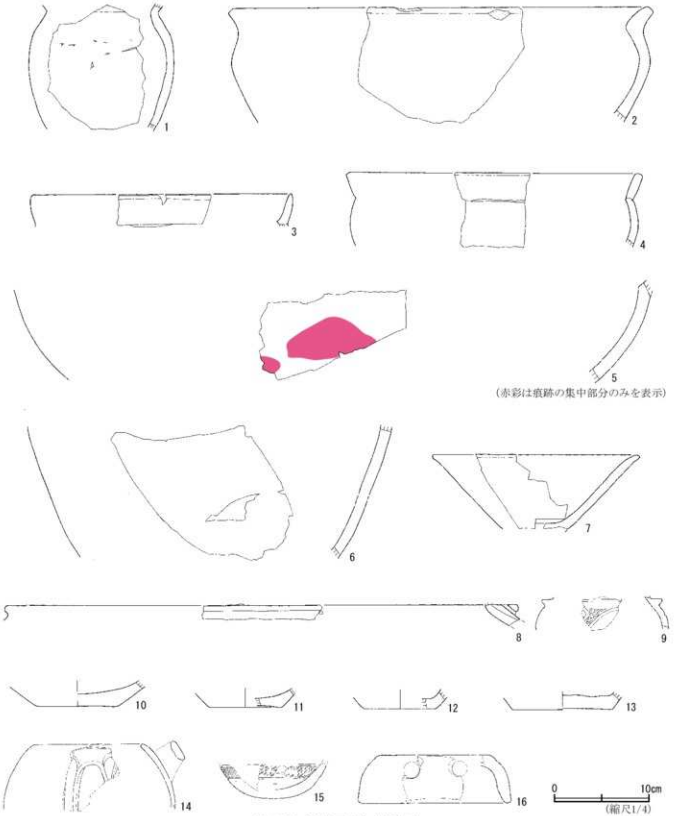
第14図　**1**　出土位置・注記:P593・610,ベルト中央　器種:深鉢形土器　法量:最大径322mm(22%)文様:隆線文,沈線文,単節斜縄文(RL)備考:器外面にネズミ齧り痕。器内面の色調がP610のみ黒色,他は褐色。　**2**　出土位置・注記:住フク土,包含層下層　器種:深鉢形土器　法量:最大径426mm(25%)文様:沈線文,単節斜縄文(RL)備考:器外面部分的に炭化物付着。　**3**　出土位置・注記:P10・13・19・409・472・473・612,住B区フク土上層,住フク土,2ベルト上層,表土　器種:深鉢形土器　法量:最大径286mm(19%)文様:隆線文,沈線文,単節斜縄文(RL)。　**4**　出土位置・注記:P23,住フク土上層　器種:深鉢形土器　法量:最大径372mm(11%)文様:隆線文,沈線文,単節斜縄文(RL)。　**5**　出土位置・注記:D区包含層　器種:深鉢形土器　法量:最大径154mm(26%)文様:沈線文,複節斜縄文(RLR)備考:胴部器内面が変色。　**6**　出土位置・注記:P424　器種:深鉢形土器　法量:最大径168mm(20%)文様:沈線文,単節斜縄文(LR)。　**7**　出土位置・注記:P556・559　器種:深鉢形土器　法量:最大径178mm(18%)文様:沈線文,単節斜縄文(LR)備考:胎土に金雲母細粒を少量含む。器内面下部が変色。　**8**　出土位置・注記:P624・625・626・627・628・635　器種:深鉢形土器　法量:最大径166mm(24%)文様:沈線文,複節斜縄文(RLR)備考:胎土に貝殻片?を多量含む。　**9**　出土位置・注記:P109・159・474・499・540・546・563　器種:深鉢形土器　法量:最大径376mm(19%)文様:沈線文,複節斜縄文(RLR)備考:胎土に金雲母と少量の骨針を含む。　**10**　出土位置・注記:中央上層　器種:深鉢形土器　法量:最大径206mm(27%)



第18図　調査区出土土器(7)

文様:沈線文，単節斜縄文(RL)備考:胎土に銀雲母を多量含む。器内面に炭化物付着。

第15図　**1**　出土位置・注記:包含層　器種:深鉢形土器　法量:最大径173mm(20%)文様:沈線文，単節斜縄文(LR)備考:胎土に泥岩片が目立つ。沈線文の一部が蛇行。器内面に炭化物付着。　**2**　出土位置・注記:P376　器種:深鉢形土器　法量:最大径272mm(23%)文様:沈線文，単節斜縄文(RL)備考:焼成不良。器内面にネズミ齧り痕が多数。　**3**　出土位置・注記:P76・310・334　器種:深鉢形土器　法量:最大径192mm(27%)文様:沈線文，単節斜縄文(LR)備考:器内面にネズミ齧り痕が多数。　**4**　出土位置・注記:P444　器種:深鉢形土器　法量:最大径148mm(21%)文様:沈線文，複節斜縄文(LRL)。　**5**　出土位置・注記:表土　器種:深鉢形土器　法量:底径78mm(17%)文様:沈線文，単節斜縄文(RL)備考:器内面に炭化物付着。　**6**　出土位置・注記:D区カク乱　器種:深鉢形土器　法量:底径67mm(69%)文様:沈線文，単節斜縄文(LR)備考:器内面に炭化物付着。　**7**　出土位置・注記:P611　器種:深鉢形土器　法量:底径72mm(29%)文様:沈線文，単節斜縄文(LR)もしくは無節斜縄文(L)。　**8**　出土位置・注記:包含層　器種:深鉢形土器　法量:底径98mm(42%)文様:沈線文，単節斜縄文(RL)備考:底面に白色の付着物か。　**9**　出土位置・注記:P549・596，ベルト2下層，ベルト3下層，A区カク乱，C区カク乱　器種:深鉢形土器　法量:底径70mm(35%)文様:沈線文(3条と2条の区画文を交互に4区画)，複節斜縄文(LRL)備考:器外面に炭化物(煤)付着。　**10**　出土位置・注記:包含層　器種:深鉢形土器　法量:底径78mm(23%)文様:沈線文，単節斜縄文(LR)備考:底面と破断面にネズミ齧り痕。　**11**　出土位置・注記:住フク土　器種:深鉢形土器　法量:底径160mm(23%)文様:沈線文，単節斜縄文(LR)備考:胎土に骨針と貝殻片?を含む。　**12**　出土位置・注記:P362，D区カク乱　器種:深鉢形土器　法量:底径70mm(57%)文様:沈線文，単節斜縄文(LR)備考:胎土に銀雲母を極少量含む。　**13**　出土位置・注記:ベルト3カク乱　器種:深鉢形土器　法量:底径96mm(22%)文様:沈線文。　**14**　出土位置・注記:P32　器種:深鉢形土器　法量:底径56mm



第19図　調査区出土土器(8)

(100%)文様:沈線文, 単節斜縄文(LR)。備考:器内面に炭化物付着。

第16図　**1**　出土位置・注記:P403　器種:深鉢形土器　法量:口径280mm(11%)文様:沈線文, 刺突文, 単節斜縄文(RL)。　**2**　出土位置・注記:P44　器種:深鉢形土器　法量:口径300mm(15%)文様:沈線文, 単節斜縄文(LR)備考:口唇部にネズミの齧り痕。　**3**　出土位置・注記:2トレ中央下層　器種:深鉢形土器　法量:口径206mm(9%), 頸径182mm(12%)文様:沈線文, 刺突文　備考:胎土に泥岩片が目立つ。　**4**　出土位置・注記:P21　器種:深鉢形土器　法量:胴径266mm(12%)文様:隆線文, 沈線文(半截竹管)備考:胎土に金雲母を含む。　**5**　出土位置・注記:P17・247, 表土　器種:深鉢形土器　法量:波底部口径280mm(8%)文様:隆線文, 沈線文, 単節斜縄文(LR)備考:胎土に骨針を含む。器外面に炭化物(煤)付着。　P247の器外面にネズミの齧り痕。　**6**

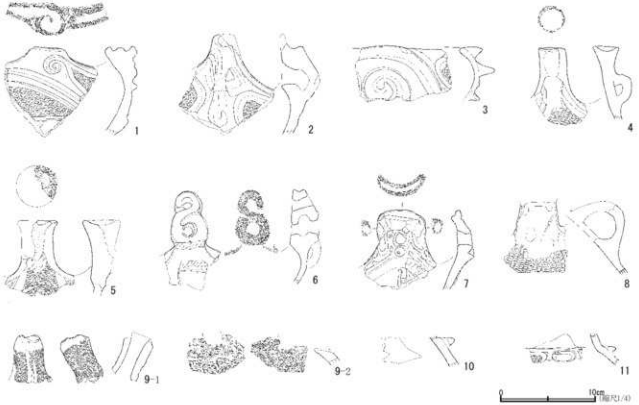
第20図　調査区出土土器(9)

出土位置・注記：P356　器種：深鉢形土器　法量：波底部口径220mm(14%)文様：隆線文　列点文　器内外面に炭化物付着。器外面にネズミの掻り痕。　**7**　出土位置・注記：P26　器種：深鉢形もしくは鉢形土器　法量：口径132mm(18%)文様：沈線文，単節斜縄文(RL)，器内外面赤彩。　**8**　出土位置・注記：P361，包含層，カク乱　器種：深鉢形土器　法量：最大径310mm(12%)文様：隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)備考：器外面の色調が上部は黒色，下部は褐色。　**9**　出土位置・注記：P415　器種：深鉢形土器　法量：最大径250mm(24%)文様：沈線文，単節斜縄文(LR)。　**10**　出土位置・注記：P5，ベルト1フク土　器種：深鉢形土器　法量：口径288mm(13%)文様：微隆線文，単節斜縄文(LR)。　**11**　出土位置・注記：P98　器種：深鉢形土器　法量：口径284mm(12%)文様：突起，微隆線文，単節斜縄文(LR)備考：胎土に金(黒)雲母と骨針を含む。　**12**　出土位置・注記：P187　器種：深鉢形土器　法量：口径184mm(8%)文様：微隆線文，単節斜縄文(LR)備考：胎土に骨針を極少量含む。　**13**　出土位置・注記：P68-69，表土南側，表土，カク乱　器種：深鉢形土器　法量：波底部口径135mm(85%)文様：微隆線文，沈線文，無節斜縄文(L)備考：器内面下部が黒く変色。器外面の一部に炭化物(煤)付着。

第17図　**1**　出土位置・注記：P469・522・598　器種：鉢形土器　法量：口径448mm(5%)，頸径376mm(19%)，胴径386mm(18%)文様：隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)，口縁部器内外面赤彩　備考：胎土に金雲母を極多量含む。　**2**　出土位置・注記：P617　器種：鉢形土器　法量：口径414mm(17%)，頸径360mm(17%)，胴径370mm(17%)文様：隆線文，沈線文，単節斜縄文(LR)備考：器外面隆線文部分にネズミの掻り痕。　**3**　出土位置・注記：P534　器種：鉢形土器　法量：口径388mm(14%)，頸径338mm(13%)，胴径362mm(11%)文様：隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)，口縁部器内外面赤彩か　備考：胎土に金雲母を多量含む。　**4**　出土位置・注記：P429　器種：鉢形土器　文様：隆線文　備考：器外面にネズミの掻り痕。　**5**　出土位置・注記：包含層　器種：鉢形土器　文様：隆線文，沈線文，単節斜縄文(LR)。　**6**　出土位置・注記：D区包含層　器種：鉢形土器　文様：沈線文，単節斜縄文(RL)。　**7**　出土位置・注記：P605，ベルト3　器種：鉢形土器か　法量：頸径216mm(27%)文様：沈線文，刺突文，単節斜縄文(RL)。

第18図　**1**　出土位置・注記：P43，住フク土上層　器種：深鉢形土器　法量：口径270mm(26%)文様：単節斜縄文(RL)。備考：口唇部付近にネズミの掻り痕集中。　**2**　出土位置・注記：溝ベルト南側，表土　器種：深鉢形土器　法量：口径294mm(9%)文様：単節斜縄文(LR)。　**3**　出土位置・注記：2トレ西下層　器種：深鉢形土器　法量：口径150mm(13%)文様：単節斜縄文(LR)備考：器外面に炭化物(煤)付着。　**4**　出土位置・注記：P230　器種：深鉢形土器　法量：口径106mm(14%)文様：単節斜縄文(LR)備考：器内面に炭化物(煤)付着。　**5**　出土位置・注記：包含層下層　器種：深鉢形土器　法量：口径214mm(14%)文様：単節斜縄文(RL)備考：器外面に炭化物(煤)付着。　**6**　出土位置・注記：3トレ西上層，表土　器種：深鉢形土器　法量：口径286mm(14%)文様：単節斜縄文(LR)備考：胎土に金(黒)雲母を多量含む。口唇部の一部が突出。　**7**　出土位置・注記：P418　器種：深鉢形土器　法量：口径252mm(12%)文様：沈線文，単節斜縄文(RL)。　**8**　出土位置・注記：P419　器種：深鉢形土器　法量：口径308mm(12%)文様：微隆線文，無節斜縄文(L)。　**9**　出土位置・注記：表土　器種：深鉢形土器　法量：最大径198mm(17%)文様：単節斜縄文(LR)。　**10**　出土位置・注記：溝下層　器種：深鉢形土器　法量：最大径170mm(21%)文様：単節斜縄文(LR)。　**11**　出土位置・注記：カク乱ベルト南側　器種：深鉢形土器　法量：最大径158mm(25%)文様：単節斜縄文(RL)。　**12**　出土位置・注記：C区カク乱　器種：深鉢形もしくは鉢形土器　法量：口径410mm(6%)文様：沈線文，条縄文　文備考：胎土に泥岩片が目立つ。器外面にネズミの掻り痕。　**13**　出土位置・注記：P399，包含層，3トレ東上層，住フク土上層　器種：深鉢形土器　法量：最大径308mm(21%)，底径130mm(16%)文様：条縄文　文備考：胎土に泥岩片が目立つ。

第19図　**1**　出土位置・注記：P572　器種：壺形土器　法量：頸径116mm(11%)，胴径150mm(22%)文様：無文　備考：器内外面に炭化物付着。　**2**　出土位置・注記：包含層　器種：浅鉢形土器　法量：口径442mm(12%)，頸径421mm，胴径434mm　文様：無文(磨き)。　**3**　出土位置・注記：P112-577　器種：浅鉢形土器か　法量：口径270mm(11%)，頸径262mm(11%)文様：無文(磨き)，器内外面赤彩　備考：口唇部等にネズミ掻り痕。　**4**　出土位置・注記：住フク土　器種：浅鉢形土器か　法量：口径308mm(8%)，頸径288mm，胴径300mm　文様：無文(磨き)，器外面赤彩。　**5**　出土位置・注記：P405　器種：浅鉢形土器　法量：最大径663mm(7%)文様：無文(磨き)，器外面赤彩(網部に痕跡が集中)。　**6**



第21図　調査区出土土器(9)

出土位置・注記:P101・102・163，B区フク土　器種:有孔鍔付土器か　法量:最大径380mm(15%)文様:無文(磨き)備考:器外面にネズミ齧り痕。　**7**　出土位置・注記:P325・505　器種:鉢形土器　法量:口径215mm(8%)，下端部径69mm(23%)文様:無文(磨き)，器外面赤彩，器内面赤彩か。　**8**　出土位置・注記:包含層　器種:有孔鍔付土器　法量:最大径540mm(12%)文様:無文(磨き)，器内外面赤彩。　**9**　出土位置・注記:P113　器種:有孔鍔付土器か　法量:最大径138mm(10%)文様:沈線文，刺突文　器外面赤彩　備考:孔は残存しない。　**10**　出土位置・注記:P415　器種:浅鉢形もしくは有孔鍔付土器　法量:底径82mm(49%)文様:無文(磨き)備考:胎土に銀雲母を少量含む。　**11**　出土位置・注記:D区カク乱　器種:浅鉢形もしくは有孔鍔付土器　法量:底径76mm(44%)文様:無文(磨き)。　**12**　出土位置・注記:P415　器種:浅鉢形もしくは有孔鍔付土器　法量:底径78mm(31%)文様:無文(磨き)。

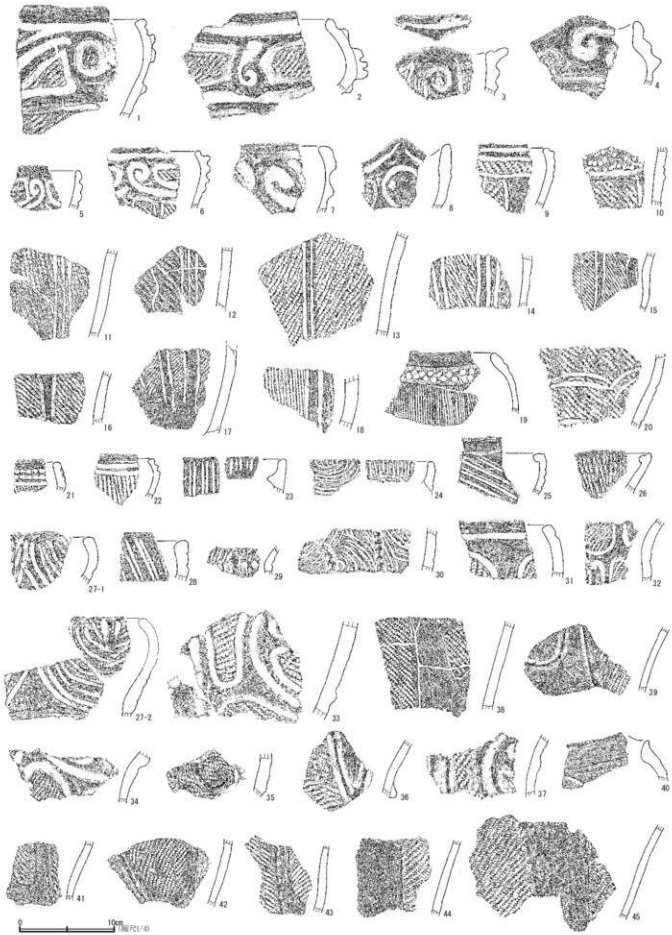
13　出土位置・注記:P227　器種:浅鉢形もしくは有孔鍔付土器　法量:底径104mm(43%)文様:無文(磨き)備考:胎土に泥岩片が目立つ。

14　出土位置・注記:表土　器種:豪形土器　法量:口径110mm(3%)，胴径178mm(5%)文様:把手付，微隆起線文，器外面赤彩　備考:胎土に赤色粒子が目立つ。　**15**　出土位置・注記:表土　器種:不明(丸底)法量:最大径110mm(26%)文様:沈線～有段の区画内に無節斜縄文(L)備考:上端の破断面を擬口縁に整形し，皿形の容器として再利用。

16　出土位置・注記:P504　器種:器台形土器　法量:器高50mm，上面径110mm(7%)，裾径160mm(11%)　文様:無文　備考:胴部に2孔が残存。

第20図　**1**　出土位置・注記:2トレ東上層　法量:底径74mm(26%)文様:無節斜縄文(L)。　**2**　出土位置・注記:D区フク土上層，D区カク乱　法量:底径63-68mm(79%)文様:複節斜縄文(RLR)。　**3**　出土位置・注記:D区フク土上層　法量:底径60mm(28%)文様:単節斜縄文(RL)。　**4**　出土位置・注記:P631　法量:底径80mm(100%)文様:条線文　備考:胎土に貝殻片？を含む。器内面に炭化物付着。　**5**　出土位置・注記:P493　法量:底径73mm(50%)文様:沈線文。　**6**　出土位置・注記:P70，カク乱ベルト北側　法量:底径85mm(72%)。　**7**　出土位置・注記:P360　法量:底径93mm(100%)。　**8**　出土位置・注記:2・3tr表土　法量:底径99mm(100%)。　**9**　出土位置・注記:包含層　法量:底径96mm(40%)。　**10**　出土位置・注記:カク乱ベルト南側　法量:底径90mm(32%)備考:胎土に赤色粒子が目立つ。　**11**　出土位置・注記:P311，D区カク乱　法量:底径60mm(73%)。　**12**　出土位置・注記:住フク土上層　法量:底径67mm(44%)。　**13**　出土位置・注記:P539　法量:底径72mm(38%)備考:胎土に骨針を極少量含み，泥岩片が目立つ。　**14**　出土位置・注記:P45　法量:底径72mm(49%)備考:器内面側から底部が窄孔されている。　**15**　出土位置・注記:包含層下層，D区包含層，D区カク乱　法量:底径60mm(95%)。　**16**　出土位置・注記:P4　法量:底径60mm(43%)。　**17**　出土位置・注記:住A区フク土　法量:底径62mm(27%)備考:胎土に金雲母を含む。　**18**　出土位置・注記:表土　法量:底径44mm(26%)。　**19**　出土位置・注記:Dカク乱　法量:底径50mm(100%)備考:破断面が研磨されている。

第21図　**1**　出土位置・注記:P562　器種:深鉢形土器　文様:突起，隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)。　**2**　出土位置・注記:3トレ西上層　器種:深鉢形土器　文様:把手，隆線文，沈線文，複節斜縄文(RLR)備考:胎土に金(黒)雲母を多量含む。　**3**　出土位置・注記:包含層下層　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(LR)備考:器外面の一部にネズミの齧り痕。　**4**　出土位置・注記:表土　器種:深鉢形土器　文様:突起，把手，微隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)備考:器外面の一部にネズミの齧り痕。　**5**　出土位置・注記:表土　器種:深鉢形土器　文様:突起(器外面にも突起あるいは把手の剥落痕



第22図　調査区出土土器(11)

第23図　調査区出土土器(12)

あり)，微隆線文，単節斜縄文(LR)備考:器内面の一部にネズミの齧り痕。　6　出土位置・注記:表土　器種:深鉢形土器　文様:突起，把手(剥落痕)，微隆線文，沈線文　備考:器内外面に炭化物付着(特に器内面は厚く付着)。　7　出土位置・注記:P75　器種:深鉢形土器　文様:突起，隆線文(横位の隆線文の剥落痕もある)，沈線文，刺突文。　8　出土位置・注記:P285　器種:壺形土器(両耳壺)文様:把手，単節斜縄文(RL)。　9　出土位置・注記:P502-503　器種:注口土器　文様:沈線文，単節斜縄文(LR)備考:2は注口が付属する部分の胴部破片であるが，1の注口部は接合しない。　10　出土位置・注記:2トレ下層　器種:有孔鍔付土器　文様:隆線文(穿孔あり)，器内外面赤彩　備考:大型土器と推定される。　11　出土位置・注記:カク乱B　器種:有孔鍔付土器　文様:隆線文(穿孔あり)，沈線文，単節斜縄文(LR)，器内外面赤彩。

第22図　1　出土位置・注記:P606　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)。　2　出土位置・注記:P408　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(LR)。　3　出土位置・注記:P351　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(LR)備考:胎土に金雲母を含む。　4　出土位置・注記:住フク土　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(LR)備考:器外面の一部にネズミの齧り痕。　5　出土位置・注記:住南　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(LR)備考:器外面に炭化物付着。　6　出土位置・注記:表土南側　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)。　7　出土位置・注記:P38　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)。　8　出土位置・注記:P58　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(RL)備考:器外面にネズミの齧り痕。　9　出土位置・注記:D区包含層　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)備考:器外面にネズミの齧り痕。　10　出土位置・注記:A区フク土　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，刺突文，複節斜縄文(LRL)。　11　出土位置・注記:P438　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，燃糸文(Rの結条体)備考:器内面にネズミの齧り痕。　12　出土位置・注記:ベルト1カク乱　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(LR)。　13　出土位置・注記:pit 4-1　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(RL)。　14　出土位置・注記:P467　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(LR)。　15　出土位置・注記:ベルト3　器種:深鉢形土器　法量:最大径82mm(25%)文様:沈線文，単節斜縄文(LR)。　16　出土位置・注記:P51　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(LR)。　17　出土位置・注記:3トレ西土層　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(RL)備考:器内面に炭化物付着。　18　出土位置・注記:P150　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，燃糸文(Rの結条体)。　19　出土位置・注記:P37-41　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，刺突文，条線文。　20　出土位置・注記:P411　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(LR)。　21　出土位置・注記:表土　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，刺突文，燃糸文(rの結条体)。　22　出土位置・注記:C区　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，燃糸文(Lの結条体)備考:器外面に炭化物付着。　23　出土位置・注記:ベルト3　器種:深鉢形土器　文様:器内面隆線文，沈線文(半截竹管)　備考:胎土に赤色粒子が目立つ。　24　出土位置・注記:C区カク乱　器種:深鉢形土器　文様:器内面隆線文，沈線文(半截竹管)　備考:胎土に赤色粒子が目立つ。　25　出土位置・注記:P 109　器種:深鉢形土器　文様:器内面隆線文，沈線文(半截竹管)。　26　出土位置・注記:P143　器種:深鉢形土器　文様:器内面隆線文，燃糸文(Lの結条体)。　27　出土位置・注記:3トレ西土層，2・3tr表土，カクラン南側　器種:深鉢形土器　文様:沈線文。　28　出土位置・注記:D区フク土上層　器種:深鉢形土器　文様:沈線文(半截竹管)備考:胎土に赤色粒子が目立つ。　29　出土位置・注記:住南　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文(半截竹管)，刺突文　備考:器内面に炭化物付着。　30　出土位置・注記:Dカク乱　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文(半截竹管)備考:胎土に骨針含む。　31

出土位置・注記:P511　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(RL)。　**32**　出土位置・注記:P373　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)備考:器外面にネズミの齧り痕。　**33**　出土位置・注記:3トレ西土層　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，複節斜縄文(LRL)備考:胎土に骨針を少量含む。　**34**　出土位置・注記:P357　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)備考:胎土に骨針を含む。　**35**　出土位置・注記:P101　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，単節斜縄文(LR)。　**36**　出土位置・注記:B区上層　器種:深鉢形土器　文様:突起，隆線文，沈線文，単節斜縄文(LR)。　**37**　出土位置・注記:D区包含層　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，単節斜縄文(RL)備考:器外面の隆線文部分にネズミの齧り痕。　**38**　出土位置・注記:表土　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(LR)。　**39**　出土位置・注記:P83　器種:深鉢形土器　文様:微隆線文，単節斜縄文(RL)備考:胎土に骨針を含む。　**40**　出土位置・注記:表土　器種:深鉢形土器　文様:微隆線文，単節斜縄文(RL)備考:胎土に金(黒)雲母を多量含む。　**41**　出土位置・注記:ベルト1カク乱　器種:深鉢形土器　文様:微隆線文，単節斜縄文(LR)。　**42**　出土位置・注記:P90　器種:深鉢形土器　文様:微隆線文，単節斜縄文(RL)。　**43**　出土位置・注記:P413　器種:深鉢形土器　文様:微隆線文，単節斜縄文(LR)備考:器内面に炭化物付着。　**44**　出土位置・注記:D区カク乱　器種:深鉢形土器　文様:微隆線文，単節斜縄文(RL)備考:胎土に金(黒)雲母を多量含む。　**45**　出土位置・注記:2トレ西土層　器種:深鉢形土器　文様:微隆線文，単節斜縄文(RL)備考:胎土に金(黒)雲母を多量含む。

第23図　**1**　出土位置・注記:カク乱　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(LR)。　**2**　出土位置・注記:P366　器種:深鉢形もしくは鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(LR)。　**3**　出土位置・注記:P358　器種:深鉢形もしくは鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(LR)。　**4**　出土位置・注記:2トレ下層，表土　器種:深鉢形土器　文様:微隆線文，単節斜縄文(LR)備考:器外面に炭化物付着。　**5**　出土位置・注記:P413　器種:深鉢形土器　文様:突起，微隆線文，単節斜縄文(RL)備考:器外面に炭化物付着。　**6**　出土位置・注記:P50　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，無節斜縄文(R)。　**7**　出土位置・注記:2-3tr表土　器種:深鉢形土器　文様:微隆線文，単節斜縄文(LR)。　**8**　出土位置・注記:D区住フク土上層　器種:深鉢形土器　文様:条縄文　備考:胎土に泥岩片が目立つ。　**9**　出土位置・注記:P423・475　器種:浅鉢形土器あるいは有孔鍔付土器　文様:器内外面赤彩。　**10**　出土位置・注記:2トレ西上層　器種:有孔鍔付土器か　文様:鍔状の隆帯　備考:胎土に骨針を含む。　**11**　出土位置・注記:ベルト3下層　器種:深鉢形土器　文様:沈線文，単節斜縄文(LR)，器外面(無文部のみか)赤彩。　**12**　出土位置・注記:P517　器種:深鉢形土器か　文様:沈線文，単節斜縄文(RL)，器外面(無文部のみか)赤彩。　**13**　出土位置・注記:住フク土　器種:深鉢形土器　文様:単節斜縄文(RL)備考:焼成後の穿孔が2孔あり，補修孔か。　**14**　出土位置・注記:表土　器種:深鉢形土器　文様:突起，隆線文，沈線文，刺突文。　**15**　出土位置・注記:D区カク乱　器種:深鉢形土器　文様:隆線文，沈線文，刺突文，単節斜縄文(LR)。　**16**　出土位置・注記:包含層下層，2トレ下層　器種:深鉢形土器　文様:隆線文(棒状工具による刻みあり)，沈線文(鋭状工具，格子状文を構成)備考:器外面に炭化物付着。器外面にネズミの齧り痕。　**17**　出土位置・注記:2-3tr表土　器種:深鉢形土器　文様:条縄文(格子状文を構成)。

土製品　土製品には，粘土を成形したものと，土器の破片を素材としたものの大きく2つがある。

粘土を成形したものは4点（第24図）で，全体が推定され器種が特定できるのは，耳飾り（1）と腕輪（2）の2点である。耳飾りの渦状文は，イモガイ類の螺塔部の内面を模倣したものと見られ，表面の白色付着物も，貝殻を模倣するために塗布されていたことが考えられる。腕輪は，オオツタノハ製貝輪を模造したものであろう。

土器の破片を素材としたもの（第25図）には，土器片錘と土製円盤とがある。土器片錘とその未成品は34点，土製円盤は27点を掲載したが，この他にいずれかの未成品と見られる土器片が5点抽出されている。

以下に，各資料について計測と観察を記載する。

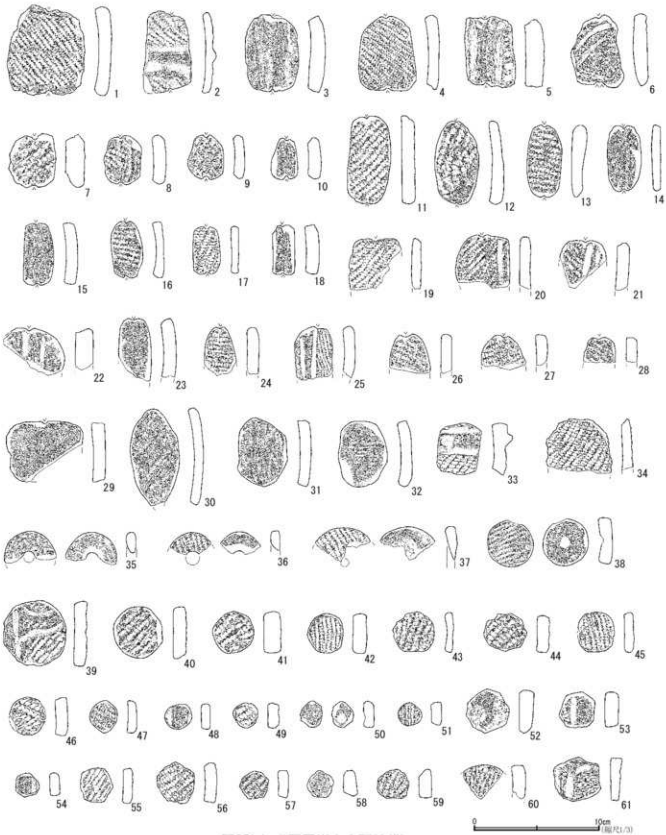
第24図　**1**　出土位置・注記:住北　器種:耳飾り　法量:長さ56mm，幅27mm，厚さ11mm　重量:9.3g　文様:渦状沈線文　備考:直径58mmほどと推定される。胎土に赤色粒子が目立つ。渦状文部分に白色付着物あり(図版3参照)。　**2**　出土位置・注記:カク乱B　器種:腕輪　法量:長さ26mm，幅36mm，厚さ12mm　重量:7.8g　備考:オオツタノハ製貝輪の模造品と推定される。　**3**　出土位置・注記:北側カク乱　器種:不明　法量:長さ24mm，幅7mm，厚さ6mm　重量:0.9g。　**4**　出土位置・注記:不明　器種:不明　法量:長さ21mm，幅8mm，厚さ8mm　重量:1.4g　備考:焼成前に傷あり。

第25図　**1**　出土位置・注記:包含層　器種:土器片錘　法量:長さ71mm，幅62mm，厚さ12mm　重量:69.1g　備考:周縁は部分的に研磨。　**2**　出土位置・注記:D区包含層　器種:土器片錘　法量:長さ64mm，幅38mm，厚さ9mm　重量:24.1g。　**3**　出土位置・注記:表土　器種:土器片錘　法量:長さ60mm，幅42mm，厚さ16mm　重量:42.5g。　**4**　出土位置・注記:D包含層一括　器種:土器片錘　法量:長さ58mm，幅45mm，厚さ10mm　重量:34.1g。　**5**　出土位置・注記:住炉F区　器種:土器片錘　法量:長さ56mm，幅40mm，厚さ20mm　重量:48.6g　備考:周縁は研磨なし。　**6**　出土位置・注記:P340　器種:土器片錘　法量:長さ57mm，幅42mm，厚さ11mm　重量:28.0g　備考:周縁は部分的に研磨。　**7**　出土位置・注記:ベルト中央　器種:土器片錘　法量:長さ44mm，幅37mm，厚さ16mm　重量:30.4g　備考:周縁の研磨は雑。　**8**　出土位

第24図　調査区出土土製品（1）

置・注記：ベルト北側住フク土　器種：土器片錘　法量：長さ38mm、幅29mm、厚さ12mm　重量：15.5g。　**9**　出土位置・注記：D区住フク土上層　器種：土器片錘　法量：長さ34mm、幅28mm、厚さ9mm　重量：11.0g。　**10**　出土位置・注記：C区カク乱　器種：土器片錘　法量：長さ33mm、幅21mm、厚さ10mm　重量：8.0g　備考：周縁は部分的に研磨。　**11**　出土位置・注記：ベルト北側カク乱　器種：土器片錘　法量：長さ69mm、幅34mm、厚さ11mm　重量：33.4g。　**12**　出土位置・注記：表土　器種：土器片錘　法量：長さ65mm、幅35mm、厚さ10mm　重量：28.2g。　**13**　出土位置・注記：カク乱・ベルト南側　器種：土器片錘　法量：長さ57mm、幅28mm、厚さ12mm　重量：21.1g。　**14**　出土位置・注記：Dカク乱　器種：土器片錘　法量：長さ52mm、幅27mm、厚さ7mm　重量：12.2g。　**15**　出土位置・注記：表土　器種：土器片錘　法量：長さ49mm、幅24mm、厚さ11mm　重量：16.3g　備考：口縁部を利用。　**16**　出土位置・注記：表土　器種：土器片錘　法量：長さ44mm、幅24mm、厚さ8mm　重量：11.0g。　**17**　出土位置・注記：カク乱B　器種：土器片錘　法量：長さ37mm、幅22mm、厚さ7mm　重量：8.2g。　**18**　出土位置・注記：2・3trの間西側表土　器種：土器片錘　法量：長さ39mm、幅17mm、厚さ11mm　重量：9.9g　備考：周縁の研磨は雑。　**19**　出土位置・注記：3トレ西上層　器種：土器片錘　法量：長さ40mm、幅41mm、厚さ9mm　重量：14.2g　備考：周縁の研磨は雑。　**20**　出土位置・注記：2ベルト上層　器種：土器片錘　法量：長さ42mm、幅43mm、厚さ11mm　重量：22.4g。　**21**　出土位置・注記：3トレ表土層　器種：土器片錘　法量：長さ39mm、幅37mm、厚さ12mm　重量：14.2g。　**22**　出土位置・注記：住下層　器種：土器片錘　法量：長さ37mm、幅49mm、厚さ14mm　重量：24.8g　備考：周縁の研磨は雑。　**23**　出土位置・注記：表土　器種：土器片錘　法量：長さ49mm、幅26mm、厚さ11mm　重量：17.6g。　**24**　出土位置・注記：表採　器種：土器片錘　法量：長さ38mm、幅25mm、厚さ10mm　重量：11.1g　備考：耕作による傷多い。　**25**　出土位置・注記：表土南　器種：土器片錘　法量：長さ42mm、幅30mm、厚さ11mm　重量：16.1g。　**26**　出土位置・注記：表土　器種：土器片錘　法量：長さ32mm、幅32mm、厚さ9mm　重量：10.1g。　**27**　出土位置・注記：Dカク乱　器種：土器片錘　法量：長さ26mm、幅35mm、厚さ10mm　重量：8.6g　備考：表面に炭化物付着。　**28**　出土位置・注記：Dはカク乱　器種：土器片錘　法量：長さ20mm、幅26mm、厚さ10mm　重量：6.2g。　**29**　出土位置・注記：2トレ西下層　器種：土器片錘　法量：長さ48mm、幅60mm、厚さ11mm　重量：32.0g　備考：周縁の研磨は雑。ネズミの齧り痕あり。　**30**　出土位置・注記：P242　器種：土器片錘未成品　法量：長さ76mm、幅38mm、厚さ8mm　重量：28.0g　備考：周縁は研磨。　**31**　出土位置・注記：住フク土上層　器種：土器片錘未成品　法量：長さ54mm、幅41mm、厚さ10mm　重量：26.6g　備考：周縁は研磨。　**32**　出土位置・注記：表土　器種：土器片錘未成品　法量：長さ52mm、幅39mm、厚さ10mm　重量：21.9g　備考：周縁は研磨。　**33**　出土位置・注記：カク乱ベルト南側　器種：土器片錘未成品　法量：長さ40mm、幅35mm、厚さ16mm　重量：23.0g　備考：周縁は研磨。　**34**　出土位置・注記：Aカク乱　器種：土器片錘未成品か　法量：長さ44mm、幅52mm、厚さ10mm　重量：25.9g　備考：周縁は研磨なし。器内外面に赤彩痕。　**35**　出土位置・注記：表採　器種：有孔土製円盤　法量：長さ23mm、幅41mm、厚さ8mm　重量：7.0g　備考：耕作による傷多い。　**36**　出土位置・注記：カク乱Bベルト北側　器種：有孔土製円盤　法量：長さ18mm、幅32mm、厚さ8mm　重量：4.2g。　**37**　出土位置・注記：カク乱B　器種：有孔土製円盤　法量：長さ27mm、幅43mm、厚さ9mm　重量：7.4g。　**38**　出土位置・注記：表土　器種：土製円盤　法量：長さ36mm、幅36mm、厚さ10mm　重量：15.1g　備考：表面から穿孔途中のような穴あり。　**39**　出土位置・注記：P457　器種：土製円盤　法量：長さ52mm、幅50mm、厚さ12mm　重量：33.0g。　**40**　出土位置・注記：表土　器種：土製円盤　法量：長さ41mm、幅38mm、厚さ11mm　重量：21.1g。　**41**　出土位置・注記：表土　器種：土製円盤　法量：長さ33mm、幅32mm、厚さ15mm　重量：19.5g。　**42**　出土位置・注記：カク乱ベルト北側　器種：土製円盤　法量：長さ31mm、幅28mm、厚さ11mm　重量：12.0g。　**43**　出土位置・注記：表土　器種：土製円盤　法量：長さ31mm、幅32mm、厚さ7mm　重量：7.4g。　**44**　出土位置・注記：ベルト中央　器種：土製円盤　法量：長さ30mm、幅34mm、厚さ11mm　重量：12.3g　備考：周縁は極めて部分的に研磨。　**45**　出土位置・注記：ベルト1カク乱　器種：土製円盤　法量：長さ31mm、幅28mm、厚さ8mm　重量：8.7g。　**46**　出土位置・注記：住フク土　器種：土製円盤　法量：長さ30mm、幅27mm、厚さ10mm　重量：9.2g。　**47**　出土位置・注記：住フク土上層　器種：土製円盤　法量：長さ25mm、幅22mm、厚さ8mm　重量：5.3g。　**48**　出土位置・注記：D区フク土一括　器種：土製円盤　法量：長さ20mm、幅21mm、厚さ7mm　重量：3.6g。　**49**　出土位置・注記：ベルト南側住内　器種：土製円盤　法量：長さ20mm、幅20mm、厚さ9mm　重量：4.2g。　**50**　出土位置・注記：不明　器種：土製円盤　法量：長さ21mm、幅18mm、厚さ9mm　重量：3.7g　備考：周縁は極めて部分的に研磨。表面からの穿孔途中のような穴あり。　**51**　出土位置・注記：ベルト北側住フク土　器種：土製円盤　法量：長さ19mm、幅19mm、厚さ10mm　重量：3.2g　備考：周縁の研磨は雑。　**52**　出土位置・注記：D区住フク土上層　器種：土製円盤　法量：長さ34mm、幅33mm、厚さ13mm　重量：15.5g　備考：周縁は部分的に研磨され、研磨どうしが稜を形成。　**53**　出土位置・注記：住フク土上層　器種：土製円盤　法量：長さ28mm、幅29mm、厚さ12mm　重量：11.9g　備考：周縁の研磨どうしが稜を形成。　**54**　出土位置・注記：D包含層一括　器種：土製円盤　法量：長さ18mm、幅18mm、厚さ8mm　重量：3.1g　備考：周縁の研磨どうしが稜を形成。　**55**　出土位置・注記：表採　器種：土製円盤　法量：長さ28mm、幅26mm、厚さ8mm　重量：6.6g　備考：右側縁下部を除いて研磨。　**56**　出土位置・注記：B区住フク土下層　器種：土製円盤　法量：長さ33mm、幅30mm、厚さ11mm　重量：11.4g　備考：周縁は左下側縁を除いて研磨。　**57**　出土位置・注記：D区フク土上層　器種：土製円盤　法量：長さ22mm、幅23mm、厚さ8mm　重量：5.1g　備考：周縁は極めて部分的に研磨。　**58**　出土位置・注記：D区フク土上層　器種：土製円盤　法量：長さ22mm、幅21mm、厚さ12mm　重量：5.6g　備考：周縁は部分的に研磨。　**59**　出土位置・注記：D区住フク土　器種：土製円盤　法量：長さ23mm、幅25mm、厚さ11mm　重量：7.4g　備考：周縁は研磨なし。　**60**　出土位置・注記：カク乱西側　器種：土製円盤　法量：長さ26mm、幅30mm、厚さ10mm　重量：7.3g。　**61**　出土位置・注記：D区フク土上層　器種：土製円盤　法量：長さ35mm、幅38mm、厚さ9mm　重量：12.3g　備考：下側縁のみを研磨。

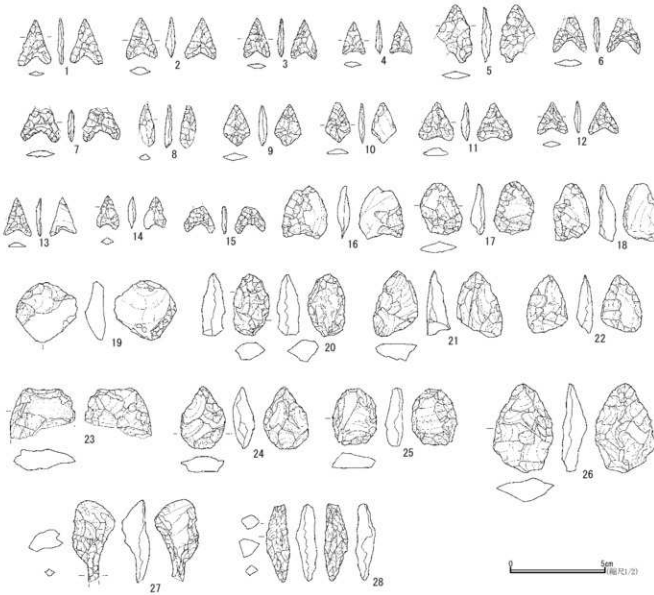
石　器　剥片を素材として加工された石器（第26・27図）には，石鏃が15点，石鏃の未成品が11点，石錐が2点，石匙が1点，削器が2点ある。この他，剥片・石核等が，369点の3,317g出土している。そのうちメノウは，259点の2,639g，点数で70%，重量で80%を



第25図　調査区出土土製品（2）

占めている。これに次いでチャートが56点の360ｇ，点数で15%，重量で11%である。その他の石材は54点の318ｇであった。その他の石材には，流紋岩，珪質頁岩，デイサイト等があり，遠隔地の石材である黒曜石は２点の８ｇ，硬質頁岩は９点の23ｇで，これらは重量で１％未満に過ぎない。剥片・石核等の石材組成は，石鏃の石材組成によく一致している。

礫を素材として加工，あるいはそのまま使用した石器

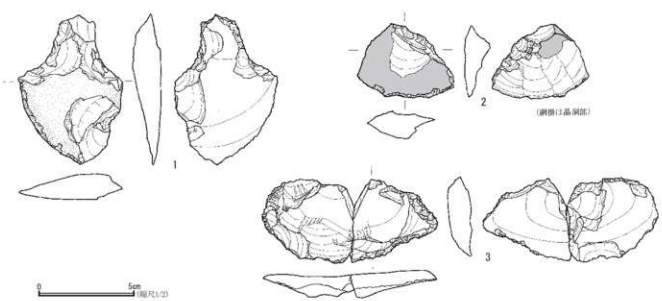


第26図　調査区出土石器（1）

（第28～30図）には，打製石斧が5点，礫斧が2点，磨製石斧が1点，浮子が3点，礫石錘が5点，磨石・敲石・凹石が10点，石皿・凹石が5点ある。この他，砂岩の礫片の中に，石皿あるいは砥石の使用面の極一部を残すものがあり，これが残存しない礫片についても，その同一個体の破片ではないかと見られるものがあった。礫片のうち長軸が10cm以上の43点は，このような砂岩の礫片が22点を占めている。火熱を受けた痕跡を明瞭に残したものが多く，石器として使用された後に分割されて，石組炉を構成する石材としても利用されたことが考えられた。これについては，代表的なものを掲載するにとどめている。浮子の素材の軽石も，長さ165㎜，幅65㎜，厚さ60㎜ほどの礫が出土している。

以下に，石器の各資料について計測と観察を記載する。

第26図　**1**　出土位置・注記：北側カク乱　器種：石鏃　石材：メノウ　法量：長さ24㎜，幅17㎜，厚さ3㎜　重量：0.7ｇ。　**2**　出土位置・注記：C区フク土上層　器種：石鏃　石材：メノウ（赤色）　法量：長さ22㎜，幅17㎜，厚さ5㎜　重量：1.0ｇ。　**3**　出土位置・注記：カク乱ベルト北側　器種：石鏃　石材：メノウ（黒色）　法量：長さ21㎜，幅14㎜，厚さ3㎜　重量：0.6ｇ。　**4**　出土位置・注記：住居B区フク土上層　器種：石鏃　石材：メノウ　法量：長さ18㎜，幅12㎜，厚さ4㎜　重量：0.5ｇ。　**5**　出土位置・注記：S67　器種：石鏃　石材：メノウ　法量：長さ30㎜，幅18㎜，厚さ5㎜　重量：2.1ｇ。　**6**　出土位置・注記：S120　器種：石鏃　石材：メノウ　法量：長さ19㎜，幅18㎜，厚さ4㎜　重量：0.7ｇ。　**7**　出土位置・注記：S68　器種：石鏃　石材：メノウ　法量：長さ18㎜，幅20㎜，厚さ4㎜　重量：1.0ｇ。　**8**　出土位置・注記：ベルト3下層　器種：石鏃　石材：メノウ　法量：長さ23㎜，幅8㎜，厚さ4㎜　重量：0.5ｇ。　**9**　出土位置・注記：表土　器種：石鏃　石材：メノウ　法量：長さ22㎜，幅14㎜，厚さ4㎜　重量：0.9ｇ。　**10**　出土位置・注記：S115　器種：石鏃　石材：メノウ（橙色）　法量：長さ22㎜，幅13㎜，厚さ3㎜　重量：0.7ｇ。　**11**　出土位置・注記：S74

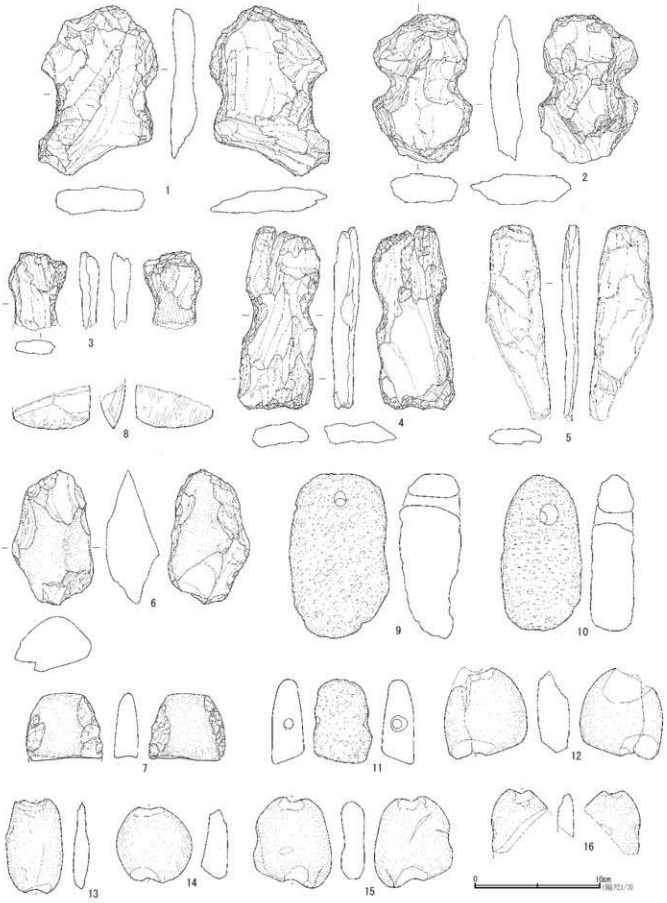


第27図　調査区出土石器(2)

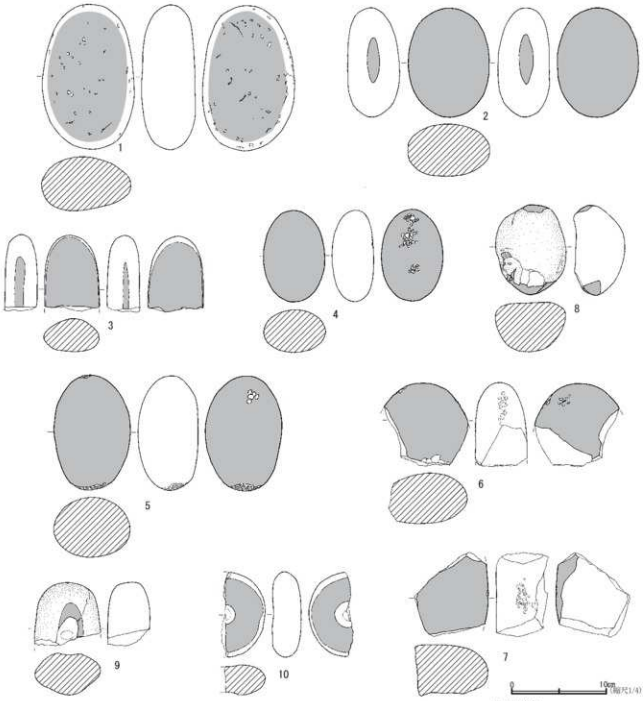
器種:石鏃　石材:チャート　法量:長さ20mm、幅18mm、厚さ4mm　重量:1.2g。　**12**　出土位置・注記:S4　器種:石鏃　石材:チャート　法量:長さ17mm、幅16mm、厚さ3mm　重量:0.6g。　**13**　出土位置・注記:表土　器種:石鏃　石材:チャート　法量:長さ20mm、幅14mm、厚さ3mm　重量:0.4g。　**14**　出土位置・注記:表採　器種:石鏃　石材:デイサイト　法量:長さ17mm、幅11mm、厚さ5mm　重量:0.5g。　**15**　出土位置・注記:S214　器種:石鏃　石材:デイサイト　法量:長さ14mm、幅16mm、厚さ2mm　重量:0.5g。　**16**　出土位置・注記:ベルト北側カク乱　器種:石鏃未成品　石材:メノウ　法量:長さ28mm、幅24mm、厚さ6mm　重量:3.4g。　**17**　出土位置・注記:S5　器種:石鏃　石材:メノウ　法量:長さ38mm、幅22mm、厚さ8mm　重量:3.7g。　**18**　出土位置・注記:2trの間西側表土　器種:石鏃未成品　石材:メノウ　法量:長さ30mm、幅19mm、厚さ9mm　重量:4.1g。　**19**　出土位置・注記:2trの間西側表土　器種:石鏃未成品　石材:メノウ　法量:長さ31mm、幅33mm、厚さ11mm　重量:8.5g。　**20**　出土位置・注記:表土　器種:石鏃未成品　石材:メノウ　法量:長さ33mm、幅19mm、厚さ12mm　重量:8.1g。　**21**　出土位置・注記:2trの間西側表土　器種:石鏃未成品　石材:メノウ　法量:長さ35mm、幅24mm、厚さ13mm　重量:8.1g。　**22**　出土位置・注記:CEフク土上層　器種:石鏃未成品　石材:玉髄(黄褐色)　法量:長さ31mm、幅22mm、厚さ9mm　重量:4.4g。　**23**　出土位置・注記:カク乱ベルト南側　器種:石鏃未成品　石材:メノウ　法量:長さ27mm、幅34mm、厚さ11mm　重量:11.6g。　**24**　出土位置・注記:2tr.3trの間東側表土　器種:石鏃未成品　石材:チャート　法量:長さ33mm、幅24mm、厚さ12mm　重量:7.2g。　**25**　出土位置・注記:表採　器種:石鏃未成品　石材:チャート　法量:長さ30mm、幅24mm、厚さ9mm　重量:7.4g。　**26**　出土位置・注記:ベルト1フク土　器種:石鏃未成品　石材:チャート　法量:長さ42mm、幅32mm、厚さ13mm　重量:16.4g。　**27**　出土位置・注記:不明　器種:石錐　石材:メノウ　法量:長さ44mm、幅23mm、厚さ15mm　重量:29.3g。　**28**　出土位置・注記:表土中　器種:石錐　石材:チャート　法量:長さ40mm、幅12mm、厚さ11mm　重量:4.7g。

第27図　**1**　出土位置・注記:2tr.3trの間西側表土　器種:石匙　石材:流紋岩　法量:長さ79mm、幅55mm、厚さ15mm　重量:47.6g。　**2**　出土位置・注記:S192　器種:削器　石材:メノウ　法量:長さ39mm、幅51mm、厚さ15mm　重量:19.8g。　**3**　出土位置・注記:S139・S169　器種:削器　石材:珪質頁岩　法量:長さ44mm、幅92mm、厚さ13mm　重量:48.0g　備考:分割後左側の破片(S169)が再加工されている。

第28図　**1**　出土位置・注記:S183　器種:打製石斧　石材:粘板岩　法量:長さ122mm、幅92mm、厚さ20mm　重量:300.5g。　**2**　出土位置・注記:S182　器種:打製石斧　石材:粘板岩　法量:長さ117mm、幅79mm、厚さ24mm　重量:268.9g。　**3**　出土位置・注記:ベルト中央　器種:打製石斧　石材:粘板岩　法量:長さ60mm、幅42mm、厚さ16mm　重量:47.3g。　**4**　出土位置・注記:S205　器種:打製石斧　石材:粘板岩　法量:長さ144mm、幅58mm、厚さ16mm　重量:210.6g。　**5**　出土位置・注記:S234　器種:打製石斧　石材:粘板岩　法量:長さ151mm、幅45mm、厚さ13mm　重量:111.4g。　**6**　出土位置・注記:S52　器種:礫斧　石材:ホルンフェルス　法量:長さ106mm、幅62mm、厚さ41mm　重量:275.0g。　**7**　出土位置・注記:P583　器種:礫斧　石材:ホルンフェルス　法量:長さ51mm、幅60mm、厚さ18mm　重量:84.3g。　**8**　出土位置・注記:S69　器種:磨製石斧　石材:蛇紋岩　法量:長さ34mm、幅61mm、厚さ19mm　重量:35.2g。　**9**　出土位置・注記:S254　器種:浮子　石材:軽石　法量:長さ130mm、幅79mm、厚さ49mm　重量:92.0g　備考:孔径7mmの穿孔。　**10**　出土位置・注記:S231　器種:浮子　石材:軽石　法量:長さ123mm、幅64mm、厚さ34mm　重量:39.2g　備考:孔径9mmの穿孔。　**11**　出土位置・注記:CIX2・3tr表土　器種:浮子　石材:軽石　法量:長さ66mm、幅46mm、厚さ26mm　重量:16.7g　備考:孔径7mmの穿孔。　**12**　出土位置・注記:CIXカク乱　器種:礫石錘　石材:砂岩　法量:長さ71mm、幅66mm、厚さ25mm　重量:150.7g。　**13**　出土位置・注記:2tr3trの間西側表土　器種:礫石錘　石材:砂岩　法量:長さ72mm、幅62mm、厚さ20mm　重量:108.8g。　**14**　出土位置・注記:S194　器種:礫石錘　石材:砂岩　法量:長さ60mm、幅60mm、厚さ20mm　重量:98.3g。　**15**　出土位置・注記:2tr3trの間　器種:礫石錘　石材:角閃石片岩　法量:長さ75mm、幅45mm、厚さ12mm　重量:61.0g。　**16**　出土位置・注記:表土　器種:礫石錘　石材:ホルンフェ



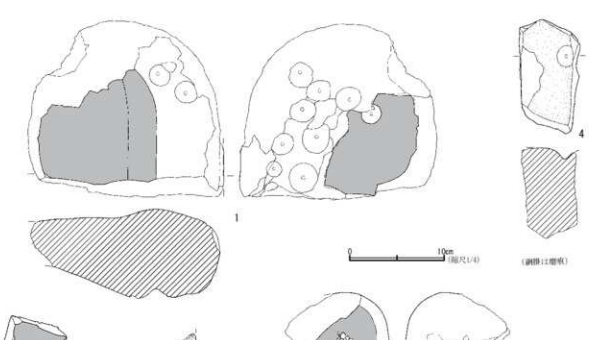
第28図　調査区出土石器（3）



第29図　調査区出土石器(4)

ルス　法量:長さ50mm、幅44mm、厚さ13mm　重量:33.3ｇ。

第29図　**1**　出土位置・注記:S238　器種:磨石　石材:アプライト　法量:長さ152mm、幅97mm、厚さ57mm　重量:1212.8ｇ。　**2**　出土位置・注記:S158　器種:磨石　石材:砂岩　法量:長さ115mm、幅86mm、厚さ55mm　重量:775.9ｇ　備考:両側面に平坦面を形成。　**3**　出土位置・注記:表採　器種:磨石　石材:砂岩　法量:長さ80mm、幅59mm、厚さ35mm　重量:247.5ｇ　備考:両側面に平坦面を形成。焼痕(黒化、赤化)あり、破断面にも見られる。　**4**　出土位置・注記:S135　器種:磨石・敲石　石材:砂岩　法量:長さ97mm、幅65mm、厚さ44mm　重量:401.1ｇ　備考:表面に擦作による金属痕あり。　**5**　出土位置・注記:S150　器種:磨石・敲石　石材:砂岩　法量:長さ121mm、幅81mm、厚さ63mm　重量:854.2ｇ。　**6**　出土位置・注記:２トレ表土層　器種:磨石・敲石　石材:砂岩　法量:長さ88mm、幅89mm、厚さ55mm　重量:537.9ｇ　備考:焼痕(黒化)あり。　**7**　出土位置・注記:S235　器種:磨石・敲石　石材:砂岩　法量:長さ89mm、幅78mm、厚さ55mm　重量:484.2ｇ　備考:焼痕(黒化)あり、破断面にも見られる。　**8**　出土位置・注記:S235　器種:磨石　石材:緑簾石角閃石片岩　法量:長さ95mm、幅74mm、厚さ53mm　重量:575.9ｇ　備考:上下両端部のみを使用。焼痕(赤化)あり。　**9**　出土位置・注記:包含層下層　器種:磨石・凹石　石材:アプライト　法量:長さ67mm、幅70mm、厚さ44mm　重量:259.6ｇ。　**10**　出土位置・注記:S90　器種:磨石・凹石　石材:砂岩　法量:長さ89mm、幅46mm、厚さ31mm　重量:171.1ｇ。



第30図　調査区出土石器（5）

第31図　調査区出土石製品

第30図　**1**　出土位置・注記：表採　器種：石皿・凹石　石材：砂岩　法量：長さ195mm，幅208mm，厚さ94mm　重量：5004ｇ　備考：焼痕（主に黒化，ひび割れ）あり。後世の新しい剥落あり。　**2**　出土位置・注記：S191　器種：石皿　石材：砂岩　法量：長さ101mm，幅67mm，厚さ51mm　重量：489.1ｇ　備考：磨面に赤色顔料付着。焼痕（黒化）あり。　**3**　出土位置・注記：2tr下層　器種：石皿あるいは砥石・台石・凹石　石材：砂岩　法量：長さ124mm，幅112mm，厚さ72mm　重量：912.5ｇ　備考：焼痕（黒化，赤化）あり，破断面にも見られる。　**4**　出土位置・注記：ベルト北側カク乱　器種：凹石　石材：砂岩　法量：長さ121mm，幅63mm，厚さ117mm　重量：923.0ｇ　備考：焼痕（黒化，赤化）あり。　**5**　出土位置・注記：表土　器種：凹石　石材：砂岩　法量：長さ82mm，幅39mm，厚さ44mm　重量：191.1ｇ。

石製品　石製品としたのは，3点（第31図）である。彫刻による沈線で頭部を作出した2点（1・2）については，「石棒」の呼称で報告されることもあるが，「石棒」とは区別し「男根状石製品」の名称を採用した。ともに棒状礫の端部付近を加工したもので，1の表面には研磨の痕跡も明瞭である。但し，剥離や敲打による成形や調整の痕跡は認められない。3は，石材が粘板岩で，全体が剥離により成形されており，縄文時代晩期の石棒未成品のうち石剣の剥離段階によく似ている。但し，調査区内からは，当該期の土器が検出されておらず，また，「男

根状石製品」の未成品とも考え難い。

以下に，各資料について計測と観察を記載する。

第31図　**1**　出土位置・注記：D区カク乱　器種：男根状石製品　石材：粘板岩　法量：長さ101mm，幅35mm，厚さ18mm　重量：74.0 g　備考：括れ部に沈線状の彫刻が廻る。裏面と左側面のほとんどは自然面か。

2　出土位置・注記：C区カク乱　器種：男根状石製品　石材：緑泥石角閃石片岩　法量：長さ69mm，幅27mm，厚さ18mm　重量：43.4 g　備考：沈線状の彫刻が廻る。素材は棒状礫。　**3**　出土位置・注記：S80　器種：不明　石材：粘板岩　法量：長さ129mm，幅28mm，厚さ16mm　重量：81.2 g　備考：石剣の剥離段階未成品のように見える。

Ⅲ　調査の成果と課題

はじめに

君ヶ台遺跡第７次調査では，第１号住居跡という縄文時代中期「加曽利Ｅ２式」の住居跡を検出した。第１次調査区にも当該期の遺構は検出されていたのかもしれないが，詳細が報告されないままであり，第２次調査が検出したのは「加曽利Ｅ３式・４式」の住居跡であった。第６次調査が対象とした斜面貝塚には，「加曽利Ｅ２～３式」の貝層が堆積しており，遺跡地内に「加曽利Ｅ２式」の住居跡が埋没していることは充分に予想されていたのではあるが，これを確認するに至った。住居跡の上位には，「加曽利Ｅ２～４式」の遺物包含層が形成されており，土器とともに土製品・石器・石製品が出土している。今回の調査の成果と課題としては，遺構のうち住居跡に付属した土器埋設石組炉（第32図１）について，遺物のうち「男根状石製品」（第36図１・２）について，周辺の事例をもとに若干の考察を加えておきたい。

１．土器埋設石組炉について

ひたちなか市域では，「加曽利Ｅ２式」の石組炉が大房地遺跡，津田天神山遺跡，館出遺跡の３遺跡においても報告されている。

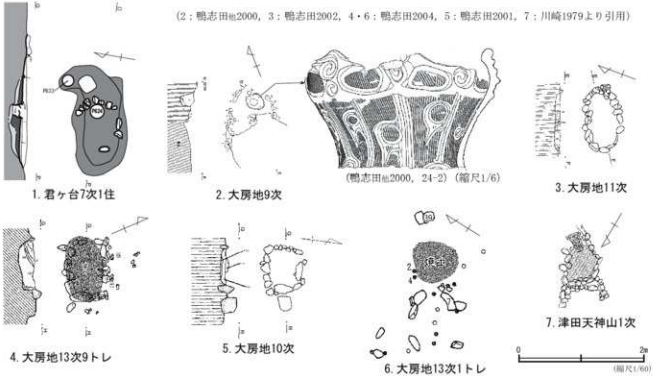
大房地遺跡第９次（第32図２）　大房地遺跡では，住居跡の床面がローム層直上～黒色土中に位置し，竪穴が掘り込まれた壁の検出が困難なことによるのであろう。いずれも住居跡としては報告されていない。第９次調査は，地権者が土器を掘り出した情報をもとに実施され，その地点から炉址が検出された。南側の攪乱が土器を掘り出した痕跡であるらしい。「石囲いの中に２基の埋設土器が設置されていた可能性は高い」（鴨志田㎥2000）と考えられているが，新旧で捉えられるものかもしれない。残存部分の状態からは，君ヶ台遺跡第７次第１号住居跡によく似ており，これも，「加曽利Ｅ２式新段階」の土器埋設石組炉である。「残存していた河原石には，ハンマーや磨石，石皿として使用された痕跡のあるものがあった」と記載され，石器が炉石に転用された事例でもある。

大房地遺跡第11次（第32図３）　炉址は，「内側で東西83㎝，南北40㎝の楕円形」で，「川原石は最小で６㎝，最大で22㎝を測り，合計22個の石を使用して炉を形成していた」(鴨志田2002)。南西側の一部を欠くが，石組は全体的によく残されている。周辺から出土した土器（第34図）から判断して，「加曽利Ｅ２式新段階」の石組炉である。

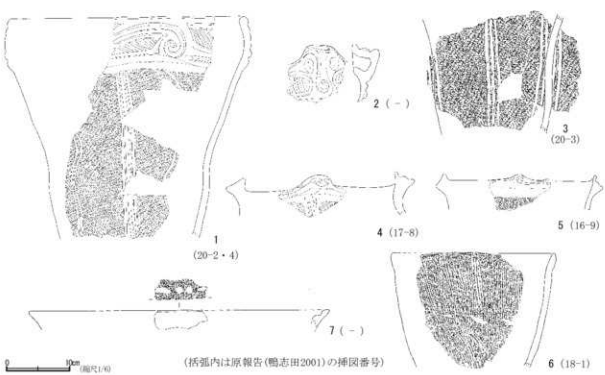
大房地遺跡第13次（第32図４・６）　第９号トレンチから検出された炉址（４）は，「合計25個の石を用いて，長軸１ｍ，短軸70㎝の楕円形状に配置する。石は長軸35㎝のものを最大に，概ね15～20㎝程度であり，表面は焼けている」(鴨志田2004)。一部を欠くが，石組は全体的によく残されている。第１号トレンチから検出された炉址（６）は，「焼土が長軸約80㎝，短軸約60㎝の不整円形状に残存」，周囲には「表面は焼跡」の礫が散在する状況で検出された。石組の礫が抜去され，その一部が周囲に放置されたものと考えられる。調査区から出土した土器（第35図）からは，ともに「加曽利Ｅ２～３式」の石組炉である。

大房地遺跡第10次（第32図５）　炉址は，「石の内側で東西55㎝，南北45㎝の長方形のプランを有し，大小27個の礫石で囲まれていた。礫石は，人頭大から拳大までのサイズであるが，多くは拳大のものである」(鴨志田2001)。周辺から出土した土器（第33図）から判断して，「加曽利Ｅ２式古段階」の石組炉である。炉址東側にやや離れて「人頭大」の礫が埋置されていることに注意したい。これが抜去されると，君ヶ台遺跡第７次第１号住居跡の炉址東側のようなピットとして検出されることになろう。

津田天神山遺跡第１次（第32図７）　1965（昭和40）年の発掘調査で報告された「Ｖ号ピット」の「配石遺構」を住居跡に伴う炉址と判断した（実測図は川崎1979より引用）。この調査でも，大房地遺跡と同じく，住居跡の壁は検出されていない。「石組みはあたかも舟形のように自然石や雨だれ石の残片をならべたもので，その内部は一面に焼土になり，配石遺構の周辺からは不規則な形で柱穴状のピットが発見された」，「配石遺構は石組の部分の長さ140㎝，巾65㎝で石組は先端部を一段にし，



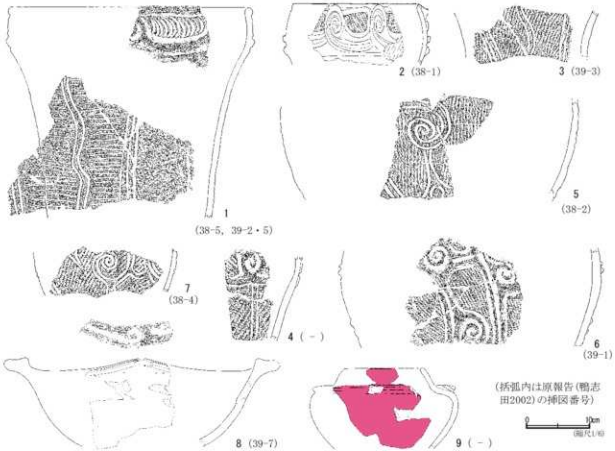
第32図　石組炉の類例



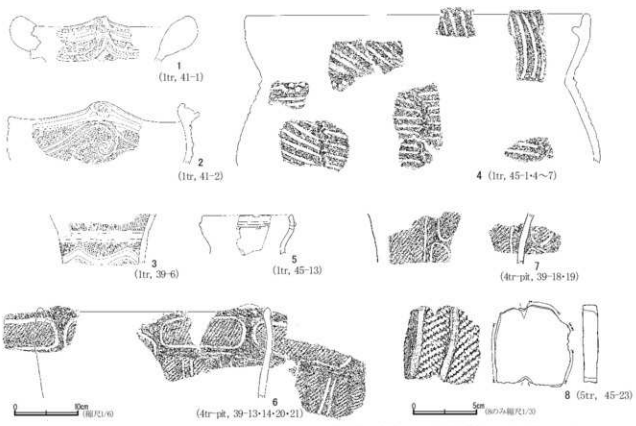
第33図　大房地遺跡第10次調査出土土器

他は三段に組まれていた」，「石組みの中の焼土がつきる部分より約5cmさがり底面に接して加曽利E式土器が横倒した形で発見された」（伊東・川崎 1971）。これは，「加曽利E２式新段階」の石組炉である。また，第２号住居址は，「加曽利E２式」を埋設した小型の土器埋設石組炉であり，「Ⅵ号ピット」も「加曽利E式」の石組炉であるらしいが，炉址についての詳細は明らかでない。

館出遺跡第１次　住居跡の図面や写真は公表されていないが，『勝田市史　別編Ⅱ　考古資料編』に調査についての記載がある。「昭和 47 年（1972），ゴボウ耕作中



第34図　大房地遺跡第11次調査出土土器



第35図　大房地遺跡第13次調査出土土器

に石組の炉址が発見され，勝田市史編さん委員会・考古班によって緊急に発掘調査を実施した結果，縄文中期の住居址１軒を検出した。この住居址はローム面を30㎝ほど掘りこんで構築したものであり，3.65 m × 4.25 m の楕円形を呈する竪穴式住居址である。住居址の中央よりやや東側に寄って70㎝× 80㎝の方形を呈する石囲の炉址が検出された。炉址は10数㎝ほどの自然礫を「コの字状」に１段配列でつくられていた」（鴨志田1979）。炉址付近から出土したという土器も掲載されており，これは「加曽利Ｅ２式新段階」である。

これらの他に調査された「加曽利Ｅ２式」の住居跡には，三反田蛇塚貝塚第５次Ｊ３号住居址が「２基の埋甕炉」（鴨志田㈱1982），大房地遺跡第７次第１・３号住居跡が「地床炉」（住谷㈱1990）と報告されているだけで，中丸川周辺地域における当該期の炉址の典型は石組炉であったと考えることができよう。その石組炉に土器埋設が複合することで土器埋設石組炉が成立している。

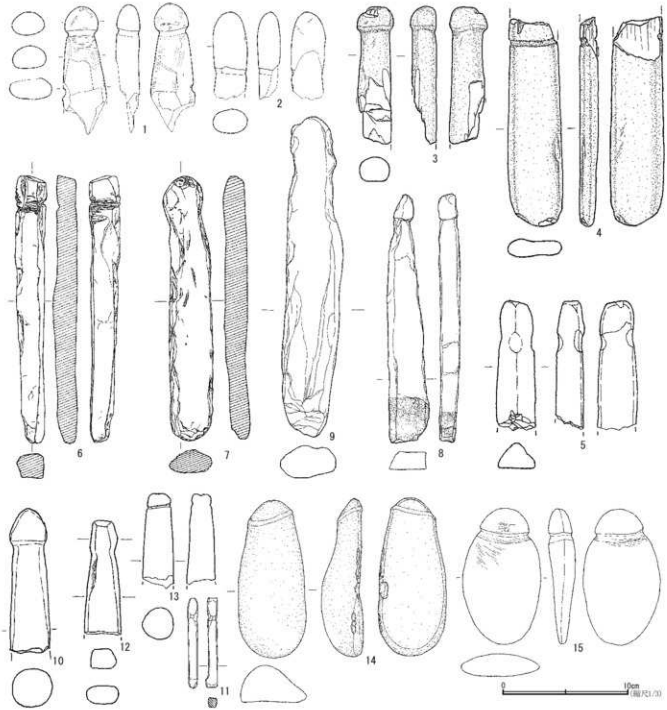
前後する時期の住居跡について，「加曽利Ｅ１式」は，下原遺跡第２次第１号住居址（住谷1990）が「地床炉」，大房地遺跡第３次Ｉ - ２号住居址（住谷㈱1987）についても「地床炉」の可能性があり，石組炉は検出されていない。「加曽利Ｅ３式」は，君ヶ台遺跡第２次３号住居址（川崎・鴨志田1980）が「地床炉」，柴田遺跡第１次第１・２号住居址（住谷㈱1983）及び第２次第１号住居址（住谷㈱1987）の３基が全て「地床炉」であり，石組炉は検出されていない。「加曽利Ｅ４式」は，君ヶ台遺跡第２次４号住居址（川崎・鴨志田1980）が「地床炉」，外野遺跡Ｂ地区第１号住居址（鴨志田1985）が「地床炉」，向野Ｅ遺跡第１号住居跡（白石㈱2007）が土器埋設炉であるが，三反田蛇塚貝塚第10次第９号住居跡（鴨志田・窪田㈱2000）では石組炉が検出され，それは２つの石組炉が複合する形態であった。「称名寺式」は，西中島遺跡第２次（住谷㈱1987）で報告された「Ｉ - １号土坑」が住居跡に伴う炉址ではないかと考えられ，これは小規模な石組炉である。このように市域の報告を集成してみると，「加曽利Ｅ１式」地床炉→「加曽利Ｅ２式」石組炉→「加曽利Ｅ３式」地床炉→「加曽利Ｅ４式」地床炉・石組炉→「称名寺式」石組炉という変遷を描くことができる。

茨城町宮後遺跡（吹野㈱2002・2005）においても「加曽利Ｅ３式」の石組炉は検出されていない。しかしながら，他時期の石組炉についても，ほとんどの礫が抜去されて石組の一部が残るような状況である。「地床炉」とは，石組や埋設土器が付属しない構造の炉という認定ではなく，石組や埋設土器が残されていない炉址に対しての用語にすぎない。君ヶ台遺跡第２次４号住居址や東海村下ノ諏訪南遺跡第18号住居跡（茂木㈱1994）の「地床炉」について，埋設土器が完全に抜去された土器埋設炉であった可能性を指摘（鈴木2007）したように，石組の礫が完全に抜去されたならば石組炉も「地床炉」に分類されてしまうことになる。「加曽利Ｅ１式」についても，宮後遺跡には石組炉が確認されており，近隣の東海村堀米Ａ遺跡第４次SI02（浅間㈱2013）でも石組炉が検出されている。現在までの調査から組み立てられた市域の炉址の変遷が，地域的な特徴として認めうるのかは，今後の調査の課題となろう。石組や土器埋設が抜去された可能性を考慮して，痕跡の検出のための精査が必要であるとともに，住居跡の覆土を含めた遺物包含層の遺物に石組を構成した礫や埋設されていた土器を抽出するための観察も必要である。

２．男根状石製品について

ひたちなか市域では，「加曽利Ｅ２～３式」の上ノ内貝塚（藤本1980）において「石棒・石剣」として報告された３点があるが，頭部を欠くことから確実な資料とは認め難い。茨城県北部域を中心に類例を検索したところ，日立市岩折遺跡，上の内遺跡，八反遺跡，東海村堀米Ａ遺跡，常陸大宮市坪井上遺跡，水戸市軍民坂遺跡，鉾田市吉十北遺跡，小美玉市石川西遺跡に「男根状石製品」を見出した。

石川西遺跡（第36図３・４）　第２号住居跡の「覆土下層」から１点（３）と，第７号住居跡の「覆土中層」から１点（４），計２点の破片が出土し，「石棒」として報告された（小川2009）。３は，長さ10.9㎝，幅3.0㎝，厚さ2.1㎝，重さ84.3ｇで，石材は粘板岩。彫刻と研磨で頭部の括れを作出している。４は，長さ16.5㎝，幅4.3㎝，厚さ1.6㎝，重さ176.0ｇで，石材は粘板岩。彫刻による沈線で頭部を区画している。３は君ヶ台遺跡の１に，４は君ヶ台遺跡の２によく似ている。第２・７号住居跡の「加曽利Ｅ２式」に伴う。



1・2. 君ヶ台遺跡7次，3・4. 小美玉市石川西遺跡（小川2009），5. 鉢田市吉十北遺跡（海老澤ほか2017），6・7. 常陸大宮市坪井上遺跡（千種1999），8・9. 日立市岩折遺跡（福山1992），10・11. 日立市上の内遺跡（湯原ほか1998, 小川2002），12・13. 日立市八反遺跡（片平1997），14. 東海村堀米Ａ遺跡（淺間ほか2013），15. 水戸市軍民坂遺跡（色川ほか2010）

第36図　男根状石製品の類例（１）

吉十北遺跡（第36図５）　遺構外から破片が出土し，「石棒」として報告された（海老澤ほか2017）。長さ10.3㎝，幅3.2㎝，厚さ2.3㎝，重さ93.2ｇで，石材は粘板岩。「微細な敲打」により頭部の括れが作出され，「全面研磨」と記載されている。遺跡には，「阿玉台Ｉｂ式～加曽利Ｅ３式」の遺構が検出されており，中期であっても細別時期は特定できない。

坪井上遺跡（第36図６・７）　第10号住居址から出土した完形の２点が「石剣と石棒」として報告された（千種1999）。出土状況の写真によれば，２点は近接した位置で検出されている。６は，長さ215㎜，幅23㎜，厚さ20㎜重さ146ｇで，石材は粘板岩。彫刻による沈線

で頭部が区画され，頭部から胴部にかけて四角柱の素材礫の角が部分的に研磨あるいは敲打されている。7は，長さ213㎜，幅35㎜，厚さ18㎜，重さ227ｇで，石材は粘板岩。扁平な素材礫の側縁を抉って頭部が作出され，頭部から胴部の側縁が部分的に研磨されている。住居跡の土器は報告されていないが，「出土土器はすべて中期の加曽利ＥⅡ様式の土器片」と記載されている。

岩折遺跡（第36図８・９）　遺構外から完形の２点が出土し，「石剣形の石器と思われるもの」として報告されている（福山1992）。８は，長さ192㎜，幅30㎜，厚さ15㎜，重さ104ｇで，石材は変成砂岩[註1]。彫刻の抉りで頭部が作出されており，四角柱の素材礫の角が胴部のみ部分的に研磨されている。下部が火熱を受けて黒化している。９は，長さ249㎜，幅43㎜，厚さ24㎜，重さ323ｇ。石材は千枚岩である。扁平な素材礫の側縁を抉って頭部が作出され，胴部の側縁が研磨されている。遺跡には，「大木８ａ式～綱取Ⅱ式」の遺構が検出されており，細別時期は特定できない。

上の内遺跡（第36図10・11）　第２次調査（小川2002）の土坑SK1044から出土した破片（10）は「石棒」として，第１次調査（湯原ほ1998）の住居跡SI08から出土した完形の１点（11）は「用途不明石製品」として報告された。10は，掲載図から，長さ116㎜，幅32㎜，厚さ30㎜ほどで，重さと石材は不明。おそらく彫刻や研磨によるのであろう，頭部が作出されている。11は，長さ71㎜，幅９㎜，厚さ７㎜，重さ９ｇで，石材は粘板岩である。抉りで頭部が作出されており，四角柱の素材礫片の角が胴部のみ部分的に研磨されている。それぞれの遺構の「加曽利Ｅ３式」に伴う。

八反遺跡（第36図12・13）　理没谷の遺物包含層から２点の破片が出土し，「石棒」として報告された（片平1997）。12は，長さ89㎜，幅28㎜，厚さ16㎜，重さ69gで，石材は千枚岩系[註2]。抉りにより頭部が作出されており，四角柱の素材礫の角が研磨されている。13は，長さ74㎜，幅24㎜，厚さ23㎜，重さ66gで，石材は三波川変成岩の緑色片岩。円柱状の礫を素材とし，彫刻による沈線で頭部が区画され，頭頂部のみ平滑に研磨されている。包含層には，主に「加曽利Ｅ２～４式」が報告されており，細別時期は特定できない。

堀米Ａ遺跡（第36図14）　SK174という土坑から完形で出土し，本文中では「石棒に見立てた磨石」として報告された（淺間ほ2013）。観察表では「棒状礫」と記載され，「自然礫の上端部や右側縁部に敲打痕らしき浅い凹穴。敲石の可能性あり」と観察されている。長さ12.45㎝，幅5.38㎝，厚さ3.32㎝，重さ248.04ｇで，石材は砂岩。写真では，石英脈が突出して頭部を区画するような自然礫が利用されたと見て取れる。SK174の土器から，「加曽利Ｅ１式」に伴う。

軍民坂遺跡（第36図15）　第２地点において試掘トレンチから完形で出土し，「石棒」として報告された（色川他2009）。長さ107.0㎜，幅61.0㎜，厚さ21.0㎜，重さ153ｇで石材は安山岩。彫刻による沈線で頭部が区画され，「表裏両面に研磨痕」と記載されている。試掘トレンチからは，第１号住居跡が検出されており，覆土中の「加曽利Ｅ３式」に伴うと考えられる。

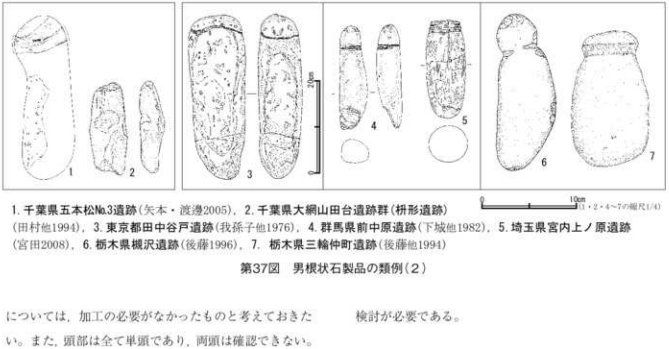
以上の15点は，法量と形態から，次の３つに分類される。

Ⅰ類　長さが20㎝前後か，それを超えるもので，細長い棒状の礫の一端を頭部とする。完形の６～９が相当し，破片の１～５・10・12・13も，この類と推定される。胴部から段差の括れで頭部を作出するものと，彫刻による沈線で頭部を区画するものとがある。括れは全周するとは限らず，扁平な礫素材（７・９）では側縁のみ，三角柱の礫素材（５）では３つの角のみが加工されている。素材礫の形状が残されたものがほとんどで，胴部の加工は，扁平な礫では側縁のみ，角柱の礫では角が部分的に研磨されたものが多い。

Ⅱ類　長さが10㎝余で，楕円形の礫の一端を頭部とする。14・15が相当する。15は，胴部から段差の括れで頭部が作出されているが，14は，素材礫自体に頭部と見立てられる隆起が備わる。

Ⅲ類　長さが10㎝未満で，細長い棒状の礫の一端を頭部とする。11が相当し，扁平な礫の破片が素材で，彫刻による抉りに近い沈線で頭部を区画している。法量から「ミニチュア」と表現されることもある。

３つの類に共通するのは，素材礫の形状を改変するように全体を成形することはないということ。むしろ，「男根」を想起させるような素材が選択され，一方の端部付近に頭部を強調するための僅かな加工が施されるにすぎない。したがって，頭部に見立てられる特徴を備えた礫



1. 千葉県五本松№3遺跡(矢本・渡邊2005)，2. 千葉県大網山田台遺跡群(枡形遺跡)(田村他1994)，3. 東京都田中谷戸遺跡(我孫子他1976)，4. 群馬県前中原遺跡(下城他1982)，5. 埼玉県宮内上ノ原遺跡(宮田2008)，6. 栃木県槻沢遺跡(後藤1996)，7. 栃木県三輪仲町遺跡(後藤他1994)

第37図　男根状石製品の類例(2)

については，加工の必要がなかったものと考えておきたい。また，頭部は全て単頭であり，両頭は確認できない。素材の礫は，加工されなかった自然面の状態からほとんどが河川礫と判断される。粘板岩や千枚岩など日立変成岩を利用したものがあり，遺跡の直近とは限らないものの，近在の石材で製作されたものが多い。さらに，火熱を受けた痕跡を確認できたのは，1点のみであった。これらの諸点において，「石棒」とは特徴を異にすることから，「男根状石製品」として区別している。

茨城県北部域を中心として検索できたのは，全て縄文時代中期の事例であった。関東地方に地域を拡大すると，中期の類例とともに，これを遡る事例が認められる（第37図）。中期では，群馬県大平台遺跡（小野1999）に「加曽利E１式」に伴う「男根状土製品」が出土しており，土製品が製作されることも「石棒」とは異なる特徴である。Ⅰ・Ⅱ類の系統については，縄文時代前期から辿れそうであり，それ以前では，「男根」を想起させるような素材礫の形状等に注意して，記載された遺跡がいくつかあるに過ぎない。加工の痕跡のない礫が報告の対象から除外されているのかもしれない。しかし，堀米Ａ遺跡のように中期であっても礫の形状をそのまま利用する事例があるように，「男根」を想起させる自然礫が「男根状石製品」の原初の姿ではなかったかと想像するのである。後期以降の「男根状石製品」については，配石遺構への前代遺物の集積を考慮した時期の決定や，細形石棒・小型石棒（石剣・石刀）の頭部破片の転用など，さらに検討が必要である。

おわりに

君ヶ台遺跡第７次調査では，約 64 ㎡という狭い調査面積から，多量の遺物が出土した。土器については，点数で３％，重量で 22％を掲載した。剥片を素材とした石器については，剥片・石核等は掲載しておらず，未成品の一部と成品のみを対象としている。それは，剥片・石核等を含めた全体に対して，点数で８％，重量で７％に過ぎない。雑駁な数値ながら，石材ではメノウが卓越し，石鏃の石材組成によく一致することを指摘した。

ひたちなか市域の縄文時代遺跡における石鏃の石材は，草創期の東石川新堀遺跡（佳谷他1987）でチャートが卓越し，早期の半分山遺跡（稲田他2004）でトロトロ石，武田西境遺跡（鈴木他2001）でチャートが多い。前期の遙原貝塚では，「チャートを主体とし，メノウなどが若干」（川崎・鴨志田 1980）という報告，」７号住居跡について「石材はメノウ，オパール，チャートなどが利用されています。貝層中からはメノウの剥片，砕片も多数が検出されました」（鈴木 2014）という報告がある。後期の宮前貝塚（藤本 1977）ではメノウとチャートが相半ばし，晩期の大田房貝塚（藤本 1977）でも「瑪瑙製，チャート製のものが多く」と報告されている。前期を画期として，石鏃の石材が変化し，メノウが増加する。君ヶ台遺跡の第７次調査区では，さらにメノウが卓越する状況が捉えられた。メノウにも色調など特徴を異にするいくつ

かのまとまりが認められ，一概に産地を特定することはできないが，乳白色のものが主体を占め，これは，久慈川流域の諸沢産のメノウによく似ている。前期以降には，久慈川流域からの石材の供給が成立していたことが想定されるのであり，その実態の解明も課題として記しておきたい。

註１：岩折遺跡の石材は，田切美智雄氏に同定していただいた。

註２：八反遺跡の石材も，田切美智雄氏に同定していただいた。報告（片平1997）には，１が「凝灰岩」，２が「緑色凝灰岩」と記載されている。なお，本稿には掲載していないが，鹿嶋市殿治台遺跡（青木他1992）の土抗SB24からも「加曽利E３式」に伴う「男根状石製品」が出土しており，その石材は，三波川変成岩の緑色片岩ではないかと観察している。

参考文献

青木幸一他　2012　『鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告Ⅸ――較国道51号バイパス建設に伴う発掘調査―』鹿島町の文化財第76集　鹿島町文化スポーツ振興事業団

浅間　陽他　2013　『堀米Ａ遺跡（第３・４次調査）―東海村立照沼小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』東海村教育委員会

我孫子昭二他　1976　『町田市・田中谷戸遺跡』町田市田中谷戸遺跡調査会

伊東重敏・川崎純徳　1966　『津田・天神山遺跡調査報告』勝田市教育委員会

稲田健一編　2004　『半分山遺跡』公社報告第30集　ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

色川順子他　2009　『平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第22集　水戸市教育委員会

海老澤稔他　2017　『吉十北遺跡　勉十郎堀跡　―東関東自動車道（鉾田～茨城空港北横）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書―』茨城県教育財団文化財調査報告第419集　茨城県教育財団

小川和博　2002　『上の内遺跡発掘調査報告書』日立市文化財調査報告第61集　日立市教育委員会

小川貴行　2009　『石川西遺跡　―茨城空港テクノパーク整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―』茨城県教育財団文化財調査報告第321集　茨城県教育財団

小野和之　1999　『大平台遺跡』『新編高崎市史　資料編１　原始古代Ⅰ』高崎市　48-68頁

片平雅俊　1997　『十王町八反遺跡発掘調査報告書』十王町文化財調査報告書第５集　十王町教育委員会

鴨志田篤二　1979　『館出遺跡』『勝田市史　別編Ⅱ　考古資料編』勝田市　66-67頁

鴨志田篤二他　1982　『三反田梶塚貝塚発掘調査報告』勝田市教育委員会

鴨志田篤二　1985　『勝田市外野遺跡群発掘調査報告書』勝田市教育委員会

鴨志田篤二他　2000　『平成11年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会　（大房地遺跡第９次）

鴨志田篤二　2001　『平成12年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会　（大房地遺跡第10次）

鴨志田篤二　2002　『平成13年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会　（大房地遺跡第11次）

鴨志田篤二他　2004　『平成15年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会　（大房地遺跡第13次）

鴨志田篤二・窪田忠一他　2000　『三反田梶塚貝塚　―1999年度　道路拡幅工事に伴う発掘調査概要―』ひたちなか市教育委員会

川崎純徳　1979　『津田天神山遺跡』『勝田市史　別編Ⅱ　考古資料編』勝田市　106-110頁

川崎純徳・鴨志田篤二　1980　『君ヶ台遺跡調査報告書』勝田市教育委員会

川崎純徳・鴨志田篤二　1980　『滝原貝塚調査報告書』勝田市教育委員会

後藤信祐他　1994　『三輪仲町遺跡　――較国道293号の道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査―』栃木県埋蔵文化財調査報告第143集　栃木県教育委員会

後藤信祐　1996　『槻沢遺跡Ⅲ　―県営圃場整備事業「井口・槻沢地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査―』栃木県埋蔵文化財調査報告第171集　栃木県教育委員会

下城　正他　1982　『十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡　―上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第１集―』群馬県埋蔵文化財調査事業団

白石真理他　2007　『向野遺跡群』公社報告第36集　ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

鈴木素行編　2004　『武田西塙遺跡　旧石器・縄文・弥生時代編』公社報告第21集　ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

鈴木素行　2007　『向野Ｅ遺跡における縄文時代中期後葉の集落跡について』『向野遺跡群』公社報告第36集　ひたちなか市文化・スポーツ振興公社　235-254頁

鈴木素行　2014　『柴田遺跡における縄文時代中期「加曽利Ｅ式」の集落跡について』『平成25年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会　47-56頁

鈴木素行　2014　『画像で報告する逢原貝塚』７号住居跡.『ひたちなか埋文だより』第41号　6-8頁

鈴木素行　2015　『柴田遺跡における縄文時代中期「加曽利Ｅ式」の集落跡について（続）』『平成26年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会　47-56頁

鈴木素行・中村哲也・小松崎恵子・色川順子　2005　『茨城県における縄文時代中期後葉の屋内炉』『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会　181-194頁

住谷光男他　1983　『昭和57年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会　（柴田遺跡第１次）

住谷光男他　1987　『昭和61年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会　（大房地遺跡第３次，柴田遺跡第２次，西中島遺跡第２次，東石川新堀遺跡第１次）

住谷光男他　1989　『昭和63年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会　（大房地遺跡第７次）

住谷光男他　1990　『指渋遺跡群発掘調査報告書』勝田市教育委員会

田村　隆他　1994　『大嶋山田台遺跡群Ⅰ』財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書第16集　山武郡市文化財センター

千種重樹　1999　『坪井上遺跡　―大宮ショッピングセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』坪井上遺跡調査会

君ヶ台遺跡

吹野宮美夫他　2002　『宮後遺跡１　―やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―』茨城県教育財団文化財調査報告第188集　茨城県教育財団
吹野宮美夫他　2005　『宮後遺跡２　―やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ―』茨城県教育財団文化財調査報告第240集　茨城県教育財団
福山俊彰　1992　『岩折遺跡発掘調査報告書』日立市文化財報告第29集　日立市教育委員会
藤本弥城　1977　『那珂川下流の石器時代研究Ⅰ』（私家版）
藤本弥城　1980　『那珂川下流の石器時代研究Ⅱ』（私家版）
宮田忠洋　2008　『宮内上ノ原遺跡Ⅲ　―E地点の調査―　―社会福祉法人武蔵野福祉会特別養護老人ホーム建設等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』本庄市埋蔵文化財調査報告書第10集　本庄市教育委員会
矢本節朗・渡邊高弘，2005　『新鎌ヶ谷地区埋蔵文化財調査報告書　―鎌ヶ谷市五本松No.３遺跡２―』千葉県文化財センター調査報告第525集　千葉県文化財センター
湯原勝美他　1998　『上の内遺跡発掘調査報告書』日立市文化財調査報告第46集　日立市教育委員会

松原遺跡(第４次)

Ⅰ　遺跡の概要

1　遺跡の位置と周辺遺跡

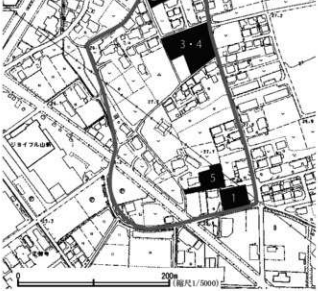
松原遺跡は，弥生時代後期から奈良・平安時代にかけての集落跡として周知されている遺跡である。中丸川の左岸標高26ｍの台地に位置しており，周辺には田彦古墳群，田彦西原遺跡，雷土Ａ遺跡，雷土Ｂ遺跡など遺跡が集中して位置しているが，水田の埋立てによる宅地化など，開発によりその多くは既に湮滅に近い状態にある。1998年度の試掘調査では遺構は確認出来ず，縄文時代から古墳時代の土器片が数点出土したのみであった。平成2001年度の試掘調査では，確認面であるローム面までのトレンチの深さが約20㎝程度で表土層が薄いため耕作による撹乱が進んでおり，遺構は検出されておらず，出土遺物も土器砕片が僅かに出土した程度であった。

2　調査に至る経緯

ひたちなか市田彦764・765に所在する土地について，2008年９月24日付けで「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書がひたちなか市教育委員会に対して提出された。現地踏査の結果，土師器片の散布が確認されたため，試掘調査を実施することとなり，調査を（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社に依頼した。

試掘調査は，バックホウを投入して12月３日～13日にかけてに実施された。第５図に示すとおり，24本のトレンチ設定して調査を行なったところ，調査区の北側，地表面から約70㎝において，黒色の落ち込みが確認されたため精査し，遺構であることが確認された。検出された遺構は，住居跡５基，溝２条，不明遺構１基，土坑１基，ピット１基などであった。住居跡は遺物量が少なく竈も検出されていないことから時期は不明であった。

第１図　遺跡の位置１



次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構
1	1998	市教委	試掘	なし
2	2001	市教委	試掘	なし
3	2008	公社	試掘	住居５（古墳前期），ピット１，溝２，土坑１，不明遺構１
4	2008	調査会	本調査	住居５，溝２
5	2015	公社	試掘	住居１（古墳），井戸１

文献

１次：『平成10年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』

２次：『平成13年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』

３次：『平成20年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』

４次：本報告

５次：『平成27年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』

第２図　遺跡の位置２・調査歴

第３図　遺跡の位置３（１：松原遺跡/１～49の遺跡番号は第１表に対応する/[茨城県2001]を一部修正・加筆）

試掘調査の結果を受けて，ひたちなか市遺跡調査会で平成21年１月26日から３月３日まで発掘調査を実施した。

参考文献

茨城県教育委員会　2001 「茨城県遺跡地図」

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					
		P	J	Y	K	N	T
1	**松原遺跡**			○	○	○	
2	田彦西原遺跡			○			
3	片岡遺跡				○	○	
4	中曽根遺跡		○		○	○	
5	舎屋新田古墳群				○		
6	田彦古墳群				○		
7	雷土Ｂ遺跡		○				
8	外野開拓古墳群				○		
9	雷土Ａ遺跡		○				
10	雷遺跡				○	○	
11	堂端遺跡				○	○	
12	新地遺跡				○		
13	下高場遺跡			○	○		
14	後原遺跡		○				
15	屋敷内遺跡				○	○	
16	東石川新堀遺跡		○	○			
17	外野遺跡	○	○		○	○	
18	大島遺跡		○				
19	瑞坪遺跡		○				
20	大島古墳群				○		
21	東石川遺跡		○				
22	笹野遺跡				○	○	
23	向山遺跡		○		○	○	
24	長堀古墳群				○		
25	長堀遺跡	○	○	○	○	○	
26	薬師台遺跡			○			
27	東石川南向遺跡		○		○	○	
28	大成町遺跡		○				
29	經塚古墳群				○		
30	大平Ｃ遺跡		○	○	○	○	
31	大平Ａ遺跡		○	○	○	○	
32	大平古墳群				○		
33	大平Ｂ遺跡		○		○	○	
34	金上遺跡		○				
35	勝倉古墳群				○		
36	武田館跡					○	
37	石高遺跡	○	○	○	○	○	
38	原前遺跡				○	○	
39	西瑞遺跡	○	○	○	○	○	
40	向坪遺跡						○
41	堀口館跡		○	○	○	○	
42	堀口遺跡			○	○	○	
43	市毛古墳群				○		
44	市毛下坪遺跡			○	○	○	
45	市毛経塚						○
46	市毛本郷坪遺跡				○	○	
47	市毛遺跡		○		○	○	
48	市毛館跡						○
49	筑波台遺跡			○	○	○	

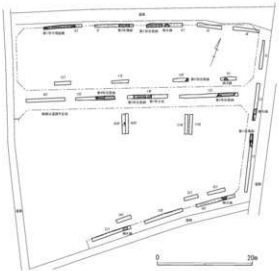
<第１表凡例>「時代」Ｐ：旧石器時代　Ｊ：縄文時代　Ｙ：弥生時代　Ｋ：古墳時代　Ｎ：奈良・平安時代　Ｔ：中世

第４図　遺跡の位置４（1945年撮影）

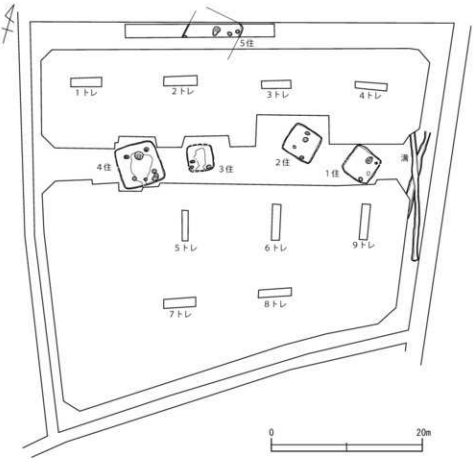
Ⅱ　遺構と遺物

1　確認した遺構

検出した遺構は，古墳時代の住居跡５基，時期不明の溝２条である。住居跡は遺物量が少ない。



第５図　試掘調査トレンチ配置図



第６図　遺構配置図

2　縄文・弥生時代の遺物

調査区の表土や後世の遺構の覆土中から，縄文時代と弥生時代の遺物が少量ながら出土した。縄文時代の土器は全て中期と判断され，口縁部形状や破断面に残された沈線文の一部から「加曽利Ｅ式」と考えられる。弥生時代の土器には，中期「足洗式」と後期「十王台式」が含まれている。

遺物説明

第７図

1　出土位置・注記：４住　時代時期：縄文時代中期（加曽利Ｅ式）文様：単節斜縄文（LR）　備考：胎土に金雲母を含む

2　出土位置・注記：２住　時代時期：縄文時代中期（加曽利Ｅ式）　文様：沈線文，単節斜縄文（LR）

3　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代中期（加曽利Ｅ式）　文様：沈線文，単節斜縄文（RL）

4　出土位置・注記：表土　時代時期：縄文時代中期（加曽利Ｅ式）　文様：隆線文，単節斜縄文（LR）

5　出土位置・注記：４住　時代時期：縄文時代中期（加曽利Ｅ式）　文様：単節斜縄文（LR）備考：胎土に金（黒）雲母を多量に含む

6　出土位置・注記：４住　時代時期：縄文時代中期　文様：単節斜縄文（RL）

7　出土位置・注記：３住　時代時期：縄文時代中期　文様：単節斜縄文（RL）

8　出土位置・注記：５住Pit３　時代時期：縄文時代中期　文様：単節斜縄文（LR）

9　出土位置・注記：４住　時代時期：縄文時代中期　文様：無節斜縄文（L）

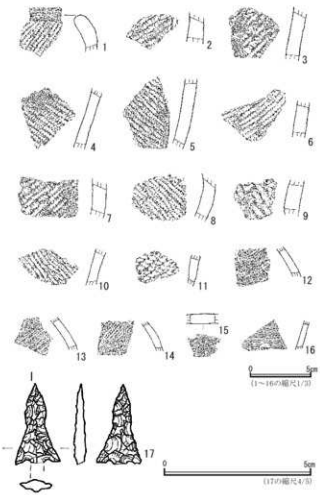
10　出土位置・注記：２トレ　時代時期：縄文時代中期　文様：無節斜縄文（L）

11　出土位置・注記：４住　時代時期：縄文時代中期　文様：複節斜縄文（RLR）

12　出土位置・注記：表採　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　文様：平行沈線文（半截竹管）

13　出土位置・注記：表土　時代時期：弥生時代中期　文様：付加条縄文（LR+R）

14　出土位置・注記：溝　時代時期：弥生時代中期　文様：単節斜縄文（LR）か



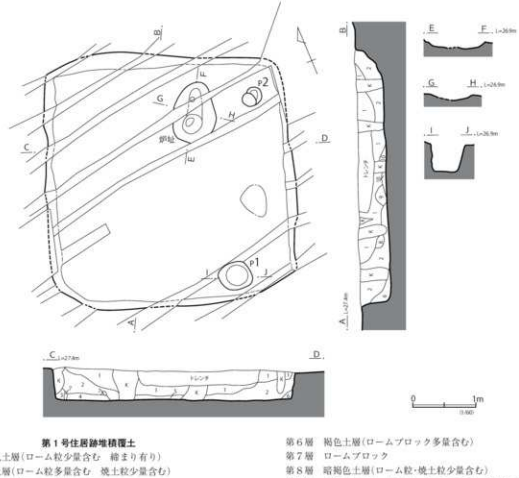
第７図　縄文・弥生時代出土遺物

15　出土位置・注記：表採　時代時期：弥生時代中期　文様：底面布目痕

16　出土位置・注記：１号溝　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　文様：櫛描文（櫛歯７本）備考：胎土に骨針を含む

17　出土位置・注記：３住　器種：石鏃　石材：鉄石英　法量：長さ26㎜，幅15㎜，厚さ４㎜　重量：1.0ｇ　備考：茎部を欠損する

3　古墳時代の遺構と遺物



第１号住居跡堆積覆土

第１層　暗褐色土層(ローム粒少量含む　締まり有り)
第２層　褐色土層(ローム粒多量含む　焼土粒少量含む)
第３層　暗褐色土層(ローム粒少量含む)
第４層　黒褐色土層(ローム粒・焼土粒少量含む)
第５層　褐色土層(ローム粒多量含む　ロームブロック少量含む　締まり有り)
第６層　褐色土層(ロームブロック多量含む)
第７層　ロームブロック
第８層　暗褐色土層(ローム粒・焼土粒少量含む)
第９層　褐色土層(ロームブロック・焼土ブロック少量含む　粘性有り)
第10層　褐色土層(ロームブロック多量含む　焼土粒少量含む)

第８図　第１号住居跡

第１号住居跡

遺　構　ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けており，床面まで掘り込まれている。平面形は，方形を呈する。竪穴部の規模は3.94×3.94m。壁高は東壁44cm，西壁49cm，南壁と北壁42cm。主軸方向はN－16°－Eを指す。壁周溝は確認できない。床面は，柔らかい。

竪穴部覆土は，壁側に褐色土，中央部に黒色土が凹レンズ状に堆積する。

炉址は北壁側に位置している。床面を最大で12cm掘り込んでいる。底面は被熱しておらず，使用された痕跡がみられない。

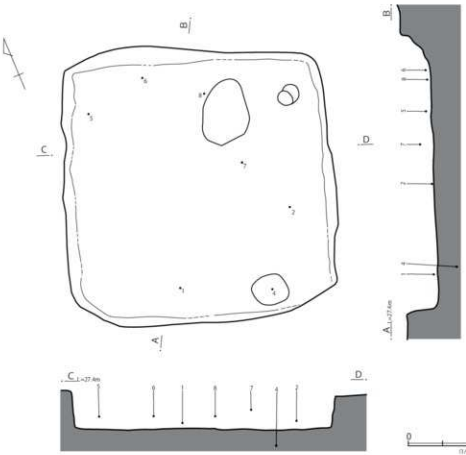
ピットは２基を検出した。主柱穴は確認できない。床面からの深さは，ピット１が40cm，ピット２が19cmである。

遺物の出土状況　出土遺物は少なく，図化できたのは８点である。完形品は第10図７と８の２点である。平面分布では住居跡壁よりから出土している。４の甕形土器はピット１の底面から逆位で出土した。垂直分布では，１・２・５・６・８が床面直上，７が覆土下層に位置する。７の壺形土器は逆位で，８の器台形土器は倒位の状態で出土した。

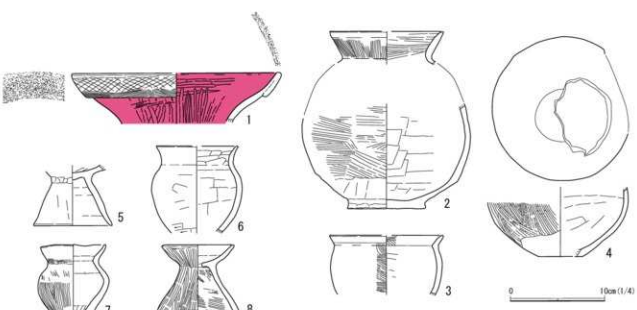
遺　物　１の壺形土器は複合口縁で口縁部外面と口唇部に網目状撚糸文がみられる。外面頸部と内面は赤彩される。４の甕形土器は底部が意図的に穿孔されている。

第２号住居跡

遺　構　ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けており，床面まで掘り込まれている。平面形は，方形を呈する。



第９図　第１号住居跡遺物出土状況

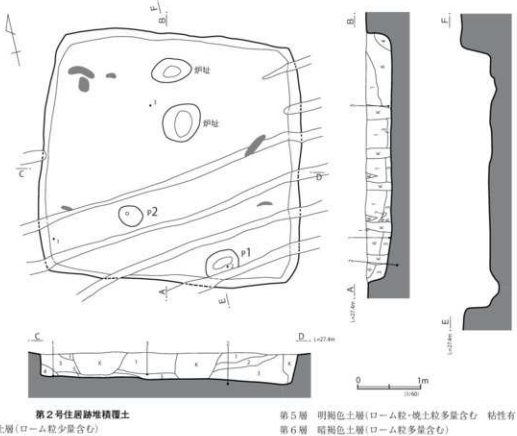


第10図　第１号住居跡出土遺物（網：赤彩）

竪穴部の規模は3.90×4.07m。壁高は東壁49cm，西壁40cm，南壁41cm，北壁47cm。主軸方向はN－10°－Eを指す。壁周溝は確認できない。床面は，柔らかい。

竪穴部覆土は，壁側に褐色土，中央部に黒色土が凹レンズ状に堆積する。

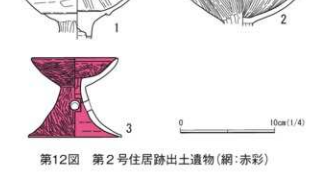
炉址と思われるものは北壁側に２基位置している。２基とも床面を最大で５cm掘り込んでいる。底面は被熱しておらず，使用された痕跡があまりない。



第２号住居跡堆積覆土

第１層　黒褐色土層(ローム粒少量含む)
第２層　褐色土層(ローム粒多量含む)
第３層　褐色土層(ローム粒・焼土粒少量含む)
第４層　褐色土層(ロームブロック少量含む)
第５層　明褐色土層(ローム粒・焼土粒多量含む　粘性有り)
第６層　暗褐色土層(ローム粒多量含む)
第７層　ロームブロック

第11図　第２号住居跡・遺物出土状況(網:炭化材)



第12図　第２号住居跡出土遺物(網:赤彩)

ピットは２基を検出した。主柱穴は確認できない。床面からの深さは，ピット１が14cm，ピット２が15cmである。

炭化材を数点確認できた。

遺物の出土状況　出土遺物は少なく，図化できたのは３点である。完形品はない。平面分布では，第12図１が住居跡南西隅，２がピット１内，３が炉址１付近から出土した。接合関係はない。垂直分布では，１が床面直上，２がピット１覆土中層，３が覆土下層に位置する。１と２の高杯形土器は杯部のみが残存し，逆位の状態で出土した。３の器台は側位の状態で出土した。

遺　物　１と２は高杯形土器の杯部で，３は器台形土器である。２の口縁端部内側には平坦面がみられる。３の内外面は赤彩されている。

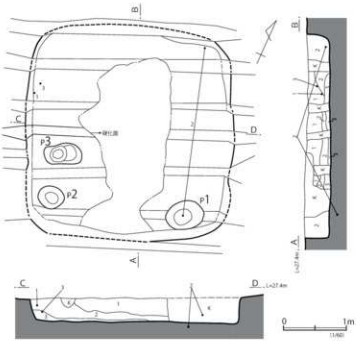
第３号住居跡

遺　構　ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けており，床面まで掘り込まれている。平面形は，方形を呈する。竪穴部の規模は3.40×3.30m。壁高は東壁38cm，西壁36cm，南壁37cm，北壁33cm。主軸方向はＮ－12°－Ｗを指す。壁周溝は確認できない。床面は，竪穴部中央に硬化面がみられる。

竪穴部覆土は，壁側に褐色土，中央部に黒色土が凹レンズ状に堆積する。

炉址は確認できない。

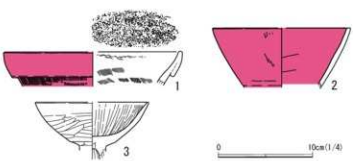
ピットは３基を検出した。主柱穴は確認できない。床



第３号住居跡堆積覆土

第１層　黒褐色土層(ローム粒少量含む)
第２層　褐色土層(ローム粒多量含む　ロームブロック・焼土粒少量含む)
第３層　褐色土層(ローム土・黒色土多量含む　締まり有り)

第13図　第３号住居跡・遺物出土状況



第14図　第３号住居跡出土遺物(網：赤彩)

面からの深さは，ピット１が19cm，ピット２が22cm，ピット３が32cmである。

遺物の出土状況　出土遺物は少なく，図化できたのは３点である。完形品はない。平面分布では第14図１・３が西壁付近，２が北壁付近とピット１内の破片が接合した。垂直分布では，覆土下層に位置する。

遺　物　１は壺形土器の口縁部，２は坩形土器の口縁部，３は高杯形土器の杯部である。１は複合口縁で，外面に赤彩が，口唇部内面に縄文がみられる。２は内外面とも赤彩されている。３の杯部と脚部の接合はソケット状を呈する。

第４号住居跡

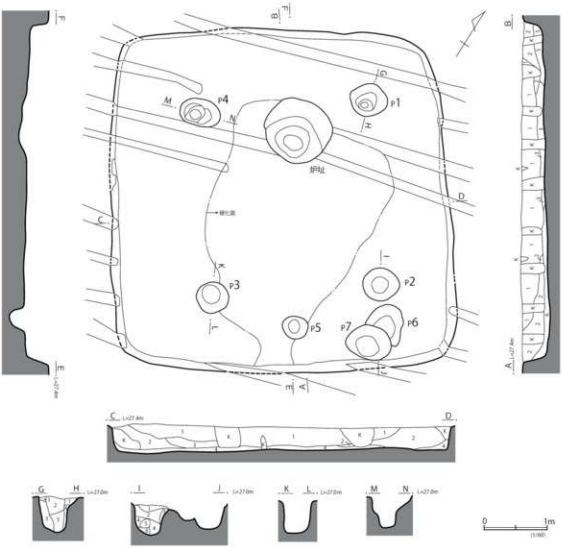
遺　構　ゴボウ耕作による溝状の撹乱を受けており，床面まで掘り込まれている。平面形は，方形を呈する。竪穴部の規模は5.40×5.28m。壁高は東壁と西壁が38cm，南壁40cm，北壁26cm。主軸方向はＮ－35°－Ｗを指す。壁周溝は確認できない。床面は，南壁から炉址にかけての竪穴部中央に硬化面がみられる。

竪穴部覆土は，壁側に暗褐色土，中央部に黒色土が凹レンズ状に堆積する。

炉址は主柱穴より内側で北壁側に位置している。底面は被熱でローム土が硬化している。

ピットは７基を検出した。ピット１～４は主柱穴，ピット５は出入口施設に伴うものと思われる。床面からの深さは，ピット１が55cm，ピット２が46cm，ピット３が50cm，ピット４が48cm，ピット５が25cm，ピット６が20cm，ピット７が34cmである。

遺物の出土状況　出土遺物は他の住居跡よりは多いがすべて破片化したものである。完形品はない。平面分布では住居跡全体から出土している。第17図７は広範囲に接合関係を持つ。垂直分布では，ほとんどの遺物が床



第４号住居跡堆積覆土

第１層　黒褐色土層(ローム粒少量含む)
第２層　暗褐色土層(ローム粒多量含む　締まり有り)
第３層　暗褐色土層(ローム粒・焼土粒少量含む　締まり有り)
第４層　明褐色土層(ローム粒多量含む　ロームブロック・焼土粒少量含む)
第５層　褐色土層(ローム粒多量含む)
第６層　褐色土層(ローム土・暗褐色土ブロック多量含む　締まり有り)

第４号住居跡ピット１堆積覆土

第１層　明褐色土層(ローム粒多量含む　締まり有り)
第２層　褐色土層(ローム粒多量含む　焼土ブロック少量含む　締まりなし)
第３層　明褐色土層(暗褐色土ブロック多量含む　ロームブロック少量含む)
第４層　明褐色土層(ローム土・暗褐色土ブロック多量含む　焼土粒少量含む)
第５層　褐色土層(ロームブロック・炭化物粒・焼土粒少量含む)

第４号住居跡ピット２堆積覆土

第１層　明褐色土層(ローム粒少量含む)
第２層　明褐色土層(黒色土粒多量含む　締まり有り)
第３層　明褐色土層(ローム土・炭化物粒少量含む)
第４層　褐色土層(ローム粒少量含む)
第５層　褐色土層(炭化物粒・焼土ブロック少量含む　締まりなし)
第６層　明褐色土層(炭化物粒少量含む)

第15図　第４号住居跡

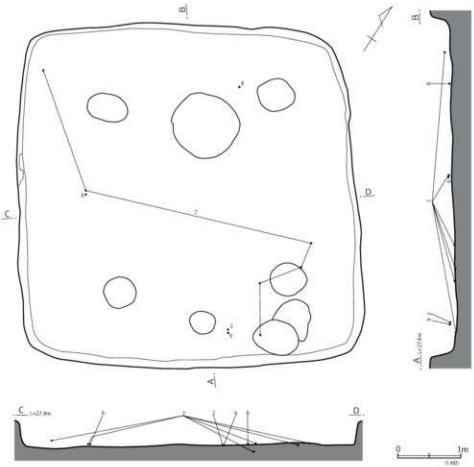
面直上に位置する。

遺　物　１はＳ字状口縁甕形土器だが，底部は平底である。３・４・５は，外面に縄文がみられる土器で，「南関東系」の土器と思われる。

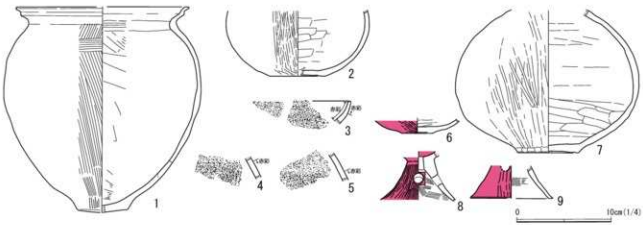
第５号住居跡

遺　構　ゴボウ耕作による溝状の撹乱を受けているが，床面までは掘り込まれていない。トレンチ調査区内での確認のため平面形は不明であるが，北東隅が一部確認できることから方形を呈すると思われる。竪穴部の規模は一辺6.5mと推定できる。壁高は東壁と西壁で36㎝。主軸方向はＮ－10°－Ｅを指す。壁周溝は確認できない。

竪穴部覆土は，壁側に褐色土，中央部に黒色土が凹レンズ状に堆積する。



第16図　第４号住居跡遺物出土状況



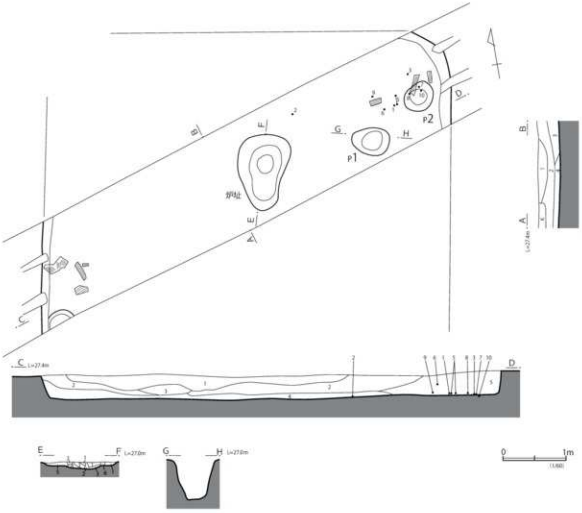
第17図　第４号住居跡出土遺物（網：赤彩）

炉址は北壁側に位置している。床面を最大で12cm掘り込んでいる。底面は被熱している。

ピットは２基を検出した。ピット１は主柱穴と思われる。床面からの深さは，ピット１が62cm，ピット２が18cmである。

遺物の出土状況　遺物は破片化したものが多いが，完形品も出土している。完形品またはほぼ完形品で出土したものは第19図６～９の土器である。平面分布ではピット１・２周辺から出土した。垂直分布では，床面直上もしくは覆土下層に位置するものが多い。６のみ覆土中層から出土している。６・７・８は倒位で，９は正位の状態で出土した。

遺　物　１の壺形土器は複合口縁で口縁部外面に網目状撚糸文がみられる。第１号住居跡出土の壺形土器と違い口唇部に網目状撚糸文がない。外面頸部と内面は赤彩される。２の甕形土器は口縁部に輪積痕を故意に残し



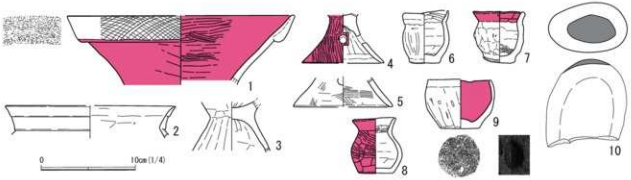
第５号住居跡堆積覆土

第１層　黒褐色土層
第２層　褐色土層(ローム粒少量含む　締まりやや有り)
第３層　黒褐色土層(ローム粒多量含む)
第４層　褐色土層(ロームブロック多量含む　焼土粒少量含む)
第５層　褐色土層(ローム粒・炭化物粒多量含む　焼土粒少量含む)

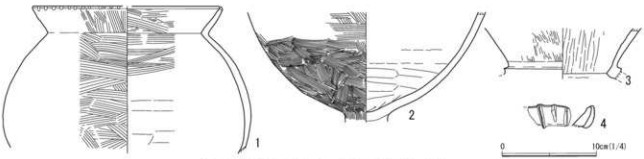
第５号住居跡炉址堆積覆土

第１層　褐色土層(焼土ブロック・焼土粒・炭化物粒多量含む)
第２層　褐色土層(ローム粒・炭化物粒多量含む)
第３層　明褐色土層(焼土粒多量含む　炭化物粒少量含む)
第４層　明褐色土層(炭化物粒少量含む)
第５層　褐色土層(焼土粒・炭化物粒多量含む)
第６層　焼土層
第７層　ローム土層

第18図　第５号住居跡・遺物出土状況



第19図　第５号住居跡出土遺物(網：土器・赤彩，石器・磨痕)



第20図　遺構に伴わない古墳時代前期の遺物

第21図　調査区出土古墳時代遺物

ている。6～9は手づくね土器である。9の底面には稈と思われる圧痕がみられる。レプリカ法により作成したモデルの写真を掲載した。

遺構に伴わない古墳時代前期の遺物

住居跡以外から出土した古墳時代前期の遺物で図化できたものは，第20図の4点である。1～3は2号トレンチ，4は表土からの出土である。1のように口唇部に刻みのある土器や4のように棒状浮文がみられる土器は今回報告した遺構からは出土していない。

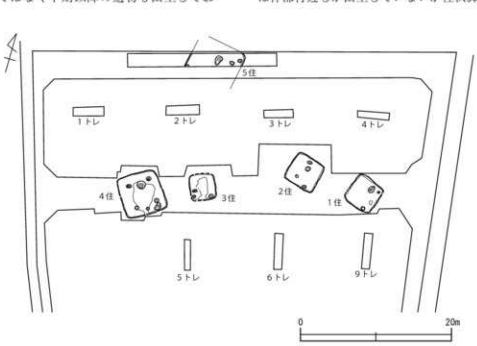
調査区出土の古墳時代遺物

古墳時代前期ではなく中期以降の遺物も出土しており，図化出来たのは第21図の1点である。

小　結

検出した古墳時代前期の住居跡は5基で，その主軸をみると，東方向に傾く第1・2・5号住居跡と西方向に傾く第3・4号住居跡とに分かれる。第1・2号住居跡は主軸方向以外にも，規模や主柱穴が確認出来ないこと，床面が硬化していないことなど類似点が多い。

出土遺物をみると，遺物量が非常に少なく，さらに日常品の甕形土器が少なく，非日常品と思われる壺形土器や器台，手づくね土器が多い点が注目される。出土遺物を器種別に並べると第24図のようになる。甕形土器は，S字状口縁を呈するが平底となるものや口縁部に輪積痕を残すもの，口唇部にヘラ状工具による刻みがあるものがみられる。壺形土器は，複合口縁で口縁部に網目状撚糸文や棒状浮文，赤彩を施す装飾壺がある。高杯形土器は杯部付近しか出土していないが柱状脚ではない。器台

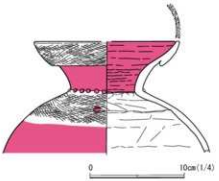


第22図　古墳時代の遺構分布

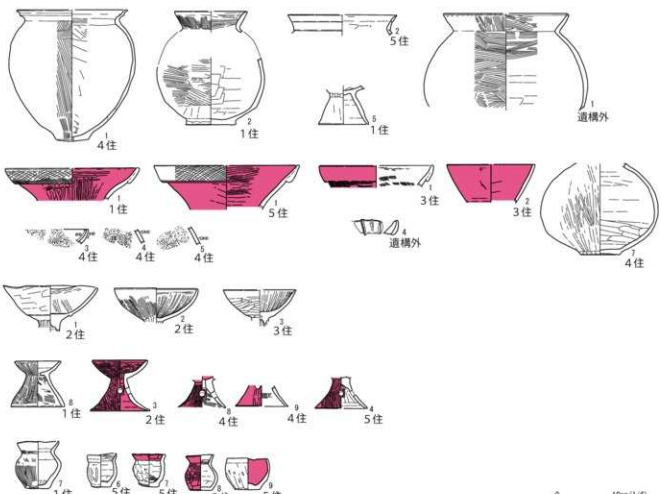
は小型で赤彩されるものが多い。手づくね土器も器台と同様に赤彩されるもが多い。

これらの器種構成をみると，甕形土器や壺形土器は所謂南関東系の土器で，市内の三反田遺跡に類似する。時期は，装飾壺や高杯形土器などから，三反田遺跡と同じ前期前半頃のものと推測される。

松原遺跡は，中丸川の中流域で，台地縁辺部に位置する古墳時代前期の遺跡の三反田遺跡や武田遺跡群と比較すると台地の奥まった場所に位置している。よって，今回の調査では，市内の古墳時代前期の集落が台地縁辺部だけでなく，小河川の奥にもあることが判明したことになり，この成果は注目される。



第23図　三反田遺跡第４号住居跡出土遺物



第24図　器種別出土土器集成

4　古墳時代遺物観察表

凡例:法量に記載した部位の計測値の単位は「cm」である。括弧内の数値は，復元された口径や底径，最大径，または残存高を示す。

第１号住居跡

1　台帳:P5　材質:土師器　器種:壺　残存:口縁部20％　法量:口径(22.0)，器高(5.3)　色調:外面赤～にぶい橙。内面暗赤褐色。　胎土:礫(白微)，砂(白多，透多)　焼成:良好　技法等:外面口縁部上・下位ハケ，中位網目状撚糸文，頸部ハケ・ヘラミガキ。複合口縁。内面ヘラミガキ。口唇部に網目状撚糸文。　使用痕:―　備考:―

2　台帳:P2　材質:土師器　器種:甕　残存:口縁部20％，胴部下位60％，底部60％　法量:口径(12.0)，器高(3.0＋11.1)，底径8.3　色調:内外面にぶい黄橙～暗褐色　胎土:小石(白微)，礫(白微)，砂(白多，透多，黒少)　焼成:良好　技法等:外面口縁部上位ヨコナデ，下位ハケ。胴部中位ハケ，下位～底部へラ削り。内面口縁部ハケ，胴部ヘラナデ。　使用痕:―　備考:外面器面が凸西している。

3　台帳:―括　材質:土師器　器種:小型甕　残存:口縁～胴部中位10％　法量:口径(12.0)，器高(6.3)　色調:内外面にぶい黄橙　胎土:砂(白多，透多)　焼成:良好　技法等:外面口縁部ヨコナデ，胴部ハケ。内面口縁部ハケ，胴部ヘラナデ。　使用痕:―　備考:―

4　台帳:P7　材質:土師器　器種:甕　残存:胴部中～下位70％　法量:器高(7.3)，底径(4.6)　色調:外面にぶい橙～暗褐色。内面浅黄橙色。　胎土:礫(白微，灰微)，砂(白多，透多)　焼成:良好　技法等:外面ヘラナデ・ヘラミガキ。内面ヘラナデ。　使用痕:―　備考:底部に焼成後穿孔あり。

5　台帳:P4　材質:土師器　器種:台杯蓋　残存:台部100％　法量:器高(6.4)，底径(8.3)　色調:外面にぶい橙色。内面胴部暗褐色，台部橙色。　胎土:砂(白少，透多)　焼成:良好　技法等:内外面ともヘラナデ。　使用痕:―　備考:―

6　台帳:P3　材質:土師器　器種:小型甕　残存:口縁部80％，胴部60％　法量:口径8.5，器高(9.2)　色調:内外面ともにぶい橙～暗褐色　胎土:砂((白多，透多)　焼成:良好　技法等:外面ヘラナデ，胴部下位のみヘラ削り。内面ヘラナデ。　使用痕:―　備考:内外面とも器面の一部が剥離している。

7　台帳:P1　材質:土師器　器種:小型甕　残存:ほぼ完形(口縁部の一部のみ欠失)　法量:口径6.8，器高7.8，底径4.0　色調:内外面とも橙色。　胎土:礫(白少)，砂(白多，透多)　焼成:良好　技法等:外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ・ハケ，底部ハケ。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ・ナデ。　使用痕:―　備考:―

8　台帳:P6　材質:土師器　器種:器台　残存:100％　法量:口径7.5，器高7.5，底径8.8　色調:内外面とも暗褐～黒褐色。　胎土:砂(白少，透多)　焼成:良好　技法等:外面ハケ。内面杯部ヘラナデ，脚部ヘラナデ・ハケ。　使用痕:―　備考:―

第２号住居跡

1　台帳:P1　材質:土師器　器種:高杯　残存:杯部80％　法量:口径15.3，器高(7.5)　色調:内外面とも浅黄～黒褐色。　胎土:礫(白微，茶微)，砂(白多，透多，黒少)　焼成:良好　技法等:外面ヘラナデ・ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。　使用痕:―　備考:―

2　台帳:P3　材質:土師器　器種:高杯　残存:90％　法量:口径13.9，器高(5.8)　色調:外面にぶい橙～黒色。内面橙色。　胎土:礫(白微，灰微)，砂(白多，透多)　焼成:良好　技法等:外面口縁部ヘラナデ，体部ハケ，接合部ヘラミガキ。　使用痕:―　備考:内面器面がやや摩滅している。

3　台帳:P2　材質:土師器　器種:器台　残存:杯部100％，脚部50％　法量:口径9.0，器高8.5，底径10.0　色調:内外面とも赤褐色。　胎土:礫(黒微)，砂(白多，透多)　焼成:良好　技法等:外面ヘラナデ・ヘラミガキ，脚部ヘラ削り・ヘラナデ。内外面とも赤彩。　使用痕:―　備考:―

第３号住居跡

1　台帳:P2　材質:土師器　器種:壺　残存:口縁部10％　法量:口径(19.0)，器高(3.5)　色調:内外面赤～橙色。内面にぶい～橙色。　胎土:礫(白微)，砂(白多，透多)　焼成:良好　技法等:外面口縁部ヨコナデ，頸部ハケ。複合口縁。内面ハケ，口唇部に縄文。外面に赤彩。　使用痕:―　備考:―

2　台帳:P3・6　材質:土師器　器種:坩　残存:口縁部10％　法量:口径(14.5)，器高(6.3)　色調:内外面赤～橙色。　胎土:砂(白多，透多，黒微)　焼成:良好　技法等:外面ハケ？。内面ヘラナデ？。内外面とも赤彩。　使用痕:―　備考:内外面とも器面が摩滅している。

3　台帳:P1　材質:土師器　器種:高杯　残存:杯部30％　法量:口径(12.0)，器高(6.0)　色調:外面橙～にぶい橙色。内面橙色　胎土:小石(白微)，礫(白少)，砂(白多，透多，黒少)　焼成:良好　技法等:外面ヘラナデ・ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。　使用痕:―　備考:口縁端部が摩滅している。

第４号住居跡

1　台帳:4住，表採　材質:土師器　器種:甕　残存:10％　法量:口径(18.0)，器高(21.6)，底径(5.3)　色調:内外面暗赤褐～暗褐色　胎土:砂(白多，透多)　焼成:良好　技法等:外面ハケ。S字状口縁。内面ハケ・ヘラナデ。　使用痕:―　備考:―

2　台帳:P12　材質:土師器　器種:壺　残存:胴部中位～底部20％　法量:器高(7.0)，底径(6.0)　色調:外面赤～橙色。内面にぶい黄橙色。　胎土:砂(白少，透多)　焼成:良好　技法等:外面ヘラミガキ。内面ヘラナデ。　使用痕:―　備考:―

3　台帳:―括　材質:土師器　器種:壺？　残存:―　法量:―　色調:外面赤～橙色。内面赤色。　胎土:砂(白多，透多，黒少)　焼成:良好　技法等:外面上位縄文，下位赤彩，上位に赤彩による円文。内面口縁端部以外に赤彩。　使用痕:―　備考:―

4　台帳:―括　材質:土師器　器種:壺　残存:―　法量:―　色調:外面赤～橙色。内面浅黄橙色。　胎土:砂(白多，透多，赤少)　焼成:良好　技法等:外面羽状の縄文と結節文，赤彩。　使用痕:―　備考:―

5　台帳:―括　材質:土師器　器種:壺　残存:―　法量:―　色調:外面赤～橙色。内面浅黄橙色。　胎土:砂(白多，透多，赤少)　焼成:良好　技法等:外面羽状の縄文と結節文，赤彩。　使用痕:―　備考:―

6　台帳:P8　材質:土師器　器種:壺　残存:底部100％　法量:器高(1.6)，底径3.3　色調:外面赤色。内面橙色。　胎土:礫(白微)，砂(白多，透多，黒少)　焼成:良好　技法等:外面ヘラミガキ，底部凹み底。内面ヘラナデ。外面に赤彩。　使用痕:―　備考:―

7　台帳:P8・9・14・16・18・19，ピット2・7，―括　材質:土師器　器種:壺　残存:胴部上位10％，中位～底部80％　法量:器高(15.0)，底径6.5　色調:外面橙～黒色。内面浅黄橙色。　胎土:砂(白多，透多，黒微)　焼成:良好　技法等:外面胴部ヘラミガキ，底部ヘラ削り。内面ヘラナデ。　使用痕:―　備考:外面器面がやや摩滅している。

8　台帳:P3　材質:土師器　器種:器台　残存:脚部30％　法量:器高(5.2)　色調:外面赤色。内面杯部赤色，脚部にぶい黄橙色。　胎土:砂(白多，透多)　焼成:良好　技法等:外面ヘラミガキ。内面杯部ヘラナデ？脚部ハケ。外面と内面杯部に赤彩。　使用痕:―　備考:―

9　台帳:P12　材質:土師器　器種:器台？　残存:脚部10％以下　法量:器高(3.5)，底径(8.7)　色調:外面赤～橙色。内面にぶい黄橙～黒色。　胎土:礫(白微)，砂(白多，透多，黒少)　焼成:良好　技法等:外面ヘラミガキ。内面ハケ・ヘラナデ。外面に赤色彩。　使用痕:―　備考:―

第5号住居跡

1　台帳:P5　材質:土師器　器種:壺　残存:口縁部30%　法量:口径(24.0), 器高(7.3)　色調:外面赤～橙色。内面赤色　胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多)　焼成:良好　技法等:外面口縁部網目状熱糸文, 頸部ヘラナデ・ヘラミガキ。複合口縁。内面ヘラナデ・ヘラミガキ。外面口縁部下端と頸部, 内面に赤彩。　使用痕:―　備考:―

2　台帳:P9　材質:土師器　器種:甕　残存:口縁部10%　法量:口径(18.0), 器高(3.4)　色調:内外面橙色。　胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多)　焼成:良好　技法等:外面ヨコナデ。内面ヘラナデ。　使用痕:―　備考:外面口縁部に輪積痕。

3　台帳:P1　材質:土師器　器種:台付甕?　残存:台部50%　法量:器高(5.0)　色調:外面橙色。内面胴部暗褐色。台部橙色。　胎土:砂(白多, 透多, 赤少)　焼成:良好　技法等:内外面ヘラナデ。　使用痕:―　備考:―

4　台帳:一括　材質:土師器　器種:器台　残存:脚部20%　法量:器高(5.2), 底径(8.6)　色調:外面赤～暗赤褐色。内面杯部橙色, 脚部橙～にぶい橙色。　胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少)　焼成:良好　技法等:外面ヘラミガキ。内面ヘラナデ, 脚部しぼり。外面に赤彩。　使用痕:―　備考:―

5　台帳:P4・5, 一括　材質:土師器　器種:器台?　残存:脚部40%　法量:器高(3.1), 底径(10.4)　色調:外面橙～にぶい橙色。内面にぶい黄橙～暗褐色。　胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多)　焼成:良好　技法等:外面ハケ後ヘラナデ。内面ハケ。孔は3つ。　使用痕:―　備考:被熱している。

6　台帳:P6　材質:土師器　器種:小型甕(手づくね土器)　残存:100%　法量:口径4.7, 器高5.6, 底径3.2　色調:外面黄橙色。内面にぶい黄橙色。胎土:礫(白微), 砂(白少, 透多, 黒微)　焼成:良好　技法等:内外面ともヘラナデ・ナデ。　使用痕:―　備考:―

7　台帳:P3　材質:土師器　器種:小型甕(手づくね土器)　残存:100%　法量:口径5.2, 器高5.0～5.3, 底径3.3　色調:内外面とも赤～黄橙～にぶい黄橙色。　胎土:砂(白多, 透多, 黒少)　焼成:良好　技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴～底部ヘラナデ・ナデ。内面ヘラナデ・ナデ。内外面の口縁部に赤彩か。　使用痕:―　備考:器形がゆがんでいる。

8　台帳:P2　材質:土師器　器種:小型甕(手づくね土器)　残存:口縁部60%, 胴部100%　法量:口径4.5, 器高5.9, 底径3.5　色調:外面赤色。内面にぶい赤褐色。　胎土:砂(白多, 透多)　焼成:良好　技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ハケ, 底部ヘラナデ削り。内面口縁部ヘラナデ・ハケ, 胴部ヘラナデ。外面口縁部～胴部に赤彩。　使用痕:―　備考:―

9　台帳:P9　材質:土師器　器種:小型鉢(手づくね土器)　残存:100%　法量:口径6.7, 器高5.2, 底径4.1　色調:外面黄橙～黒色。内面赤～黄橙色。胎土:砂(白多, 透多, 黒少), 骨針含む　焼成:良好　技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体～底部ナデ。内面ヘラナデ・ナデ。内面は赤彩か。　使用痕:―　備考:底面に糠痕あり。

10　台帳:S1　材質:砂岩　種類:磨石　法量:長9.5, 幅8.5, 厚5.0, 重量563.52g　備考:被熱している。磨痕1面。

遺構に伴わない古墳時代前期の遺物

1　台帳:2トレ　材質:土師器　器種:甕　残存:口縁～胴部中位20%　法量:口径(20.0), 器高(15.5)　色調:外面橙～黒色。内面黄橙～黒色。内面黄橙～黒色。　胎土:小石(白微), 礫(白少), 砂(白多, 透多)　焼成:良好　技法等:外面ハケ。内面口縁～胴部上位ハケ。下位ヘラナデ。口縁端部にヘラ状工具による刻み。　使用痕:―　備考:外面器面に炭化物の付着あり。

2　台帳:2トレ　材質:土師器　器種:台付甕　残存:胴部中～下位100%　法量:器高(11.5)　色調:内外面ともにぶい黄橙～暗褐～黒色。　胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多)　焼成:良好　技法等:外面ハケ。内面ヘラナデ。使用痕:―　備考:内面器面に炭化物の付着あり。

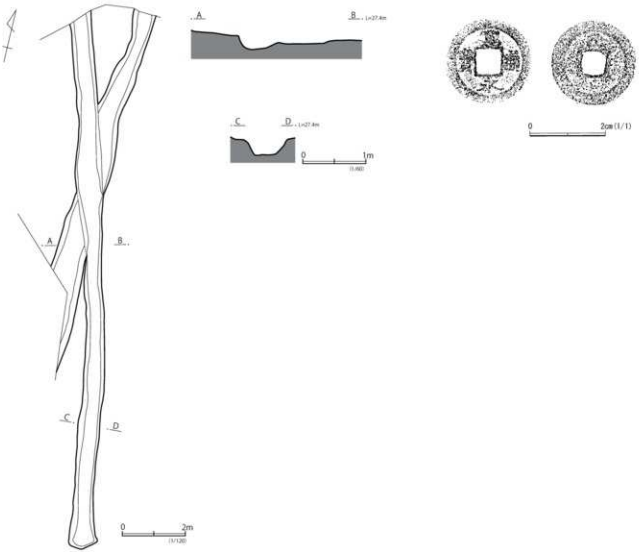
3　台帳:2トレ　材質:土師器　器種:壺　残存:口縁部20%　法量:器高(5.4)　色調:外面橙色。内面にぶい黄橙色　胎土:砂(白少, 透多, 黒少)　焼成:良好　技法等:外面ハケ後ヘラナデ, 下位ヨコナデ。内面ヘラナデ後ヘラミガキ。頸部下位に凹帯1条。　使用痕:―　備考:―

4　台帳:表土　材質:土師器　器種:壺　残存:口縁部10%以下　法量:―　色調:内外面橙色　胎土:砂(白少, 透多)　焼成:良好　技法等:外面棒状浮文　使用痕:―　備考:―

調査区出土古墳時代の遺物

1　台帳:4住一括　材質:須恵器　器種:―　残存:―　法量:―　色調:青灰色　胎土:砂(白微)　焼成:硬質　技法等:波状文　使用痕:―　備考:―

5　その他の遺構と遺物



第25図　溝状遺構・出土遺物

溝状遺構

第１号住居跡の東側に位置する。南北を軸として２本の溝が交差している。確認できた長さは，16.60mと8.80m，幅が0.6～1.0m，深さは６～27cmで北側が浅く南側が深い。遺物は「寛永通寶」が１点出土している。

第25図　台帳：一括　材質：銅　銭名：寛永通寶　法量：径2.3，穴0.6，重量2.85g　備考：新寛永。

相対古墳群（第２次）

Ⅰ　遺跡の概要

1　遺跡の位置と周辺遺跡

相対古墳群は，那珂川とその支流の中丸川との間に細長く発達した三反田台地の中丸川右岸の台地縁辺部に位置している。縄文時代の土器が出土する相対遺跡と重複する。

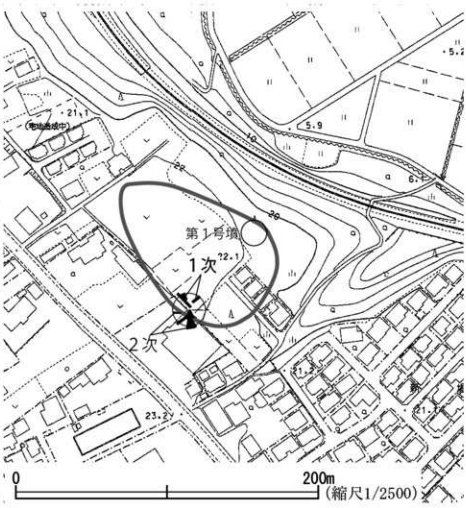
付近の遺跡としては，北西約 500 m の地点に縄文時代の遠原貝塚がある。また，古墳は北側に大平古墳群が，南東側に三反田古墳群がある。2つの古墳群ともに時期は古墳時代後期である。

相対古墳群は墳丘の残る第１号墳が確認されていた。1984 年度に遺跡の性格等を確認するための調査を実施した結果，古墳の周溝を確認し，第２号墳とした。

2　調査に至る経緯

相対古墳群第２号墳の所在する土地について，1988 年に茨城ウエルマート株式会社より店舗建設の申請があった。第１次調査から建設地内に古墳の一部が所在し，現状保存は難しいと判断したため，工事着工前に調査を実施することとなった。

発掘調査は勝田市遺跡調査会に委託されることになった。調査期間は 1988 年４月 18 日から 23 日にかけて実施した。



第１図　遺跡の位置

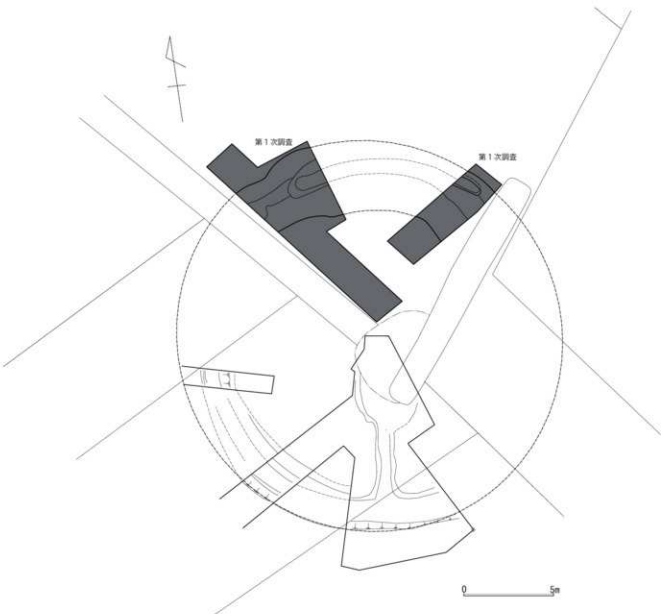
Ⅱ　遺構と遺物

1　第２号墳

周溝　第２号墳の周溝は，すでに第１次調査で確認されており，今回の調査で全体の規模等が判明した。トレンチ調査で確認できた状況では，第１次調査同様に墳丘側よりなだらかに移行して，途中から急に傾斜して底面にいたる。外側も一度ゆるやかに傾斜してから急傾斜を示す。墳丘側と比べると外側の方の傾斜が急である。周溝の幅は１段目の上端幅が2.9～3.9 m，２段目が1.5 mを計測する。深さは確認面から約90 cmとなる。断面形は逆台形を呈する。

周溝内堆積土は凹レンズ状堆積をなし，墳丘の内外から土が流入し，自然に堆積したものである。最下層にローム土を主体とした黄褐色土がみられ，その上に黄褐色土や黒褐色土が堆積する。溝上面の第７層の褐色土は固くしまっている。これは第１次調査でも同じように確認されている。

墳丘　墳丘は削平されており，確認出来ない。墳



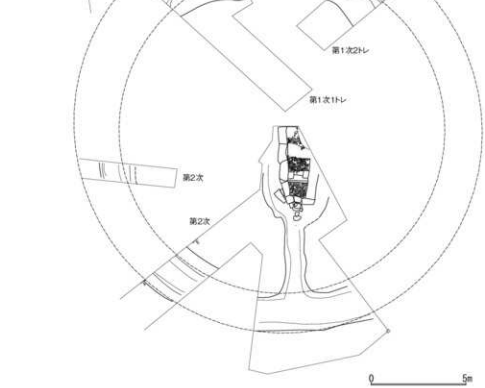
第2図　トレンチ配置図

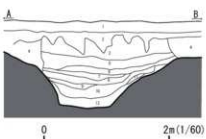
丘規模として直径は，周溝内側の下端を復元し計測すると約 9.0m で，周溝外側上端では約 10.6 m の規模となる。第 1 次調査の結果とあわせて墳丘を復元するとほぼ正円の円墳形となる。

埋葬施設　埋葬施設は墳丘中央よりやや南寄りで横穴式石室を確認した。ただし，天井石は失われていた。また，奥壁と東壁の一部は調査区外のため確認出来ない。

石室の位置は墳丘の南側にあり，石室奥壁は周溝外縁の規模を約 10 m とするとほぼ中心に置いている。

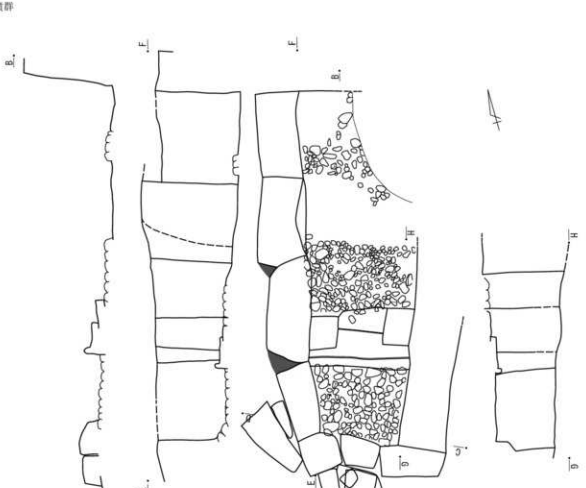
石室の構造は，地山面を掘り込んで構築する半地下式で，墓道と小さな前室を有する玄室からなる。石材は，凝灰質泥岩を板状に加工している。凝灰質泥岩は，古墳のすぐ下の崖面に露頭があるため，近くから調達していると考えられる。墓道と前室との境には，両側壁から立柱石を突出させることで玄門としている。玄門部の幅は約 40 cmで，調査時は切石の閉塞石が置かれていた。前室と後室との境には，梱石の上に角柱状の門柱を載せて門としている。門の幅は約 50 cmを測る。玄室は，1 枚の奥壁石と 3 枚の側壁石で構成されている。東壁は一部しか確認出来ないが西壁と同じ構造と思われる。西壁の側壁石は幅 80 ～ 100 cm，厚さ約 40 cmの長方形の石材を基本とし，隙間は白色粘土で埋めている。奥壁と側壁はほぼ直立している。前室と後室の床面には拳大ほどの礫を敷き詰めている。





第 1 層：表土
第 2 層：明黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒を含む）
第 3 層：黒色土層（微細黒色粒子，密）
第 4 層：黒褐色土層（攪乱層）
第 5 層：黒色土層（第 4 層より粒子が大きく，ローム粒子をわずかに含む）
第 6 層：黒褐色土層（ローム粒子を含む，軟らかく微細黒色土）
第 7 層：褐色土層（ローム粒子を多く含む，密で非常に硬い）
第 8 層：黒褐色土層（ローム粒子・泥岩片を含む）
第 9 層：黄褐色土層（ローム粒子を多く含む，軟らかい）
第10層：黒褐色土層（黒色粒子・ローム粒子ブロックを含む）
第11層：黒褐色土層（ローム・黒色土混合層）
第12層：黄色土層（ロームブロック・黒色粒子が混在）

第 3 図　遺構配置図・セクション図



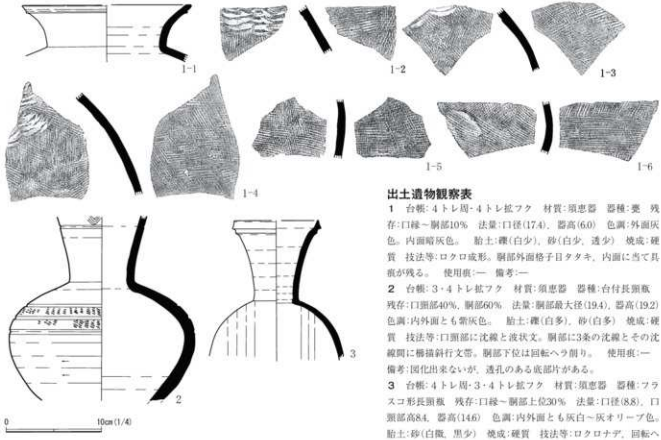
第４図　石室実測図

石室内部の規模は，最大長3.95mを測る。前室床面は奥行75㎝，幅は玄門際が85㎝，後室側が105㎝で，高さは現状で約72㎝を測る。後室床面は奥行240㎝，幅は110㎝で，高さは現状で90～100㎝を測る。主軸は北から東に９度傾く（N－９°－E）。

墓道は，地山を掘り込んでおり，ほぼ直線に周溝と接続する。周溝から玄門までの長さは約４m，幅約１mを測る。

遺物　第２号墳に伴う遺物は，周溝内とトレンチより須恵器が出土しているが，詳細な出土場所は記録がないため不明である。石室内からの遺物の出土は確認されていない。この他に，縄文・弥生時代の遺物が出土している。

図化出来た遺物は，須恵器の大甕と台付長頸瓶，フラスコ形長頸瓶の３点である（第５図）。大甕は図化した以外にも胴部の破片が多数ある。台付長頸瓶は，口頸部に沈線と波状文が，胴部には３条の沈線とその沈線の間に櫛描斜行文がみられる。図化出来なかったが透孔がある底部片があるため，台付きと判断した。フラスコ形長頸瓶は口頸部の内外面と胴部外面に自然釉がみられる。台付長頸瓶とフラスコ形長頸瓶は，その形状などから７世紀前半頃の時期と推定される。



出土遺物観察表

1　台帳：4トレ周・4トレ拡フク　材質：須恵器　器種：甕　残存：口縁～胴部10%　法量：口径(17.4)，器高(6.0)　色調：外面灰色。内面暗灰色。　胎土：礫(白少)，砂(白少，透少)　焼成：硬質　技法等：ロクロ成形。胴部外面格子目タタキ，内面に当て具痕が残る。　使用痕：―　備考：―

2　台帳：3・4トレ拡フク　材質：須恵器　器種：台付長頸瓶　残存：口頸部40%，胴部60%　法量：胴部最大径(19.4)，器高(19.2)　色調：内外面とも紫灰色。　胎土：礫(白多)，砂(白多)　焼成：硬質　技法等：口頸部に沈線と波状文。胴部に3条の沈線とその沈線間に櫛描斜行文帯。胴部下位は回転ヘラ削り。　使用痕：―　備考：図化出来ないが，透孔のある底部片がある。

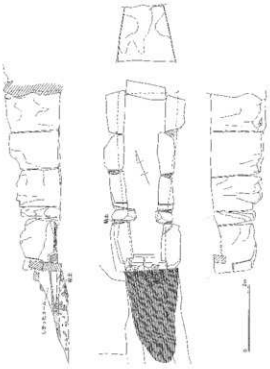
3　台帳：4トレ周・3・4トレ拡フク　材質：須恵器　器種：フラスコ形長頸瓶　残存：口縁～胴部上位30%　法量：口径(8.8)，口頸部高8.4，器高(14.6)　色調：内外面とも灰白～灰オリーブ色。　胎土：砂(白微，黒少)　焼成：硬質　技法等：ロクロナデ，回転ヘラ削り。口頸部の内外面と胴部外面に灰オリーブ色の自然釉がかかる。　使用痕：―　備考：―

第５図　出土遺物

小結　第２号墳は小円墳であるが，注目される点が２つある。１つは石室構造である。凝灰質泥岩の切石を用いた横穴式石室は，近隣の大平古墳群第１号墳や殿塚古墳がある。殿塚古墳の石室構造の詳細は不明であるが，２つの石室は第２号墳のような前室を有するタイプではない。玄門の造りに違いがあるが，もっとも類似する石室は東海村にある須和間古墳群第２（旧12）号墳である（第６図）。石室規模は須和間古墳群第２号墳の方がやや大きいが，非常に良く似た構造で，第２号墳と同じようにフラスコ形長頸瓶が出土しており，時期も７世紀前葉である。２つの古墳とも太平洋からはやや内側の小河川に面した台地上に位置しており，出土遺物からも関係性が注目される。

もう１つは，台付長頸瓶である。完形品ではないが，市内では類例がない非常に珍しい須恵器である。県内では，かすみがうら市の風返稲荷山古墳からの出土例があるが，形状に違いがある。

以上，石室構造と出土遺物から，第２号墳は市内の古墳を考える上で重要な古墳である。



第６図　東海村須和間古墳群第２号墳石室（報告書より転載）

2　その他の出土遺物

トレンチ内と表土から，縄文時代・弥生時代の土器片60点および石皿1点が出土した。内訳は，縄文時代早期田戸下層式が44点，浮島式5点を含む前期の土器片が7点，加曽利E式3点を含む中期の土器が8点，弥生時代後期十王台式が1点。石皿は，縄文時代中期の土器に伴うと考えられる。

遺物説明

第7図

1　出土位置・注記：1トレⅢ・1トレⅣ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，刺突文

2　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，刺突文

3　出土位置・注記：1トレ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，刺突文

4　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，刺突文

5　出土位置・注記：1トレⅤ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，刺突文

6　出土位置・注記：1トレⅢ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，刺突文

7　出土位置・注記：3・4トレ拡フク　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，刺突文

8　出土位置・注記：1トレⅢ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文　備考：補修孔がみられる。

9　出土位置・注記：1トレⅢ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文

10　出土位置・注記：1トレⅣ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，太沈線文　備考：格子状文

11　出土位置・注記：拡フク　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線，刺突文カ

12　出土位置・注記：1トレⅢ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文

13　出土位置・注記：1トレⅢ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，太沈線文

14　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，刺突文

15　出土位置・注記：石室フク土　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，太沈線文

16　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文

17　出土位置・注記：1トレⅢ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，太沈線文

18　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文

19　出土位置・注記：1トレⅢ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文

20　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文

21　出土位置・注記：3・4トレ拡フク　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文

22　出土位置・注記：1トレ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文

23　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，太沈線文

24　出土位置・注記：4トレ周　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，太沈線文

25　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：太沈線文

26　出土位置・注記：1トレⅢ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：太沈線文

27　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文

28　出土位置・注記：1トレⅢ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文

29　出土位置・注記：2トレ溝　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文

30　出土位置・注記：1トレⅢ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：太沈線文

31　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：太沈線文

32　出土位置・注記：1トレⅢ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：太沈線文

33　出土位置・注記：1トレⅣ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：太沈線文　備考：胎土に白・金雲母を含む。

34　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：太沈線文

35　出土位置・注記：3・4トレ拡フク　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：太沈線文

36　出土位置・注記：1トレⅠ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：太沈線文

37　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：太沈線文

38　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：太沈線文

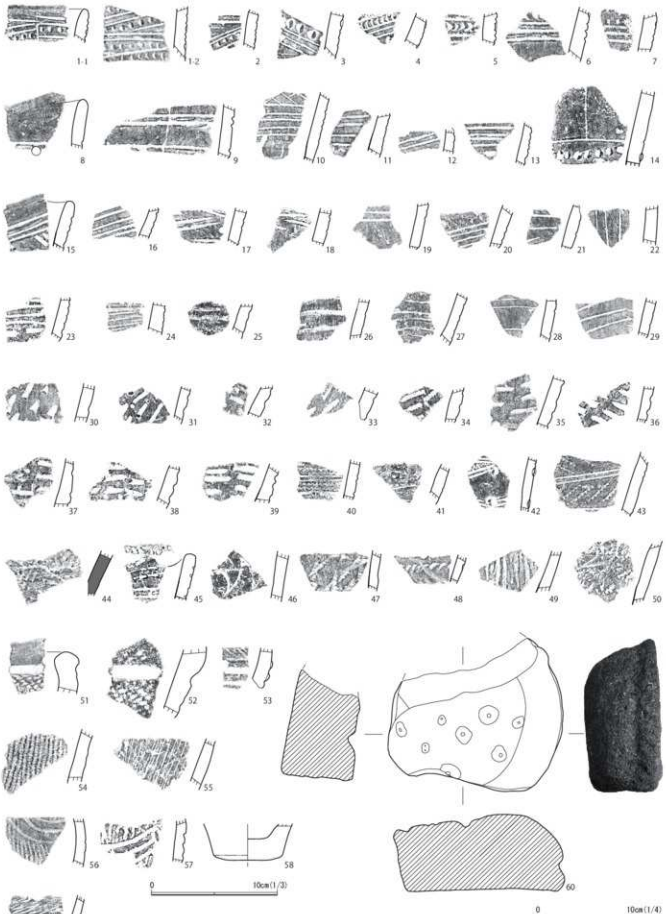
39　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：太沈線文

40　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，貝殻腹縁圧痕文

41　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，貝殻腹縁圧痕文

42　出土位置・注記：表採　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器種：深鉢形土器　文様：細沈線文，刺突文

43　出土位置・注記：1トレⅣ　時代時期：縄文時代早期(田戸下層式)　器



第７図　調査区出土の縄文時代･弥生時代の遺物

種:深鉢形土器 文様:細沈線文、貝殻文

44 出土位置・注記:3・4トレ拡フク、1トレⅣ 時代時期:縄文時代前期 器種:深鉢形土器 文様:単節斜縄文(LR)カ 備考:胎土に繊維を含む。

45 出土位置・注記:表採 時代時期:縄文時代前期(浮島式) 器種:深鉢形土器 文様:口唇部刻み、押引文(半截竹管)

46 出土位置・注記:表採 時代時期:縄文時代前期(浮島式) 器種:深鉢形土器 文様:貝殻波状文 備考:胎土に骨針を含む。

47 出土位置・注記:4トレ周 時代時期:縄文時代前期(浮島式) 器種:深鉢形土器 文様:貝殻波状文

48 出土位置・注記:4トレ南 時代時期:縄文時代前期(浮島式) 器種:深鉢形土器 文様:変形爪形文

49 出土位置・注記:1トレ□ 時代時期:縄文時代前期(浮島式) 器種:深鉢形土器 文様:撚糸文カ

50 出土位置・注記:表採 時代時期:縄文時代前期 器種:深鉢形土器 文様:縄文(LR)

51 出土位置・注記:1トレⅢ 時代時期:縄文時代中期(加曽利E式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文、複節縄文(LRL)

52 出土位置・注記:拡フク 時代時期:縄文時代中期(加曽利E式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文、複節縄文(LRL)

53 出土位置・注記:拡フク 時代時期:縄文時代中期(加曽利E式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文、単節縄文(LR)

54 出土位置・注記:拡フク 時代時期:縄文時代中期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(RL)

55 出土位置・注記:表採 時代時期:縄文時代中期 器種:深鉢形土器 文様:条線文

56 出土位置・注記: 時代時期:縄文時代中期 器種:深鉢形土器 文様:沈線文、単節縄文(RL) 備考:胎土に骨針を含む。

57 出土位置・注記:表採 時代時期:縄文時代中期 器種:深鉢形土器 文様:沈線文、撚糸文(L)

58 出土位置・注記:1トレⅢ 表採 時代時期:縄文時代中期 器種:深鉢形土器 法量:底径56mm(残存率22%)

59 出土位置・注記:表採 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 文様:付加条縄文(R·S)

60 出土位置・注記:1トレ 時代時期:縄文時代 器種:石皿・凹石 材質:多孔質安山岩 法量:長161mm、幅185mm、厚81mm、重量2852g 備考:石皿の裏面を凹石として使用している。側面に回る溝は現存の形になる前に彫られており、凹石側から側面にかけて磨かれている。

東原遺跡（第３・４次）

Ⅰ　遺跡の概要

1　遺跡の位置と周辺遺跡

東原遺跡は，旧真崎浦本体から南に伸びる２本の侵食谷に挟まれた台地上に位置し，標高は約30mを測り，北側の水田面からの比高差は約20mに達する。縄文時代～奈良・平安時代までの複合遺跡であり，西端の一部で中世の東原館跡と重複する。

東原遺跡は本調査以前に２度にわたって調査がなされている。1989年度には茨城県教育財団によって，道路建設に伴う発掘調査が行われ，古墳～平安時代の住居跡11基，時期不詳の住居跡２基，溝跡５条，井戸跡１基が検出された。

1997年度には携帯電話鉄塔の建設に伴ってひたちなか市遺跡調査会による調査が行われ，縄文時代中期後半のものと考えられる土坑１基が検出されている。

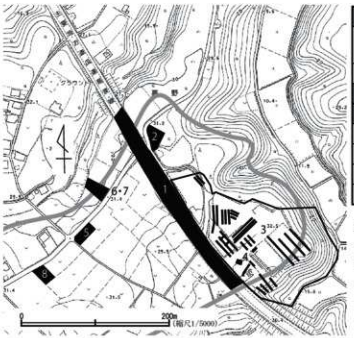
2　調査に至る経緯

ひたちなか市高野に所在する土地について，有限会社河野鋼鉄店より2006年５月に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書がひたちなか市教育委員会に対して提出された。現地踏査の結果，多数の土器片が採集できたため，当該地には東原遺跡が所在すること，工事着工の前に試掘調査が必要である旨を回答した。

第３次の試掘調査は，バックホウを投入して実施された。その後造成計画の変更のたびに追加の試掘を行っている。

第３次試掘調査の結果，第２図に示すとおりトレンチを32箇所に設定し住居跡と考えられる遺構９基，溝跡１条が検出された。教育委員会と事業者は協議を重ねた結果，造成計画の変更と建物の位置変更によって大半の遺構について現状で保存することが可能になった。しかし，溝跡については進入路部分に所在しており，進入路の造成については，最大で３ｍに達する掘削を行うため，現状保存は難しいと判断された。

よってこの部分に関しては記録保存のための発掘調査を行うことについて合意し，発掘調査はひたちなか市遺跡調査会に委託されることになった。第４次の発掘調査は進入路の工事にあわせて実施することとし，2007年５月28日に実施した。

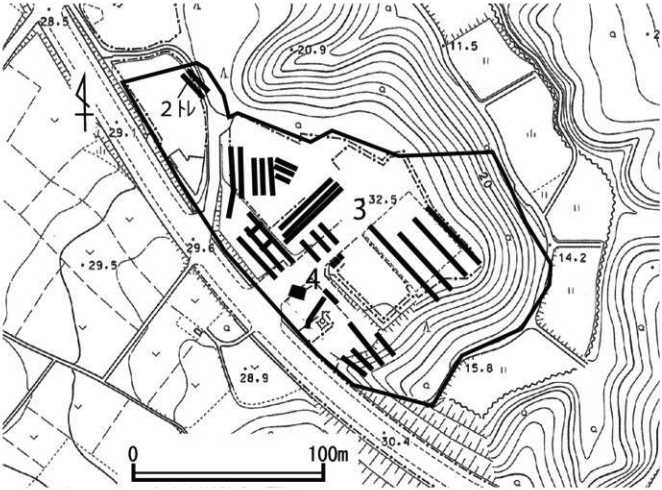


次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構
1	1989	県教育財団	本調査	住居13(古墳3，奈良5，平安1，不明4)，土坑7，溝5，井戸1
2	1997	調査会	本調査	土坑１（縄文中期）
3	2006	調査会	試掘	住居９，溝１
4	2007	調査会	本調査	溝１
5	2015	公社	試掘	なし
6	2015	公社	試掘	住居１（古墳後期）
7	2015	公社	試掘	なし
8	2016	公社	試掘	溝１

文献

１次:『東原遺跡・石伏南遺跡』茨城県教育財団第76集
２次:『東原遺跡発掘調査報告書』
３・４次:本報告
５～７次:『平成27年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』
８次:『平成28年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』

第１図　遺跡の位置と調査区



第２図　トレンチ配置図

Ⅱ　遺構と遺物

試掘調査で検出された溝跡付近の６m×８m 程度の表土を重機によって除去した。

以下に検出された遺構および出土遺物について詳述する。

溝状遺構　溝跡の主軸は北西から南東に向く。北西側が深く，南東に向かうにしたがって浅くなってゆき，調査区中央やや東側で途切れる。最大幅は１m，深さは0.4m を測る。底面及び壁面には細かい凹凸があり，平面形も不整形である。

出土遺物　第４図１・２は本遺構からの出土遺物である。１は瓦質土器の内耳土鍋片である。２は灰釉陶器の大形の長頸瓶と思われる。

３は溝状遺構に伴うものではなく，第３次試掘調査時に第２号トレンチから出土した須恵器杯である。時期は７世紀末から８世紀初頭に比定でき，ひたちなか市内の原の寺窯跡産の可能性が考えられる。

まとめ　今回検出された溝跡については，一部を発掘したにとどまり，全体の形状がうかがえず，その用途等については推測の域を出るものではない。その形状については，1989 年の茨城県教育財団の発掘調査時に検出された溝跡と断面形や深さに類似が認められるため，同様のものとしてよいであろう。

真崎浦水系付近の城館については，清水館跡・小山城・内城といった大規模な山城も存在しているが，足崎の甚兵衛屋敷のように規模が小さく，上層農民・小土豪の屋敷跡と考えられるものもある。東原館についても大規模な土塁・堀等の遺構が残っておらず，おそらくは，足崎の甚兵衛屋敷と同様に，上層農民あるいは小土豪の屋敷跡と考えるのが自然であろう，そのように考えると今回検出された溝跡については東原館に伴う遺構の可能性が考えられる。

溝状遺構堆積覆土

第１層　暗褐色土層(ローム粒少量含む)
第２層　暗褐色土層(ローム粒多量含む　ロームブロック少量含む)
第３層　暗褐色土層(ロームブロック・ローム粒多量含む　締まり有り)
第４層　褐色土層(ロームブロック非常に多量含む)
第５層　暗褐色土層(ロームブロック非常に多量含む)
第６層　ローム土
第７層　暗褐色土層(ローム粒多量含む)

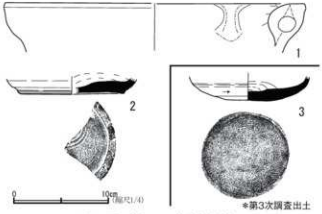
第３図　遺構配置図

出土遺物観察表

１　台帳:溝一括　材質:瓦質　器種:内耳鍋　残存:内耳部　法量:口径(31.5)，器高(5.0)　色調:外面黒褐色。内面灰色。　胎土:砂(白多，透多，黒少)

２　台帳:溝一括　材質:灰釉陶器　器種:長頸瓶　残存:底部20%　法量:器高(1.8)，底部(11.2)　色調:外面青～灰白色。，内面灰白～緑色。　胎土:砂(黒少)　技法等:底面回転糸切り。内外面とも釉がかかる。

３　台帳:第３次調査２トレ　材質:須恵器　器種:杯　残存:底部100%　法量:器高(2.9)，底径8.8　色調:内外面とも灰色　胎土:礫(白少)，砂(白多，透多，黒多)　焼成:硬質　技法等:外面底部回転ヘラ削り。　使用痕:―　備考:原の寺窯跡産か。



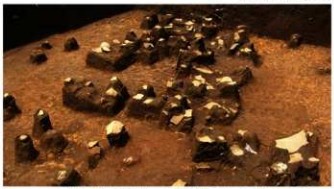
第４図　第３・４次出土遺物

写　真　図　版

１　遺構確認状況

２　第1号住居跡調査状況

３　第1号住居跡遺物出土状況（南西方向から）



４　第1号住居跡遺物出土状況（北東方向から）

５　土器（第17図２）・石器（第28図５）出土状況

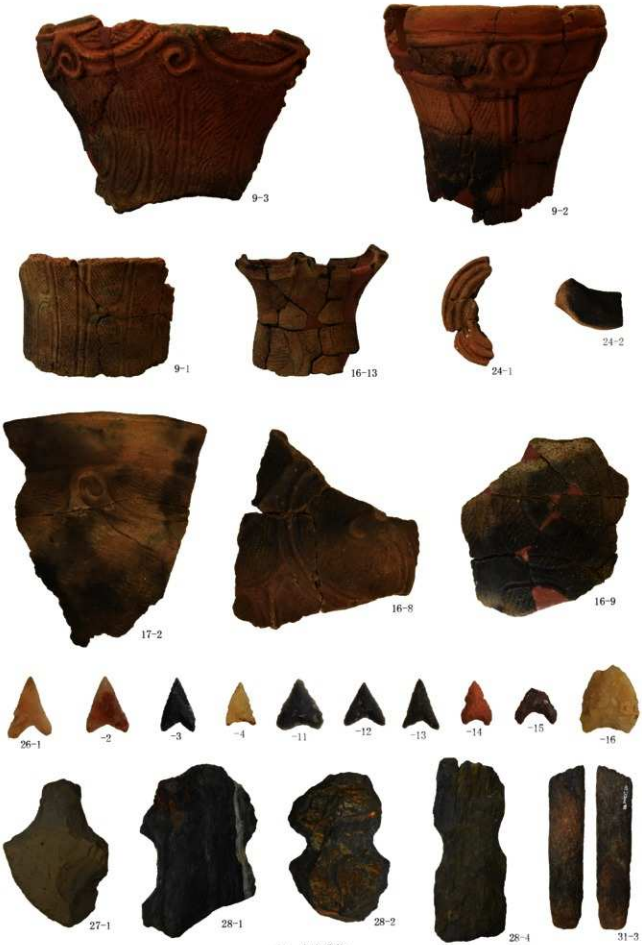
6　第１号住居跡完掘状況

7　炉址検出状況（２つの埋設土器）

8　炉址検出状況（石組と埋設土器）

9　埋設土器（第９図１）検出状況

10　埋設土器（第９図２・３）検出状況


9-3
9-2
9-1
16-13
24-1
24-2
17-2
16-8
16-9
26-1
-2
-3
-4
-11
-12
-13
-14
-15
-16
27-1
28-1
28-2
28-4
31-3

11　出土遺物

図版４　　松原遺跡１

１　第１号住居跡

２　第１号住居跡遺物出土状況１

３　第１号住居跡遺物出土状況２

４　第１号住居跡遺物出土状況３

５　第１号住居跡遺物出土状況４

６　第２号住居跡

７　第２号住居跡遺物出土状況１

８　第２号住居跡遺物出土状況２

1　第２号住居跡遺物出土状況３

2　第３号住居跡

3　第４号住居跡

4　第４号住居跡遺物出土状況１

5　第４号住居跡遺物出土状況２

6　第５号住居跡

7　第５号住居跡遺物出土状況１

8　第５号住居跡遺物出土状況２

図版６　松原遺跡３

１　溝状遺構

２　土坑

３　出土遺物

１　石室全景（南から）

２　石室全景（西から）

図版８　相対古墳群２

１　前室（奥壁側から）

２　玄門部閉塞状況２

３　墓道と周溝

４　周溝

５　古墳出土遺物

1　調査区全景(北から)

2　溝状遺構確認状況

3　溝状遺構

4　溝状遺構セクション

5　ピット

報　告　書　抄　録

フリガナ	キミガダイイセキ　マツバライセキ　アイタイコフングン　ヒガシハライセキ
書名	君ヶ台遺跡（第７次）松原遺跡（第４次）相対古墳群（第２次）東原遺跡（第３・４次）
著者名	石井　篤，稲田健一，菊地順子，栗田昌幸，斉藤　新，鈴木素行
編集機関	ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
発行機関	ひたちなか市遺跡調査会
発行機関所在地	茨城県ひたちなか市東石川２丁目10番１号
発行年月日	2019年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	備考
		市町村	遺跡番号						
君ヶ台遺跡（きみがだいいせき）	ひたちなか市中根	08221	011	36°38′33″	140°56′33″	21.0 m	2006061～0630	64 ㎡	
松原遺跡（まつばらいせき）	ひたちなか市田彦	08221	037	36°41′16″	140°51′43″	27.0 m	20090126～0303	320 ㎡	
相対古墳群（あいたいこふんぐん）	ひたちなか市金上	08221	114	36°37′43″	140°54′34″	22.0 m	19880418～0423	80 ㎡	
東原遺跡（ひがしはらいせき）	ひたちなか市高野	08221	061	36°43′38″	140°55′41″	30.0 m	20070528	55 ㎡	第３次は2006年

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な出土遺物	特記事項
君ヶ台遺跡	集落 遺物包蔵地	旧石器時代 縄文時代	住居跡　1基 溝状遺構　1条	縄文土器 土製品 石器 石製品	「男根状石製品」が出土した。
松原遺跡	集落 遺物包蔵地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 近世	住居跡　5基 溝状遺構　1条	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 銭	古墳時代前期の集落跡。
相対古墳群	古墳 遺物包蔵地	縄文時代 弥生時代 古墳時代	古墳　1基	縄文土器 弥生土器 石器 須恵器	7世紀の直径約10 mの円墳。切石を使用した横穴式石室。須恵器は台付長頸瓶とフラスコ形長頸瓶。
東原遺跡	集落 遺物包蔵地	縄文時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 中世	溝状遺構　1条	須恵器 瓦質土器	

要　約	君ヶ台遺跡は，本郷川流域に位置する縄文時代中期の貝塚を伴う集落跡であり，既往の調査で「加曽利Ｅ３・４式」の住居跡，「加曽利Ｅ２・３式」の斜面貝塚が確認されていた。今回の調査では，「加曽利Ｅ２式」の住居跡が検出され，斜面貝塚を形成した集落跡の一端が捉えられた。 松原遺跡は，中丸川の中流域に位置し，台地縁辺部に位置する古墳時代前期の遺跡の三反田遺跡や武田遺跡群と比較すると台地の奥まった場所に位置している。よって，今回の調査では，市内の古墳時代前期の集落が台地縁辺部だけでなく，小河川の奥にもあることが判明したことになり，この成果は注目される。 相対古墳群は，三反田台地の中丸川左岸の台地縁辺部に位置している。古墳は２基確認されている。今回の調査では，第１次調査で確認されていた周溝と今回確認した周溝により古墳の規模が明らかとなった。また，埋葬施設の横穴式石室を検出した。 東原遺跡は，新川が流れる旧真崎浦の低地から南に入り込む小支谷の台地縁辺部に位置する。過去の調査により住居跡が検出されているが，今回の調査でも住居跡が確認され，集落跡の広がりを確認することができた。

君ヶ台遺跡（第７次）
松原遺跡（第４次）
相対古墳群（第２次）
東原遺跡（第３・４次）

2019（平成 31）年 3 月 31 日発行
編　集　ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
発　行　ひたちなか市遺跡調査会
〒 312 － 8501　茨城県ひたちなか市東石川 2-10-1
印　刷　株式会社 高野高速印刷
〒 310・0035　茨城県水戸市東原 2-8-1